



よふの
みのり
2023年3月27日

マンガ大賞2023
これ描いて死ね
ありがとうございます!!

マンガ大賞2023決定!
選考員コメント掲載!

マンガ大賞
Cartoon grand prize
2023 マンガ読みが選ぶ2022年の一推!!

マンガ大賞2023 大賞受賞作品

ゲッサン / 小学館

「これ描いて死ね」とよ田みのる

選考員コメント・1次選考

■ 作者推しなので過去の全作品読んできてるわけですが、作者自身のマンガ制作に対する思いが投影されまくっているなと思います。個人でも仲間とでも、モノ作りは本当に素晴らしいことだと改めて感じられる作品でした。1巻の巻末に入っているロストワールドは、「ラブロマ」を読んだ方にはハッとさせられる内容が含まれていますのでそちらも是非。

会社員 / 三浦佑樹

■ とよ田先生のマンガ愛が詰め込まれて、あふれ出している漫画創作マンガ。1巻2巻の巻末に掲載された「ロストワールド」で、とよ田先生（をはじめとする漫画家さんたち）が、「どいつもこいつもおもしろさで殺す！」という気概で描かれているのがわかりましたが、まだまだ読みたいので、これ読んで死ねない。

Tokyo Otaku Mode / モリサワタケシ

■ ひとつのことにかける純粋な情熱が、作品の舞台である島の海のように輝いている。一筋縄ではいかない登場人物全員の唯一の共通点がマンガ愛であるのがよい。

医師 / 岸本 倫太郎

■ とよ田先生の作品を外で読むのは危ない、かなりの確率で泣かされます。今作品も全年齢対応な感じのかわいい絵柄なのに急に心にブツ刺さる描写やセリフが出てきて不意に涙が…。まっすぐなキャラクター達が本当に眩しい！

会社員 / 小野塚博之

■ 前作『金剛寺さんは面倒臭い』からの『これ描いて死ね』は予想外！漫画愛が溢れまくった本作が世界中のマンガ好きに届け～♪

ロングランプランニング / 小森和博

■ 手島先生が泣いたり笑ったり怒ったり。素晴らしすぎるヒロインで困るくらい。

朝日新聞記者 / 小原篤

■ 東京の離島に住む、漫画好きの高校一年の主人公が初めて創作マンガ同人誌即売会コミティアの会場に来て、机を並べる全ての参加者が自らの作品を描いて参加していることに衝撃を受ける。「そっか、漫画って、自分で描けるのか」という発見に、まさにアルキメデスが「ユリイカ！（私は見つけた!）」と叫んだシーンが脳裏に浮かぶ。全てはここから始まるのだ。

コミティア実行委員会会長 / 中村公彦

■ 伊豆大島出身のとよ田みのる先生のまんが道。マンガを描いていこうという女子高生たちと、一度は志したマンガ家の道を辞めて教師になった先生という複層的な語りが良い。相変わらずテンション高く、かわいらしく、切実。

マンガ読み / サイトウマサトク

■ 憧れのマンガ家を追ってコミティアに参加する高校生、過去と向きあうべくコミティアに参加する元マンガ家、それぞれの熱さが眩しい。

マンガ研究 / ライター / 会田洋

■ 漫画を創作する喜びにあふれた部活動や友情がキラキラと眩しく感動する。漫画内漫画も良い。伊豆大島に遊びに行きたくなりました！

主婦 / 岸本しのぶ

■ とても普通な感じの高校生3人が、とても魅力的です。

会社員 / 林礼春

- マンガに救われて、マンガって描けることを知る。マンガの嘘と、本当のお話。作中作がまた最高です。

オフィスオーガスタマネージャー / オフィスオーガスタ樋口健

- 作者の円熟と持ち前のフレッシュさがちょうどよく融合していて新たな代表作になる気配を感じる。

ときどきライター / 縣丈弘

- この漫画は、半分はコロナ禍で大変だったであろう同人イベントコミティアへのエールの気持ちで描かれているのではないだろうかと感じる。とよ田先生の漫画はいつも愛が溢れているが、この作品ももれなく大きな愛を感じられます。あと赤福ちゃんのツッコミがいちいち可愛いし面白い。

bar 図書室店主 / 岡部愛

選考員コメント・2次選考

- とよ田先生の持ち味がいつもながらに発揮された、良質で前向き、ひたむきな「マンガ道」。マンガネタがちよいちょい盛り込まれてくるのだけど、内輪受けの雰囲気ではなく、読者に開かれて感じるのが心地よい。

マンガ読み / サイトウマサトク

- マンガが好きだからマンガを描きたいと思った時、今だったらネットを見たり本屋を回ったりすれば、道具の揃え方から絵の描きかたまで紹介されたサイトや本に容易に出会える。すぐにもマンガを描き始められそうな気がするけれど、そうやって描かれた漫画が面白いかどうかは別の話。何を描きたいのか。何で描きたいのか。そういった気持ちに乗っていないマンガが読む誰かを感動させられるかは微妙なところだ。とよ田みのる『これ描いて死ね』の安海相という伊豆王島に住む女子高生は☆野0というマンガ家が描いたマンガがとても大好きで、貸本屋で借りては読んで返してまた借りて読むくらいのめりこんでいた。この段階ではあくまでも読者としてマンガへの熱い思いを持っていただけの相だったが、☆野0による新刊が同人誌即売会のコミティアで頒布されると知って、矢も楯もたまらず伊豆王島から高速船で東京へとかけつけ、コミティアの会場に行きついたら気がついた。マンガって自分でも描けるんだ。マンガ好きなら当たり前すぎることで、離島でマンガを借りて読んでいただけの女子高生は知らなかった。そして思い立った。自分でもマンガを描いてみたいと。そうやって始まる相のストーリーは、友人を巻き込みマンガに興味を持っていた美術部員を巻き込み学校の先生まで巻き込んで、自分たちでマンガを作りコミティアで売るといったところまで突き進んでいく。これも同人誌の世界に触れている人なら珍しくないことでも、そうでない大勢の人にとっては驚きの展開。そこにどうやって進んで行けば良いのかを『これ描いて死ね』というマンガは教えてくれる。同時に、マンガにとって必要なことも。絵が綺麗なことに越したことはないけれど、その絵によって紡がれる物語が人を突き動かすようなものでなければ、ひとりよがりになってしまう。思いを物語にする原作者がいて、その思いを汲み取って最良の絵によって表現する絵描きがいて、そうやってできあがったマンガのどこが良くてどこが悪いかを感じ取る読者がいて、さらにライバルまでもいる関係を導き手が引っ張っていくことで、マンガはより高くより遠くへと進んでいける。そんなことが『これ描いて死ね』からは伝わってくる。藤子不二雄の誕生から成長が綴られた自伝的マンガ『まんが道』でマンガの世界の素晴らしさと大変さを味わい、そして『バクマン。』でやはり素晴らしさと厳しさを感じ取ってきた世代の次が、改めてマンガと向き合いマンガの本質を問い直してマンガに挑みマンガを広めていくきっかけになる。そんな作品だ。

書評家 / ライター / タニグチリウイチ

- まず、なによりも好きなのが先生の描く作品の「優しさ」なんです。とよ田みのる先生の作品はどれも優しさで溢れています。単行版から「優しさ」が漏れているんです。ダダ漏れです。登場するキャラクター、セリフ、絵も全て優しい。読後は幸せな気持ちで満たされます。それでいてめっちゃ面白いので無敵です。なぜそんなに先生の漫画が面白いのかが、この漫画を読んで分かりました。読者を本気で殺す気で描いているんです。「これ読んで死ね！」と、自分の漫画の面白さで読者を殺そうとしているんです。「殺す気で描いた世界一優しい漫画」という矛盾した世界は、先生の素敵な作画でキラキラして見えます。こんなに素敵な漫画を世に出してくれて本当にありがとうございます。

吉本興業 / ムーディ勝山

- 漫画への愛がたっぷり詰め込まれ、描かれている作品。漫画を描く立場での愛、読む立場での愛のそれぞれを強く感じ、読み終えた後に幸せな気持ちになれた。これ読んで死ね（死なないで）。

会社員 / もちづき かずよし

- とよ田先生による、描き手として、そして読者としての、すべての感情が詰まったマンガ愛マンガ。「漫画なんてなんにもならない」「時間の浪費、無駄」「端的に言えば全て嘘」。第1話において機関銃のように放たれるマンガ否定から、表裏一体となったマンガ愛が透けて見えて愛おしいわけで。これから主人公たちがどうやって、「マンガって最高だ！」ってことを証明するのか、無関係ではいられないですよ。何千冊と読んできた僕らは、それが時間の浪費でなかったことを知っているから。

Tokyo Otaku Mode / モリサワタケシ

- 何とも面白いマンガです。創作における産みの苦しみを涙ながらに表現している訳ではなく、すこしのファンタジーとたくさんの熱い想いで描かれています。あっ このコミックの表紙取った時のちょっとした喜び、とても好きです。

(株) エフ・ジェイエンターテインメントワークス / 阿部 大介

- 読むことも描くことも、マンガへの愛に溢れていて、その愛はストーリーのみならずコマ割りやら台詞やら、マンガならではの！という表現で描かれたページの隅々から伝わってくる。とにかく「楽しい！」先行で物語が進んでいくのが本当に気持ちいいです。そして、その傍らで創作の厳しさも教えてくれる『先生』の存在が絶妙。素敵な先生に出会える作品は、素敵な作品です。ぜひ、これ読んで、ね！

会社員 / 伊東敬祐

- 漫画への愛や敬意をビシバシ感じるのももちろんのこと、独特な画面づくりとキャッチーさがバランスよく読める作品です。作り手の気概や迫力というものを言葉から構成から絵から思い切り表現されていて、泣きそうになりました。とよ田先生の作品は「ラブロマ」から好きで読んでいましたが、近年表現がどんどん大胆に、独特の手法を突き詰めていて、そのゆえにちょっと読みづらさを感じることもあったのですが、今作ぐらいだと人にも勧めやすいというのも正直なところ。それにしても、相変わらずキャラクターがみんな愛せる漫画を描くなあ。

ヘリックス・クリエイティブ(株)WEBデザイナー / 河本 智芳

- マンガを読むことのよろこび、マンガを描くことのよろこび、マンガを通じて友情を育むよろこび。

マンガ研究 / ライター / 会田洋

- ざっくり言うと、学生が漫研を作り活動している話なのですが、自分にはこんなにもキラキラとした部活動の記憶は無いのに、等身大として、一緒に笑い悩み泣くような錯覚をしてしまうほど、ストーリーに没入できる漫画です。ほんわかと可愛いらしい絵柄とストーリーは老若男女にオススメ出来ますし、漫画好き、創作活動に興味がある方であれば必ず刺さるものがあると思います。私は読んでいて、いつのまにか涙が出ている事が何度もあり……この優しいキラキラした物語が長く長く読めますように願っております！

主婦 / 岸本しのぶ

- 漫画を通しての繋がりや救済がドラマチックに描かれていて引き込まれる。

医師 / 岸本倫太郎

- 島という大自然の中で、明るくて前向きな少女たちが周りポジティブな交流を通じて自らが憧れたマンガ創作にまっすぐに打ち込む、というすごいストレートなプラスの感情にあふれた作品。こんな根源的な感情を描いて、オタクっぽい趣味を入れたりせずに説教くさくなってないし、お涙頂戴の人情劇にもなってない！それは、核にあるのが、「同情は創作の敵だと考えています」という台詞に代表されるような、創作そのものの、痛さ・強度・僥倖だからじゃないだろうか。この真摯なテーマは、ほとんど反骨心をもって今までの制作物は描いてきたけど、これをとことん明るい道具立てで描いている気がする。これ、いきなり次巻で終わってもおかしくない緊張感もあるんだよねえ…！どうなるんだろう！

ニッポン放送アナウンサー / 吉田 尚記

- あつい！！人の情熱は誰かを動かす。その表現が素晴らしく、押しつけがましい「泣かせる」ではなく、自分の心のニッチな部分をこれでもかというほどぶっ刺しにきます。愚直で、理解を得にくくても、その生き様は他のだれのものでもなく。表情にもクスッときます。

図案家 / 橋本寛子

- ズバリ！漫画を描く漫画！ですね。好きなものを「すごい好き！！！」と素直に言える単純でアツい熱は読んでいて気持ちがいい。「何を描くか決めて下書きしてペン入れして消しゴムがけしてトーンを貼って削ってコピーしたらあら不思議！私の絵も漫画っぽくなる！」と当時漫画同好会の部誌に飛び入り参加して喜んでた中学生の頃を思い出しました。尊い記憶です。読み切り作品「ロストワールド」は本作に触れる前にTwitterで流れてきたのを既に読んでいて面白いな？と思ってたので、「あの作者様か！」と読んで納得しました。その読み切りも含めて手島先生のオールマイティぶりはなんなんでしょうね。憧れのヒーローかつ鈍感ヒロインかつやれやれ系主人公にしか見えないんですよね…。あと前向きな殺意は何事にも活かされますよね！分かります！！

フリーランスデザイナー / 金輪英恵

- 女子高生の部活もの、といってしまうと数多あるわけですが……。漫画に救われた漫画の世界の彼女たちが漫画を目指す。ペン先に憧れと殺意をのせて。すべての漫画読みに捧げられた漫画の漫画による漫画のための漫画。これ読むまで死ぬな！

教員 / 戸田穠

- 漫画を生み出そうとする創作のエネルギーに圧倒されました。魂が込められてるのがバシバシ伝わってきて漫画の楽しさを再確認できました。正直に申し上げれば、今までとよ田先生の作品に詳しくなく謝罪したい気持ちでいっぱい。伊豆大島の匂いや原風景が伝わってくる絵も美しかったです。

出版社営業 / 佐々木つむぎ

- とよ田みのる先生の漫画に対する愛、情熱、個人投影含めて凝縮された作品だなと思います。自分も同人作品制作を長く続けている立場なのですが、1つの目標に対して同じ志を持った仲間と作品を作っていることは素晴らしいことだなと改めて思いました。そしてその過程を見守る手島先生がとにかく尊いです。

会社員 / 三浦佑樹

- 大人がどう子供を見守るのかという視点があたたかい。振り返ると『ラブロマ』からは20年。僕も少しは大人になりました。

往来堂書店 / 三木雄太

- マンガへの愛おしさが溢れています。最高です。

教師 / 持丸宏司

- 単純じゃないけど短く直球なセリフが刺さりまくるのは「金剛寺さんは面倒臭い」と一緒。青春もの部活ものなので共感ポイントはより広がった感じがします。とよ田みのるさんの絵のクセのある味（悪い意味ではない）に藤子不二雄(A)さんっぽさを感じていたので、「まんが道」に重なるこの題材はツボでした。へぐっ！

朝日新聞記者 / 小原篤

- 大好きなことに向かって一直線に頑張れる主人公たちの若さや真っ直ぐさがとにかく眩しくて愛おしい。自分が歳をとったせいかわ大人側のキャラについつい感情移入してしまい、特に先生の描写には読むたびに何度も心を動かされました。絵柄やキャラの独特な表情もとても可愛くて、老若男女誰にでもおすすめしたい作品です。

会社員 / 小野塚博之

- コミケじゃなくコミティアってのが、この作品のミソというか、アイデンティティなんだな？と感じる要素満載でとてもいいです。先生の過去エピソードとのザッピングもボディブローのように効いていて、創作の苦しみや葛藤、喜びや依存性などがコミカルに描かれていて腑に落ちやすい印象です。

1616屋 / 杉本 善徳

- ああ、青春が、青春が、この漫画にはこれでもかと詰まっています。最高の仲間たちと、最高の指導者と、好きなことをとことんやる！読んでいて心が晴れやかになる「漫画の漫画」です。

音楽家 閃き堂店主 / 谷澤智文

- まだひとりでは上手くマンガを描くことが出来なくても、自分の中にあるものを表現するためにひたすらに筆を走らせる主人公の姿を見ると、大好きなものへ情熱を続けるってとっても素敵なことなんだなあと、幸せな気持ちになります。

会社員 / 竹本 慧

- うおー、横溢するマンガ愛、創作愛が素晴らしい。全てはここから始まるのだ。「お前らみんな殺す!! 面白さで殺す!!!」は名セリフだと思う。

コミティア実行委員会会長 / 中村公彦

- とよ田先生の作品はいつも「大好き」の気持ちが人間の原動力になるということがテーマになっているなど感じます。このマンガは特にそれが強く描かれているように見え、読んでいて心が震えっぱなし。とよ田先生は、本当にマンガが大好きな方なんだというのが伝わります。わたしはマンガは描けませんが、これを読むたびに「マンガを創る」というワクワクする体験と一緒にさせてもらっています。

伊吉書院 類家店 / 中村深雪

- 相ちゃんの圧倒的主人公感。

公務員 / 東くるみ

- とことん漫画の技法を愛して楽しんで描かれている、漫画の魅力にとりつかれた漫画描きたちのお話。インクの汚れやホワイトの修正跡、漫画の原稿用紙って思ってる以上に大きいよね…なんて、まるで目の前で完成したての原稿を読んでいるような、熱さやワクワクが伝わってくる作品。登場人物たちの行動や感情を読んでいる自分と、作品の中に入り込んでこの登場人物たちと漫画を作っているような錯覚、ジェットコースターみたいに自分が今いる場所が目まぐるしく変わっていくような。先生の過去ももっと読みたい！漫画って、面白いものですよね！

元書店員 / 内野智未

- マンガの中でマンガを読めて、そのマンガも最高です。芸術です。

オフィスオーガスタマネージャー / 樋口健

- 始まったばかりの純粋な好きが眩しい。好きな物の話をできる友達ができたり、漫画を描いたり、コミティアに参加したり、いろいろな初めてが丁寧に描かれていて目頭が熱くなりっぱなしでした。宝物のような時間。私も漫画のキャラクターに助けられたこと、背中を押してもらったことがたくさんあります。そして先生がそうであるように、好きだけではいられなくなるのもわかる。私も好きを仕事にしているので、自分にもある好きという気持ち、出会ったころの気持ちを大切にしたいと思いました。技術は絶対にあつた方がいいけどそれだけではないですよね。作り手の愛情や熱意は伝わるもの。空想上のキャラクター同士がふれ合う様子にもときめきました。夢があつて素敵。

声優 / 富岡美沙子

- うわ〜刺さった〜ロストワールドで刺さった。刺さりまくった。急に心に刺さってびっくりした。物騒だけど「殺す」なんだわ。これ漫画だけじゃない、仕事もそうなんだ。はあ〜…そうなんだよな〜、そういうことだったんだ。殺すという意味が必要なのね。確かにそうだ。そうだった。「自分の殻を破る」なんて表現があるけど、それって「何もしなければそのまま恒常性を保ち続ける自分」を否定して粉碎するってことなのよね。清水の舞台から飛び降りる的な？ 2話で先生が言ってる「にんじんを追いかけるガッツ」って言ってるのは、殺したり、破ったり、飛び降りたりするガッツのことなんだろうな。就職とか結婚とか、車買うとか家買うとか、遡れば恋愛の告白とかだってそうだ。エネルギーが、ガッツが必要で、「それまでの生活」から変わる時。これが「自分の心で感じたままに物語を動かす時」なんですね…20年経ちましたがやっとわかりましたアーロンさん…。ポコ太の言う「こんな時漫画の主人公なら？」ってセリフ、もう今の時代ならみんな共通して受け取れるんじゃないかな。マンガでもアニメでも映画でも、そういう創作物が心の支えになっている時代だ。登場人物がみんなエネルギーに満ち溢れていて、熱くて脳が揺れる揺れる。ポコ太とニャン太が握手したところでジーンときちゃったぜ。よーし明日からも仕事で殺す!!! この仕事で殺すつもりで仕上げてるから死ぬわいッ

会社員 / 布施直人

- 島の中で出会う人々が濃すぎて、そんな事あるかって展開が内容をキラキラさせている。好きなマンガの先生が担任で、マンガを描ききっかけになり仲間が増えていく。マンガの中がマンガだらけで素晴らしい！

デザイナー / 平沼寛史

- 日常のなかに漫画ならではの表現、新しいものを見た気がしました。純粋な田舎の女の子を応援したくなって、気持ちも若返って明日から私も仕事を頑張ろうとしようと思う、背中を押してくれるそんな漫画。

ヘアメイク / 北原由梨

- 元々コミティアが好きなこともあり、わかる、わかる、わかる～！！と共感しながら、何度も面白く読みました。漫画を描き始めたばかりの安海ちゃんと藤森さんの初々しい気持ちはとても応援したくなるし、漫画を描くのは趣味の範囲に留めておくことと釘を刺す元漫画家の手島先生が、これからどんな気持ちで彼女たちを見守っていくのか、先生が再びペンを取る日が来るのか？ということを見ると、すごくわくわくします。作品からずっと漫画に対する愛と哲学が感じられて、とても楽しいです。

主婦 / 堀江千秋

- 自分自身は創作をしない人間なので、わかるわかる！という共感ではありませんでしたが、創作している人たちの頭の中を垣間見るような気持ちになりました。漫研メンバーの中で、赤福が漫画を読んでいるだけという構図が好きです。彼女には読者という役割があり、そこも含めて漫画なんだと思わせてくれるようで、少し嬉しかったです。漫画を描く人、読む人、漫画との関わり方やその深さは人それぞれで、何が正解ということもないですが、人の想いが乗ったものを受け止めているんだという気持ちでいたいと思わせられるお話です。

会社員 / 堀尾素子

- もちろんとよ田みのる先生の漫画家漫画が面白くならないわけがなく、いつものとよ田流堅物キャラが衝動と情熱だけじゃ辿り着けないところに配されてるところも絶妙。フィクションに救われることとフィクションを創造することは直結しているが、しかしそのあいだには殺意なくしては越えられない恐ろしい断崖が横たわっている。週刊スピリッツに掲載された短編「デビュー」の“殺意”には圧倒され、勇気づけられましたが、それがこうして長編まんが道を成すことがうれしすぎます。個人的に石龍さんのキャラクターがとってもいいです。

会社員 / 末永龍介

- 安海、藤森、赤福は、アイデア、画力、客観性というマンガ家に必要な三つの才能の擬人化みたいで、それぞれ個性的でこの3人のやりとりを読んでるだけで飽きない。ライバル的なポジションにいる石龍さんは、安海さんたちがやってるマンガ作りとはまた違う部分を見せてくれる。あと、マンガ家の経験がある手島先生がいることで、より深くこの作品を理解できる。これからどんなキャラが出てくるのか。はたまた、今までのキャラのどんな違った面が見られるのか。

鳥取県立図書館 / 野間勤

- 何かを作りだす人はもちろん、これから何かを作るかもしれない人、今まで特に何も作りだしてこなかったと思っている人(要するに世の中の皆さん)に読んでいただきたい作品。全員が社会的に成功するわけではない創作の喜びと難しさを多彩な登場人物が丁寧に伝えてくれます。

MIGIMIMI SLEEP TIGHT / 涼平

- 漫画を描く漫画の作品は何作品かありますが話しの持って行き方など続きが一番気になる作品です

tetote 代表 / 力丸 真

- これ以上ないくらいにストレートな「まんがが好き！」という気持ちがひしひしと伝わってくる作品です。喜びも葛藤も、全部まんがが好きだからこそ。私ももっともっとたくさんのまんがに触れたい！という気持ちになりました。

会社員 / 林礼春

- 漫画創作漫画は癖があるものが多いが、正統派で読ませる

会社員 / 齋藤隼

- ジリジリとタイトルコールの足音が近づいてくるのを見守りたい。これまた作者の新たな代表作となる気配。

ときどきライター / 縣丈弘

マンガ大賞2023 ノミネート作品

週刊少年ジャンプ / 集英社

「あかね噺」馬上鷹将、末永裕樹

選考員コメント・1次選考

- 個人的にこの一年で出会えて一番良かった作品です。ジャンプで「題材が落語・女性主人公、！なんて新しい切り口なんだと、驚き、好奇心。落語パートでは聴こえないはずの音が、捲し立てるように、艶やかに、賑やかに、聴こえる感覚になる画力。何より王道の熱量があり、読んだ後の爽快感が最高です！

TEAM SHACHI / 秋本帆華

- 主人公のキャラに相まって、作品全体がきっぷがいい！あちこちに散りばめられた魅力的な登場人物とあかねの今後を楽しみに追いたい。

ロングランプランニング / 小森和博

- 2022年の鮮烈さでいったらこれか。女子高校生、真打ちを目指す。主人公が女子高校生なのもあって、とにかく華やかだし読んでいて気持ちが良い。挑戦する物語、なにごとに挑む物語としての輪郭が鋭い気がする。週刊連載なんで足速い。今年エントリーできないともう来年ねえぞ。

ソフトウェアエンジニア / 第弐齋藤

- 挫折して業界から去った父の遺志を継ぎ、父に引導を渡した男を倒すために落語の修行を重ね、ライバルたちと切磋琢磨して腕を上げる・・・という、テンプレと言っていいほどの少年漫画のプロットに「落語」がうまく融合している。主人公が明るく前向きで、作品全体がさわやかで読んでいて爽快感がある。落語は同じ噺でも、演者の語り口によって個性が出るという演芸で、音楽漫画と同じく絵で表現するのは難しいと思えるが、そこも分かりやすく描いていて素晴らしい。

丸善ジュンク堂書店 営業本部 / 小磯洋

- 落語という題材だけで好きなだけに斜に構えてしまうのだが、これは恐れ入った。主人公あかねの本気が伝染してしまうほどの王道展開。熱い、熱すぎる！落語に大切なものは何なのかと思いながらも実はそんなものは、基本がおわりゃ個人で最後は勝手にするもんさ！ということはこの作品はちゃんと冒頭に説明してくれている。兄弟子の、師匠の凄さも伝わる一方、噺家あかねの凄さが一番伝わってくる。早く先が読みたい、そんな漫画がまた増えた。

October Beast 代表 / デザイナー / 北山 友之

- 父の落語を知らしめようと、噺家の世界に足を踏み入れる娘のお話。主人公の落語に賭ける熱意や、落語会の厳しさがマンガからよく伝わってくる。演目の説明はわかりやすく、噺家によって表現も様々。楽しみながら安心して読み進められる。何かに情熱を注ぎたいと思わせてくれる作品。

デザイナー / シンガーソングライター / 平松新

- 1巻ごとの読了後の満足感がとんでもないほど高い作品です。すごく美味しいものを食べた後のような、それに近いものを感じました。「落語」という古典ジャンルでありながら、この画面に占める文字数の多さでありながら、令和の時代でありながら、こうも読ませる絵力も特筆すべき点だと思います。すべてのカロリー高い！それがいい！

図案家 / 橋本寛子

- 女子高生？落語？少年漫画！絶対に混ざり合わなそうな組み合わせなのに超王道の少年漫画に仕上がっていて、とても面白いです。主人公の成長ぶりが楽しみで続きが読みたくなる。

主婦 / 岸本しのぶ

- 落語が題材のマンガは他にもあれど、ナマの落語を観るような噺家の表情や場の空気感まで読み手が感じとれるような描き方は筆舌に尽くしがたいものである。手にとって躍動感を感じていただきたい作品です。

(株) エフ・ジェイエンターテインメントワークス / 阿部 大介

選考員コメント・2次選考

- 落語家を目指す女子高生の復讐譚でもあり、成長物語でもある。ジャンプ的バトル要素をうまく落とし込んでいて勢いもあって良い。あかねの魅力が単純に絵的な可愛さでなく、落語家としての表情の多彩さ、ビビッドさにあるのが素晴らしいと思う。

マンガ読み / サイトウマサトク

- マンガで芸事を描くことは多分恐ろしく難しい。音楽が題材なら歌声なり楽器の演奏なりをいくら凄い上手い素晴らしいといった言葉で繕っても、その音が聞こえてこなければ人はなかなか納得しない。バレエのようなダンスでも同様に言葉ではダメ。だったらとジャンプをしている場面だとか回転している場面を迫真のタッチで描いても、それはやっぱり絵に過ぎないと思われてしまう。そうした難しさを知ってなお芸事がテーマになったマンガに挑むマンガ家たちが後を絶たないのは、踊りを目で見て驚き音楽を耳で聞いて震えた体験をマンガという表現の中で伝えたいと思うからだろう。音楽やダンスによって直接表現はできなくても、マンガという武器を使えばそれが出来ると信じているから挑み続けるのだ。そんなマンガ家たちの苦闘から過去、音楽ものでもダンスものでも傑作と呼ばれるマンガが生まれて来た。読めばそこにはどうして音楽に挑むのか、ダンスに取り組むのかといった演者たちの心があり、どうすれば素晴らしい音楽を歌ったり奏でたり、美しいダンスを踊ったりするのかを考え挑もうとする物語があって引き込まれる。自分が演者になったような気にさせられる。末永裕樹が原作を書き馬上鷹将がマンガを描いて「週刊少年ジャンプ」誌上で連載されている『あかね噺』もそんな傑作群に連なる可能性を持ったマンガだ。芸事に挑む少女を主人公にしたストーリーの中に、どうして落語に挑むのか、その落語を通して何を伝えようとしているのかが物語と絵によって、しっかりと伝わってくる。高座であかねが見せる仕草やする表情が、マンガでありながらも語られる噺をいま目の前で聞いているような気にさせてくれる。まだ二つ目にすらなっていない前座ながらもその才能を見せてくれるあかねだが、これが二つ目から真打ちへと昇進していった時に、その立場に相応しい芸を見せられるのかが目下の興味。それにそぐう物語を作り、表情や仕草を描いてのけることができるのかも。それが果たされてこそ、『あかね噺』は当代きっての芸事マンガとしてその名を歴史に刻むだろう。

書評家 / ライター / タニグチリウイチ

- 落語をテーマにした作品。私も一応、芸人をやっていますが（笑）落語には詳しくありません。詳しくはなくても一度は聞いたことのある「寿限無」や「まんじゅう怖い」という落語や、落語の師弟関係やその世界がとても分かりやすく、そしてとても面白く描かれています。女性が主役だと盛り上げる為に「女の分際で！」とか「女が手を出していい世界じゃねーんだよ！」的なセリフをライバルに言わせたくなるものですが、その手のアプローチがほぼ無くフラットに主人公が落語の世界と向き合って戦っているのが凄く良いなと思いました。歴史のある難しい落語をこれだけ少年誌で面白く、そしてちゃんと“少年ジャンプ”をやっている事にスタンディングオベーションで拍手を送りたいです。かつて「キャプテン翼」を読んでサッカー選手になったプロがいるように、10年後20年後にはスペインやフランスで「あかね噺」を読んでいたという海外の落語家が誕生しているかもしれません。

吉本興業 / ムーディ勝山

- 『落語』をテーマにしながらも、落語を知らない人が読んで楽しいと思える作品。主役脇役ともに魅力的なキャラクターたちがひしめき合い、テンポよく進む話の気持ちよさが素晴らしい。「第一話」の使い方が上手く、この一話があることで作品の魅力や説得力が何倍にも感じられた。

会社員 / もちつき かずよし

- 小学生時分から図書館で「目黒のさんま」や「寿限無」を読み漁った程度には、落語に興味を持っていたと思いますが、実際高座を見たのは数回だけと、ほぼほぼ落語に無関係の人生となっております。なので齧った知識でしかないのですが、同じ噺でも噺家さんによって受ける印象が違って、その差を楽しむことも落語の魅力のひとつであると、どこかで小耳に挟みました。あ、まだ挟まったら。さてさて（羽織を脱ぎながら）、あかね噺は、落語を題材としたマンガです。現在の落語の置かれた状況や、落語という伝統芸能を支える考え方が描かれているのも知識欲が満たされて楽しく、さながらバトルマンガのように、キャラの立ちまくった登場人物たちも魅力的。いや、「さながらバトルマンガ」ではなく、これはたいへんジャンプマンガらしい、正真正銘のバトルマンガですね。高座のシーンでは、表情ひとつ、仕草ひとつ、顔の向きひとつで、噺の印象を変えてしまう噺家の魅力を十二分に表現されており、特に作中で演じられる「寿限無」において、現在と過去、現実と記憶、高座と噺を自由に往来するという、マンガ特有の自由度でもって、単に喜劇で終わらない落語のエモさと、なんとも言えない読後感を味わうことができました。今年は寄席で、リアルな落語も楽しもうと思います。

Tokyo Otaku Mode / モリサワタケシ

- 既刊4巻で、導入から序盤のヤマ場までを読めるのですが、すごくうまい。一気に読んでしまいました。落語は個々の「噺」自体がそれぞれ物語を持つものなので、作品のストーリー展開と呼応や調和をさせる上でも、はたまたバトルものの必殺技のように各キャラクターがストーリーを大きく動かす切り札として盛り込むにせよ、一般的なマンガ作品よりも文章での説明が多く必要となります。マンガ作品としてのテンポを損なわず、それを適切に行うには落語に対するどれほどの深い理解が必要になるのか……序盤クライマックスに向けての流れで主人公が課せられる『寿限無』縛り』には驚かされました。新章に入り主人公の落語家修業も始まりましたので、今後の展開が楽しみです。

会社員 / やのこうじ

- 落語というテーマでありながら王道バトルヒーロー物のような熱量！！ノミネートで知り一気に読みましたが、少年誌らしい胸がアツくなる作品だと思いました。真打ちになれなかった大好きなお父さんの雪辱を晴らすべく落語家を目指す女子高生のストーリーですが、まるでバトルものを見ているかのような気持ちになるのは、テンポの良さ、敵(?)も味方も個性が濃く輪郭が際立っていて、それぞれがそれぞれの義を持って戦っているのが伝わってくるので説得力があります。これまた誰もイヤらしい奴がないので、どのキャラクターも大好き。ハラハラドキドキの展開というより、次はどう魅せてくれるんだろうというワクワクが強いので、安心して展開を楽しみにできるという点でもたくさんの人に楽しんでもらえるのではないかと思います。作中の落語のお話の表現も違和感なくスッと入ってきます。なによりも主人公である朱音のドストレートな主人公感、これぞ少年ジャンプ！！と嬉しくなりました。既刊5巻ですが5冊とは思えないほど濃密な展開で、漫画としてのパワーを感じます。出会えてよかった！！

公務員 / 宇田川結衣子

- 度々落語をテーマにした漫画はあるけれど、ここまで落語がスッと入ってくる漫画はなかなかなかった。特に3巻の寿限無をテーマにした話で、寿限無という落語について理解が深まり、主人公の名前の由来の演出も合間って泣けた。まさか寿限無で泣くとは！そしてジャンプ連載とあって、うまく少年漫画と落語の世界を融合させてあり、作りのうまさも唸らせられる。早く続きが読みたい。

bar 図書室店主 / 岡部愛

- 良いなあー、英才教育受けてる、と思っていたら、そんなことになるとは…。読んでいて、落語を見ている気持ちになります。

書店員 / 桶谷佳代

- 純粋にマンガとして面白い。それに尽きます。落語の世界を一般的な価値観に落とし込み、誰もが読めてわかりやすくするのは、難しいもの。週刊少年ジャンプの連載作は、黙っていても人気になるので、別に推さなくてもいいなと思うのですが、それでも推したくなります。

サブカル専門ライター / 河村鳴紘

- 女の子が落語家になるという少年漫画っぽく無い題材でありながら、王道で直球な面白い少年漫画になっています。あまり知られていない落語家の世界を凄く分かりやすく読む事が出来ますし、自然と主人公を応援したくなる！成長を見届けたい漫画です。キャラクター達も好印象ですし、これからどんどんアクの強そうなキャラが出てきそうで楽しみです！痺れるイケおじドンドン出して欲しい(笑)

主婦 / 岸本しのぶ

- 主人公の真っ直ぐでブレのない姿勢にあてられる。落語の世界の厳しさ、面白さを学べる上に、主人公の行動がスカッとさせてくれる。

医師 / 岸本倫太郎

- 落語というテーマながら、王道！！絵柄もテンポもよく、落語について全然知らない状態で読んでも、スッと状況が理解でき、没入していけます。読後の満足感が大きく、1巻あたりが長く感じるほどのカロリーが高い作品です。

図案家 / 橋本寛子

- 落語の世界をとっても魅力的に表現していて、どんだんのめり込みました。個性的なキャラそれぞれに信念が見えてみんな応援したくなりました。落語の世界だけでここまでいろいろな世界観があることを知りました。

フリーランス / 玉澤綾子

- メイン題材が落語ながらもしっかりとジャンプ漫画の王道を踏んでいる。落語をほぼほぼ知らない読者を対象としつつも落語の紹介から、少しだけ内容に踏み込んだ楽しみ方の見せ方が非常に上手いと感じました。

デザイナー / 高永貞光

- 時代は現代、落語を題材にした漫画です。ジャンプらしい熱血ストーリーを土台に置きつつ、主人公は気持ちいいくらい素直で前向きな努力家なので、物語の流れに沿って落語の奥深さも伝わってきます。落語が詳しくない方でも、分かりやすくそして面白く描かれており、とても読みやすいです。実際に存在する寄席が物語の中で出てきたりと（名前は違うようですが）、物語以外の部分で現実との地続き感を感じられる部分があり、とても惹き込まれる作品です。

会社員 / 佐藤優

- 女子高校生が落語家を目指す青春ストーリー、と一言で片づけるにはおいしい、落語の奥深さ、面白さ、難しさ、そして落語界の厳しさがてんこ盛りです。個性あふれる登場人物たち、そしてまるで動いているかのような、迫ってくるかのような、迫力のある決め絵。テンポよく、主人公目線の物語を追ううちに、いつの間にか落語に詳しくなったりします。寄席にも是非試してみてください、いや、行くしかない！

弁護士 / 三葛敦志

- 少年ジャンプでは異色の落語を題材にした作品。『あかね噺』を読んでまず想起するのは、『ブリーチ』や『鬼滅の刃』といったバトルマンガである。単純な強敵とのバトルだけではなく、笑いの芸である落語の魅力を生かして長く巻を重ねてほしい。

弁護士 / 三村 量一

- テンポ良く読める心地良さと、山場で捲し立てられる迫力が圧巻です。ストーリーの構成も上手く絡み合っていて、グッと引き込まれてしまいました。

教師 / 持丸宏司

- 初めて読んだ時から主人公あかねの明るく素直なキャラクターにとっても惹きつけられました。努力を惜しまない、向上心の塊のような性格が応援したくなります。あかねの落語で会場の人の心を奪った瞬間、私の心も奪われました。バトルシーンがある訳でもないのに、相手を話術で圧倒する爽快感が気持ちよくて仕方ないです。また、絵や文字のフォントの巧みさから、声色や情景を想像しやすく、スッと入ってきます。全体的にテンポが良く読みやすいため、私の中で誰かにおすすめしたい作品 No. 1 です！

TEAM SHACHI / 秋本帆華

- 数年前からよく聞くのが、少年漫画では敵に勝つために修行をして強くなる展開がお約束なのだが、最近は修行シーンになると人気落ちるので、いかに修行を短く終わらせるかを心がけているという漫画家・編集者の意見です。チート能力を神からもらって異世界で無双する漫画が流行りだしたのも同じ頃です。そんな時代に、一生修行を続ける「落語」という題材で勝負をかけるという逆転の発想はすごいと思います。

丸善ジュンク堂書店 営業本部 / 小磯洋

- 王道の気持ち良さが詰まっていて、あかねが高座からどんな景色を見つけられるのか追い続けたい。

ロングランプランニング / 小森和博

- 『週刊少年ジャンプ』で読者世代に近い年齢設定の女子が主役を張る。その一点において異色と言える作品だ（『Dr. スランプ』や『キャッツ♥アイ』も女性が主人公ではあったが、当時のジャンプの対象読者が共感を得るような対象、設定ではなかった）。女子が主人公なのに文脈は完全無欠の少年マンガ。女性マンガ誌でジャンプ的な「友情、努力、勝利」をモチーフとした（そして恋愛模様までもきっちり描いた）成長譚の『ちはやふる』が完結する年に、よもやジャンプで女子高生を主役とした「古典芸能」を扱う少年マンガの連載がスタートするとは思わなかった。もっとも絵のタッチや一部のキャラは『ONE PIECE』や『BLEACH』などを想起させ、「仇討ち」という要素は青年マンガを超えて時代劇のようですらあるのに、4巻でのとりあえずの伏線回収は少年誌らしい爽やかさに満ちていた。本当の伏線回収はまだ先にあるはずだが、こうした爽快感は近年の少年誌では珍しいほど清々しい。テンポ、展開、ドライブ感がグイグイと読み手の背中を押す。とにかく読み味が心地いい。2巻の帯で『エヴァンゲリオン』シリーズの庵野秀明氏が「漫画でしか出来ない表現力で、少年ジャンプの王道として面白く描いていて、凄い。是非、

御一読を」と言ったのは伊達ではない。落語を知らない人から落語好きまで、老若男女のどんな友人にもおすすめできる快作。是非、御一読を。既刊4巻以下続刊。

ライター／編集者（馬場企画）／松浦達也

- 物語は高校生の朱音が落語界に足を踏み入れ、真打を目指して邁進していく姿が描かれる。ストーリーのテンポや上演中の描写は素晴らしく、もし落語に興味がない方でも間違いなく楽しめる作品。個人的にはメディアで見かける職業としての噺家さんや、落語・寄席に憧れはあっても、落語そのものに対しては敷居の高さを感じていた。作中で「落語家は芸人であるとともに伝統芸能の担い手」という言葉が出てくる。この伝統、というものが作り出していた自分の中の敷居の高さを、身近にある素晴らしい文化であるマンガがひょいと跨がせてくれた。そういった意味でもこの作品には大変感謝している。皆さんもあかねのお噺、ぜひ楽しんでいって下さいな。

会社員 / 杉佳尚

- スポコン落語！落語の世界が中心に回る熱い寄席のバトルが手に汗握りますね！小気味いいテンポ感が、まるで寄席で聞いているような臨場感になり。ただ個人的にはきっちり着物を正確に書いて欲しいかな。特に帯が適当すぎて（幅や貝の口の形とか）、後ろ向きのシーンになると絵の適当さが出ちゃってちょっと盛り上がった気持ちが下がってしまうのが残念。でもストーリーはとにかく面白いので落語を知らない人にも読んで欲しい！そして寄席に絶対行きたくなる！！

女優・ジェネラリスト / 大倉照結

- 2022年一番の鮮烈さ。女子高生、真打を目指す。主人公に女子高生を据えることで、チャレンジがより挑戦的かつ挑発的になってるのが読んでいて気持ち良い。鮮烈なものは鮮烈なうちに推しておきたい。

ソフトウェアエンジニア / 第弐齋藤

- めっちゃくちゃ面白くてびっくり返りました。「落語」も「マンガ」も火の玉ストレート級に全力。高座シーンなんかは迫真すぎて、息をつく間もなく飲み込まれる。正真正銘ジャンプの「王道バトル少年マンガ」。落語しゅごい〜っ、マンガおもしろい〜しか感想なくなっちゃった（語彙力消失）。

㈱リプロプラス商品部 / 池本美和

- 毎週欠かさず週刊少年ジャンプを購読しており、連載開始から楽しませていただいています。一見難しそうな落語を題材にしていますが、爽やかな絵で分かりやすく描かれておりとても読みやすいです。主人公の成長と父の破門についての謎、どちらも目が離せずこれからの展開も期待大です！

会社員 / 竹本慧

- 一次選考の時点で未読でしたので、ジャンプでこの題材の作品が連載され、しかも人気を博していることに驚きました。今の時代において少年たちが落語と触れ合う機会はなかなか無いことなのでしょうに、と思いつつ読んでみて納得。「落語って面白そう！」と思わせる演出に引き込まれました。芸事を極めるには、技術だけではなく人間性が求められるものだなとしみじみ思います。そこを掘り下げて描いているところも興味深く、あかねの成長が楽しみです。

伊吉書院 類家店 / 中村深雪

- 最近落語に興味を持ちはじめたところ、リアルタイムで現れた作品。過去にも落語を題材とした作品は数多くありましたが、自分自身と「同時進行」という面で大きく心を動かされました。勉強不足甚だしい私が言うのもなんですが、現役落語家さんが監修されてるだけにリアリティ抜群ですね。

本と文具ツモリ 西部店 / 津守晋祐

- 書店で書影をよく目にはいたものの、今回エントリーされて初めて読みました。結果は……、おもしろかったです。既刊4巻一気読み。「ああ、こんどは落語で来たんだね」と食わず嫌いしてすみませんでした。主人公が女子高生であることも、動機が「親の仇」であることで説得力を増す設定の妙。噺家としての出世がとんとん拍子でうまく行き過ぎるやや都合主義的な展開とか、脇役が典型的であるという食い足りなさはあるにしても、この喋りまくる高座のようなスピード感は、なんというか、癖になる。上に挙げたようなマイナス要素は、倍速時代を念頭に、つくり手・送り手側としては当然ワザとやっているのだろう。そして物語を倍速化するにあたり、省略と抽出・誇張といった手法がテックとして仕込まれた庶民の娯楽である落語は、同じテックが仕込まれている

マンガの語り口とも相性がとてもいいはず。落語という、長い歴史とそれゆえの「型」を持つ芸事の世界をテーマとしながら、かつ週刊少年ジャンプの金科玉条3カ条を併存させ強化しながら、失速しないでどんな地平にたどり着くのか、先行きが楽しみ。ヒットさせるために考え抜かれたウェルメイドなマンガで、読んでいて安定感があります。

日本経済新聞記者 / 天野賢一

- 情景を浮かばせる落語家の芸を漫画で描くというある種の離れ業を見せつけられたかのようです。テンポの緩急も絶妙でそれこそ読まされと感じる瞬間が何度もありました。阿良川一生が求めるような芸の極み、それはそれで見てみたい。ただ個人的には、何事も頂を高くするためにはすそ野の広さも必要だと思っているので、そのあたりをどう描いてくれるかは勝手に楽しみにしています。

めがねっ娘教団 大司教 / 田中海渡

- これまでも「落語」を題材にした作品はいろいろあったし、描き尽くされた感がある……と思って読み始めたのに、キャラクターがやたらと魅力的で引き込まれる。この人のモデルってやっぱりあの人だよな、こっちは人は……と、想像をかきたてられるのも楽しい（そう見せかけての…！ という、ひっかけ問題もたくさん埋まっていそう）。巻数を重ねるごとにどんどん夢中になってしまって、なんかくやしい。でも好き！ 寄席に行きたくなる一冊。

一般社団法人マリーゴールド / 島影真奈美

- 安心してお勧めできる落語もの。

公務員 / 東くるみ

- 女子高生×落語という意外な組み合わせ、かつ王道の少年ジャンプ展開でワクワクさせてくれます。落語をテーマにした漫画は近年何作もありますが、こんなに「漫画」のフォーマットと相性がいいんだなあ、と驚くとともに、描き方にもそれぞれの作家の個性が出て面白いなあと感じます。バスケや囲碁など、数々のジャンルを盛り上げてきたジャンプだからこそ、作品の力で子どもたちに落語ブームも起こせちゃうんじゃないか…？と期待しちゃうんです。

ブログ「マンガ食堂」管理人 / 梅本ゆうこ

- 観客を惹き込む落語と同じで作品に惹き込まれました。「その噺は知ってる！」という落語を作品で取り上げており、さらにその噺の深掘りをしていてより一層落語という伝統文化の奥深さを知ることができます。今まで落語に触れたことのない人が興味を持つこと間違いなしです。落語もマンガも、同じ娯楽で、表現するのが両方ともに難しいところでもあります。それにも関わらず、こんなにも読ませる作品はイキですね。

会社員 / 八重田幸子

- 粹です。

オフィスオーガスタマネージャー / 樋口健

- 目先の煽りやインパクトに依存せず、少女の落語家としての成長をポジティブに描く手つきが良心的。「マンガの面白さってこれだよな」を味わえる愛すべき好著。

書評家 / 福井健太

- 父の姿を見て落語家を目指す朱音が、まったく挫けることなく落語の世界に食らいついていくさまが爽快で、ぐいぐい読ませます。師匠、兄弟子、学校の先生、幼馴染、ライバルと、朱音を取り巻く人々も非常に多いのですが、それぞれキャラクターが立っていて全員好きになりそうです。そう、朱音だけでなく、ライバルさえなんだか応援したくなります。漫画で読んでももちろん面白いですが、映像になったら更に面白いだろうな、と思う作品です。

主婦 / 堀江千秋

- 真打ちにあと一步だった父親の破門、居酒屋での修業、寿限無のみで勝ち抜く可楽杯…。なにしろテンポがものすごく良い。落語の細かい部分や、登場人物の背景なども大胆にカットされていて、まず物語に入り込むことが容易なように工夫がなされている。

鳥取県立図書館 / 野間勤

- 落語挑戦女子漫画ですがためになる話しなど、子供から大人まで読んで楽しい漫画だと思いました

tetote 代表 / カ丸 真

- 落語家を目指す女子高生が主人公のマンガです。帯にジャンプの王道とあるとおり、落語家を目指して頑張る主人公を熱く描いています。主人公の真摯な姿、落語シーンの臨場感、魅力的な登場人物達に胸のすく思いがするだけでなく、落語界や寄席の内幕や、落語の楽しみ方といったことも丁寧に描いていて、寄席に行ってみたくになります。このマンガを読んだ後は今までよりずっと楽しく落語を楽しめそうです。人情や季節感といった江戸の風を感じた人におすすめのマンガです。

会社員 / 廣瀬 公将

- 落語という日本が誇る芸事がこんなにも少年漫画に落とし込まれて楽しめるだなんてという衝撃。知らない世界だからこそ、知ることが喜びとなる読み口。あかねちゃんを始めとするキャラクターたちの個性豊かさ。毎話楽しませてもらってます。

女優 / 齋藤明里

- 芸事漫画の勘所を押さえた原作を、少年漫画らしい快活な作画が支える良作。こういう漫画はいくつあってもいい。

ときどきライター / 縣丈弘

マンガ大賞2023 ノミネート作品

FEEL YOUNG/祥伝社

「女の園の星」和山やま

選考員コメント・1次選考

- この空気感がたまらなく好きなんです。女子校あるあるは分かりませんが、何故かこのマンガを読むと「そうそう、こんな事あったよね？」と思わず言いたくなってしまふようなストーリー展開がたまりません。

(株)エフ・ジェイエンターテインメントワークス / 阿部 大介

- 電車の中で笑いを堪えられず、心底マスクをしていて良かったと思った。でも帰宅するまで読むのを待たずに読んでしまいまた公衆の場で笑ってしまう。こんなにテンション低いのに笑わせてくる漫画ってある…？1番発売を心待ちにしている作品。

ヴァイオリニスト / 佐藤帆乃佳

- 女子高生と教師の日常（のはず？）ギャグマンガとくくっておくには惜しい。傑作。去年一番笑ったマンガ。

マンガ読み / サイトウマサトク

- 徐々に明かされる星先生のプライベートがさらに作品の面白さを引き立てている。

会社員 / 八重田幸子

- とにかくジワる。自分が女子校に通っていた頃、あー！こんなことあったな！という話と、あったような気はするけどこんな絶妙に面白すぎる事はなかったなと言う、あった事とありそうな事のバランスが最高です！娘に勧めたら声を出して笑ってました。

カメラマン / 平沼久奈

- 言わずもがな大人気な作品だが毎巻毎巻和山やまさんが描くシュールな笑いにクスッとしてしまう作品。自分の高校の時が思い出してあるあると共感をもしてしまう。生徒一人一人のキャラクターも濃く、印象的だがなんと言っても先生達のキャラクターが魅力的すぎて何回も読み直してしまうような作品。

ヘアメイク / 北原由梨

- 20年、30年、いや、永遠に読み続けたい漫画。生徒達の会話、星先生の考え事、ずっと見ていられます。まだ3巻が出たばかりなのに、いつか来るであろう完結に絶望します。和山先生、この作品はライフワークとして描き続けて下さいませんかっ！と身勝手な願いを持ってしまいます。

会社員 / ターシ

選考員コメント・2次選考

- 笑いの構造をどや感なく表現しているコメディの傑作

コメディアン / インコさん

- 淡々しているところがむちゃくちゃ面白い。ディティールに神が宿るタイプ。星先生をはじめとした教師・生徒たちの会話、人物造形の絶妙さがすごい。ほとんど文学的なレベル。

マンガ読み / サイトウマサトク

- 内容としては女子校での先生と生徒の日常のお話ですが、登場人物達の会話がクセになる漫画です。しかも話している本人達は基本半日な感じで冷静であり、そこがまた面白さを際立たせています。学園モノですが、ファンタジー要素やホラー要素だとか、色んなテーマを盛り込んでみてほしいなあ、色々なテーマを試して頂きたいなと思いました。この手の作品はびっくりするくらいあっさり完結したりする事もままあるので、不定期でもいいからできるだけ末長く連載してほしいなと思います。

会社員 / ターシ

- 作品に触れるまでコメディとは思っておらず、シリアス or ドロドロ路線か…?と、ややドキドキしながら読み始めたこともあって良い意味でのギャップを味わわせてもらった。日常的な少しほっこりする笑って、温かい気持ちにさせてくれますよね。大好きです。

会社員 / もちつき かずよし

- ジワジワとボディブローのように効いてきて、遂にはクスクスと笑ってしまう。笑ってしまう…イヤ、ニヤけてしまうそんな素敵な魅力がこのマンガには詰まっています。話が進んでも決してマンネリになる事もなく、ただオモシロイがここに詰まっています。

(株) エフ・ジェイエンターテインメントワークス / 阿部 大介

- なんともいえない面白味が色褪せないのがたまりません。日常に潜む笑いを、ジワジワと浸透させてくれるので読み終えたところにリラックスしてる自分がいます。

うすいまりこ鍼灸院 / 碓氷麻里子

- 3巻目で勢いが更に増し全エピソードがおもしろかったです。好きな飲み物片手にのんびり読みたい漫画。「いそう」「あるある」かと思いきや、キャラ強めの人多すぎて全然普通じゃないトンチキワールド。

金海堂イオン隼人国分店コミック担当 / 園田美智子

- 世界を平和にできる漫画じゃないでしょうか。3巻も一才面白さが衰えずニヤリ、クスクスと笑える内容とキャラクターたち。誰も蔑めず、傷つけず、こんなに平和な笑いを描き続けられるの本当にすごいなと思います。和山先生には一生漫画を描き続けて世界平和を進めていただきたいです。

bar 図書室店主 / 岡部愛

- 早く、実写化されないかなあ、と楽しみです。星先生、どなたが選ばれるのか、楽しみです。ほのぼのした気持ちになります。

書店員 / 桶谷佳代

- ギャグセンスはもちろん、絵の上手さは候補作の中で随一だと思います。1コマ1コマ、表情のひとつひとつを、何度でも読めるマンガ。

角川文庫編集部部長 / 関口靖彦

- 新刊、楽しみにしていました！相変わらずたくさん笑わせてもらいました。淡々と進んでいく日常をこんなに面白くできるなんて女子高生ってすごいと思いました。そしてその空気感を独特の世界に落とし込む凄さに脱帽です。

フリーランス / 玉澤綾子

- ゆる〜く面白くて読んでるうちにイヤなこととか忘れちゃいます。こんな女子校だったら本気で通ってみたい。

主婦 / 紺野泉

- サザエさんみたいに永遠に続いてほしい。

大日本印刷 / 佐々木愛

- 電車の中で笑いを堪えられず、心底マスクをしていて良かったと思った。でも帰宅するまで読むのを待たずに読んでしまいまた公衆の場で笑ってしまう。こんなにテンション低いのに笑わせてくる漫画ってある…？ 1 巻発売を心待ちにしている作品。

ヴァイオリニスト / 佐藤帆乃佳

- 女子高の男性教員の日常ギャグマンガです。じわじわ来る笑いのコンボは、電車の中とか待合室とかで途中で読むのをやめなくてはならないほど。「恐れ入ります。」だけで思い出し笑いができるマンガなんて、他に知りません。いらいらしてるときでも幸せな気分になれます。

弁護士 / 三葛敦志

- ギャグの切れ味が凄い作品。

ブックファースト新宿店 / 渋谷 孝

- シュールなギャグが相変わらず面白いのは言わずもがな、とにかく読めば読むほどどんどんキャラクターたちが好きになっていくこと請け合いです。みんな狂っててみんな良い！

会社員 / 小野塚博之

- 「尊い」という言葉は（年齢もあって）いまいちピンとこないが、この作品にひしひしと感じる思いが「尊い」なんだろうなあ……。絵もキャラクターも笑いも完璧。もう唯一無二というか、「侘び寂び」さえ感じる名人芸の域。ただ、和山先生には、ここでとどまってほしい気もします。何とも勝手なお願いですが。

読売新聞文化部編集委員 / 石田 汗太

- 一生続いて欲しい。帯ドラマみたいに毎日読みたい。笑いが足りない人に贈りたい。

主婦 / 赤坂真実

- 1、2 巻では震えるような笑いが、そして 3 巻では星先生の間人臭さがでていてストーリーが深くなって面白かったです。

ブックエース上荒川店コミック担当 / 倉本かおり

- 初見の人には絵柄とタイトルから想像もつかないジャンルなのがまた良いです。ストーリーの構成が秀逸で、1 話 1 話が丁寧に作られている感じがしてとても好きです。これがもっとくだけた絵柄だとこんなに面白くならないんだらうから漫画って凄いなあと改めて気付かされた作品でもあります。もうとっととドラマ化しちゃって感じです。

バーテンダー / 村井真也

- この漫画を一度も笑わず読める人なんて、いないんじゃないだろうか…。出てくる大人の目が、すべからく死んでいるのも最高です。

音楽家 閃き堂店主 / 谷澤智文

- 巻数が増えていってもずっと面白いです。生徒たちのお話はもちろんですが、たまにチラリと見える星先生の家族情報にニコニコしてしまいます。

会社員 / 竹本 慧

- 淡々とした会話の中のシュールなネタ。間というかテンポというかとても素直に笑ってしまった。3 巻目が発売されて勢いが落ちるかと思ったらよりパワーを増していた。個々のキャラ立ちがすごいのにちゃんと物語としてまとまっている点もすごい！

あゆみ BOOKS 仙台一番町店 店長 / 土屋修一

- 3 年連続のノミネート。周囲でも、普段マンガを読まない人からも「あれ面白いね?!」という声を聞くようになり、本作のファンが拡大し続けていることがわかります。受賞しなくてもすでに十分人気、というのはわかっていつつも、選択肢にあるならどうしても 1 位に選んでしまうじゃない! という抑えられない気持ちとともに投票します。

ブログ「マンガ食堂」管理人 / 梅本ゆうこ

- 相変わらず良い意味で地味な展開で、ニヤッとしてクスッ！とさせられますので、電車で読むのは要注意です。3巻目になって登場人物が増え、関係性も広がってきましたが、相変わらずみんなどこか変わっていて、それでいて「でもこういう人いるよね～」と思わせられます。

会社員 / 畑中 瀬路奈

- センスが秀逸。読者の笑いのツボを押さえてるなあと、感心するばかりです。ニヤケが止まりません。この作品は私の心の栄養でいつも活力になってます。

会社員 / 八重田幸子

- どこでも絶賛されてるので、今更と思いつつ、万人に勧めるには最高のマンガです。老若男女問わず。

オフィスオーガスタマネージャー / 樋口健

- 静かなギャグが醸す「場」の心地良さは唯一無二。ブレイク済みの印象も強いが、巻を重ねるごとに成熟度が増しており、このタイミングで推す価値は十分にある。長く淡々と続いて欲しい快作だ。

書評家 / 福井健太

- 本当にただただ、ジワジワ面白い！そのジワジワをうまく私の言葉で伝えるのが難しいので是非とも読んでいただきたいです！

カメラマン / 平沼久奈

- なぜこの漫画がとってないのか。これ以外に何が取るのか。とにかく私はこの漫画を全ての人に広めたい。好き、とにかく好き。3巻でこんなに面白い。とにかくずっとずっとこの世界にいたい。お願い、先生。死なないで。

ヘアメイク / 北原由梨

- 先生たちも生徒も、出てくるみんなのことが大好きだなあと毎回思える貴重な作品（みんな好き、と言いつつ中村先生がとて好きです）。この世界を長く描き続けてほしいです。

ライター / 門倉紫麻

- 唯一無二の和山やまワールド

会社員 / 齋藤隼

- 和山先生のギャグセンスが光りすぎている作品。何度読んでも声を出して笑ってしまいます。星先生と個性豊かだけれどリアルな女子高生たちのやり取りに笑わない人などいないのではないのでしょうか……？

女優 / 齋藤明里

マンガ大賞2023 ノミネート作品

少年ジャンプ+/集英社

「正反対な君と僕」阿賀沢紅茶

選考員コメント・1次選考

- ラブコメなのに、ラブコメにはつきもののイベントを軸にしたドラマ性におよそ頼らずに、何気ない日常生活と会話の重なりの中でつながり深まっていくさまざまな人間関係の描写がいい。絶世の美少女も超イケメンも圧倒的な才能を持つライバルも出てこないし、また出てくる必要もない。なのに楽しい。

会社員 / やのこうじ

- 見た目も行動もギャルだけど実は純情可憐な鈴木さんが、見た目も行動も真逆で物静かなメガネの谷くんに真っすぐな恋をする。好きの理由は、周りの目が気になる私と違って、谷くんは「自分」を持っていてぶれないから（＝鈴木視点）。そんなふたりがつきあうことになって……。ドタバタかつにぎやかすぎる筋立ての中に、絶妙なタイミングで織り込まれる直情の「大好き」とピュアな憧れの描写がとてすがすがしく、心が洗われる。好きすぎて挙動不審になる感じとか実にほほえましく、うまい。ふたりを取り巻くクラスメートたちもそれぞれ、自意識過剰や負の感情に押しつぶされまいと勇気をふるい、自分の気持ちに？をつかずストレートに相手と関わっていく。そのさまがとてもいとおしい。ちょっとしたことで気まづかったり、ちょっとしたことで自己肯定感が上がったり下がったりという、10代の日常をみずみずしく描く。陰鬱な暗さを突き抜けた先にある2020年代らしいZ世代ラブコメの新星。絵もポップでかわいい。これはいいでしょ。

日本経済新聞記者 / 天野賢一

- 今年のイチオシです。青春ラブコメ、キュンキュンと思いきやそれだけではなくて、若くて青くて不器用だけど他人を尊重する、他人に敬意をはらうということ、それが自分自身を大切にすることにもつながるのだなぁと感じられる作品。みんな違ってみんないい！って真理だけど難しいよね、頑張れ！若者！

元書店員 / 内野智未

- 読んでいてキュンキュンしちゃう作品です。今一番人に薦めたい作品です。

ブックファースト新宿店 / 渋谷 孝

- こんなにも日常を描くのが上手な漫画家さんがいたなんて！！ただの高校生たちの日常が、本当にキラキラ眩しくて美しく可愛くて永遠と彼らを見ていたいと思ってしまいます。鈴木ちゃんと谷くんのこれからに期待です。

女優 / 齋藤明里

- 軽快でテンポよく読みやすい青春恋愛漫画だが、それぞれが自分という人間を見つめ、常に理想とする自分になりたいと葛藤や模索する様子が説教臭くなく描かれ、軽いのに深みのある、読みやすいが読み応えのある作品。

丸善ジュンク堂書店 営業本部 / 小磯洋

- 定番とも思える、キャラクターにギャップのある二人のラブコメから始まる物語。少しずつ周囲の友人たちの考え方や内面も掘り下げられていって、彼らの感じたことや彼らの変化が可愛く(愛おしく)思えてくるそんな漫画です。

会社員 / 津田 圭

- 最高にピュアで可愛いラブコメがこの世に存在するのか。確かに存在しました。鈴木ノリとデフォルメ絵の可愛さ、谷君の愚直さのケミストリーが発生していますね。読後のハッピー感が半端ないので道徳の教科書にもどうぞ。

会社員 / 三浦佑樹

- ペンネームに紅茶の文字が入っているとは！阿賀沢 紅茶さんには、生粋のフード作家の匂いがします。正反対すぎる、大丈夫かなと心配なふたりの息が初めて合った瞬間がフード絡みというのも最高。

菓子研究者 / 福田里香

選考員コメント・2次選考

- おじさんが読んでも「若い子って、青春って、ええなあ・・・」なんて微塵も思わず、「学生時代を思い返して遠い目」どころか老眼鏡かけてかぶりつきつつ、ニヤニヤ読みました。もう頬ゆるみっぱなし。主人公たちふたりのどちらに感情移入するでもなく、じゃあ真ん中の友だちポジションかという、その友だちたちも魅力的すぎ。むしろ友だちたちが魅力的！すらある。おじさん、山田くんのこと、応援してる。生まれ変わったら友だちになろう。で、ガバチョ誰だよ。

Tokyo Otaku Mode / モリサワタケシ

- 主役の二人はもちろん、取り巻くユニークな友人たちまで、みんながみんな愛おしい。コロコロ変わる表情や、散りばめられた個性的な手描き文字までページごとに魅力が詰まっていて、読んでいて思わず声が漏れ出ちゃうくらいにハッピーな気持ちでいっぱいになります。最高。

会社員 / 伊東敬祐

- 会話がずっと面白いです。彼らに交ざって横で話聴いてたい。リアOゴールドとかスポドリ凍らせる(1000mlはやらない)とかのちょっとした高校あるあるが懐かしくてブツ刺さりました。同年代?何も考えずに楽しめるノリというか作品の雰囲気の部分と、メッセージ性を感じてなるほどな～となる部分とがあって、色々考えながら読みました。あとまあ普通に泣きましたよねピュア青春すぎて。正反対だな合わないな自分と違う人種だなんて思って惹かれてても線を引きがちだった人間としては、歩み寄っていく二人に希望を感じています。あと平(くん)の性格まじ好き。

金海堂イオン隼人国分店コミック担当 / 園田美智子

- ギャルと地味男子が付き合う、というとよくある感じに見えるかもしれませんが価値観の違う者同士がお互いを素直に尊重し認め合う様、違いに戸惑いながらも理解していこうと前向きに関係性を進めていく様がたまらなく愛しい作品です。鈴木ちゃんの仲間たちいわゆる「陽キャ」組が、真面目堅物系の谷くんという「異物」を自分たちのコミュニティにするって受け入れていく過程や、おなじコミュニティに居ながらもまるで人生観の違うサブキャラ達がでこぼこしながらも上手くやっていく様子もほほえましく、カオスで騒がしいけれども愛すべき青春が生き生きと描かれています。

株式会社アニメイト / 岡部 真矢

- かわいいものだらけです。まず鈴木さんのファッションがかわいい。てんぷらちゃんも可愛すぎます。他にもかわいいものがいっぱい出てきます。読んでいて、幸せな気持ちになります。良いなあー。

書店員 / 桶谷佳代

- なんだろう、この等身大感…。他人にも自分にも誠実な視線を共有できることがとても気持ちいい作品。テンポに勢いあって笑って誤魔化されているようだけど、内省に溢れた、主人公の人格のような漫画です。好き。

ヘリックス・クリエイティブ(株)WEBデザイナー / 河本 智芳

- 普段はあまり恋愛ものは読まないのですが、今回読ませていただいてとても癒されて、いつのまにか2人とその周りの人たちの関係が気になってしょうがなくなりました。誰かを陥れようとか邪魔しようとかではなくそれぞれを受け入れて過ごしている空気がとても好きです。

フリーランス / 玉澤綾子

- ニヤニヤものが続いてしまいましたが、しょうがない。だってラブコメもの好きなんだから。青春してて、初々しくて、とても可愛い。作品中の言葉を借りるなら、愛おしいがピッタリ。正反対だろうがなんだろうが、とってもお似合いな二人。笑顔はじける二人がまぶしい。

三省堂書店海老名店・コミック担当 / 近西良昌

- かわいい！とにかくみんなかわいくて、きゅんきゅんして幸せな気持ちになります。

主婦 / 紺野泉

- 扉絵やデフォルメされた絵がとっても可愛らしい。正反対な二人にとってもキュンキュンします。愛らしい絵なのに登場人物一人一人の心理描写が深くで自分でも気付かなかった感情が言語化されて心に染みます。

出版社営業 / 佐々木つむぎ

- 読み終わったあと口の中で甘酸っぱいの唾液がだっている感じが凄い。凄いだけど、基本的に正反対な二人も周りの友達の悩んでも人間関係の基本的なことで、大人になっても悩んだりすることなんだよね。だから甘酸っぱいキュンキュンのなかにいい年の大人をぐっと掴む何かがある。二人で時間や体験を共有することはお互いの違いが明確になっていく行為だと思うけど、正反対のままハッピーにもなれるのだ。

鳥取県高等学校教諭 / 佐川由加理

- にやにやしてしまう。この2人好き…！と読んでいて幸せになりました

ヴァイオリニスト / 佐藤帆乃佳

- タイトル通りの谷君と鈴木さんのやり取りが激烈に可愛く、そして登場するキャラクター全てに嫌味が無く、個人個人の様々な思いが飛び交う青春時代を目の当たりにすることで、とにかく読後の多幸福感が凄まじい1冊です。この漫画はいずれ癌に効くし10年若返ります（誇張あり）

会社員 / 三浦佑樹

- かわいい=愛おしい。愛おしさが溢れていました。

教師 / 持丸宏司

- 可愛い極み。尊い。谷くんも鈴木もクラスメイトもみんなキャラが良すぎて、一コマ一コマが賑やかで楽しい。恋愛ものって上手くいかないところや、モヤモヤがないと物語的に物足りなく感じるものだと思ってましたが、ハッピーだけでも成立するんだ！という発見。キュンキュンはもちろん、細かく笑い要素が散りばめられていて（ジャンプパロディ多め）、読んだ後に自然と口角が上がっていました。癒されたい時に読みたい作品です。

TEAM SHACHI / 秋本帆華

- 読んで爽やかになれる青春漫画だと思います。出てくるキャラクター全て愛おしくなります。

ブックファースト新宿店 / 渋谷 孝

- 私が高校生の時は、スマホもLINEもなかったし、オタクは肩身が狭かったし、LGBTにも今ほど寛容ではなかったし、高圧的な教師が多かったし、もっと男女間に壁みたいなものがあった・・・気がする。それでも人との距離の取り方や自分が嫌われていないかとか、こんなことで悩んでいるのは自分だけなのかと落ち込んだり考え込んだりと、同じようなことで悩んだり笑ったり怒ったりしたなど、今も昔も高校生が考えることは同じなんだと、懐かしく共感できる。これから高校生になる人にも、現役高校生の人にも、かつて高校生だった人にも、みんなにお薦めできる漫画です。

丸善ジュンク堂書店 営業本部 / 小磯洋

- 恋の展開も感情の振幅もジェットコースター的に上がって下がって回転してGがすごい。あと顔の変化がすごい。思い切ったタッチの飛躍がジェットコースターを更に加速させる。2話ラストの「ちゃんと話聞いてくれてんじゃん～～!!!」がたまんなくかわいい。

朝日新聞記者 / 小原篤

- なんだろう……なんか可愛いです。ピュアなセリフが適所に散りばめられていて、周りとは違って感じることで心底思うことは言葉にしていくことで、その周りを自分の思う側に変えていくことができたりもするよな？なんて思ったり。

1616屋 / 杉本 善徳

- 正反対な二人が付き合いだして、高校生活を送る、胸キュンストーリーなお話だけど、鈴木さんと谷くんの不器用だけどお互いを思う気持ちとか、ちょっとしたことで共感を感じて相手のことが好きだな？って思う、不器用なところが、ニヤニヤして口が笑わないように、ヒクヒクする同級生と同じ気持ちになって読んでしまう。こんな甘酸っぱい高校生活送りたかった？

女優・ジェネラリスト / 大倉照結

- 思春期爆裂、大好物。懐かしさはなく、ただただ羨ましさのみが募ります。互いが互いを大事に想う気持ちがコミカルかつカジュアルに伝わってくる、実直高校生の両思いマンガです。心が洗われる！

株式会社プロプラス商品部 / 池本美和

- 読めば心がおどる王道ラブコメ。絵がポップでとても可愛いです。キャラクターの内面の描き方がとても上手くて、なるほどと共感したり、そういう考え方もあるのかと反省させられたりする場面も多かったです。個人的に自意識過剰で自分本位な高校時代を過ごしていたので「この若さでこんなに自分自身と素直に向き合ったり、他者とコミュニケーションをとろうと努力できるのがすごいなあ」と感心してしまいました。

伊吉書院 類家店 / 中村深雪

- 何度でも読み返したくなるいとお話。各キャラクターの心の動きが丁寧に描写されていて、読み終わる頃にはどの子も大好きになってしまいました。メインのふたりがささやかな（けれど彼らにとっては重大な）ことで悩みながら近付いていくのが良いなあと思いました。個人的には山田の恋路が気になります。

会社員 / 津田圭

- 「嗚呼 谷くん 本当にごめんなさい」「正直、大好きです。」。冒頭2ページめ、モノローグで明かされる「鈴木」の秘めた恋心。絶対に関心なさそうなコスメとかの話題を振ってダル絡みして「谷くん」の安定の塩対応を引き出して、ギャルっぽくヒヤヒヤヒヤとウケている「ふり」をしつつの真剣な表情。なんとまあドキドキの出だしなのでしょう。一気に引き込まれる。一次でも推しましたが、このマンガはやっぱり良い。自分の意見をしっかり持っている、無駄に他人に合わせたりしない——。クラスでは単に地味なメガネ男子と見られている「谷くん」のそんなかっこよさに自分だけが密かに気付いている、という鈴木への推し感と憧れの描写。読者の多くに「自分もクラスでこうありたい」「こんな男子がクラスにいたら」と思わせられるように描かれる谷くんの清涼なキャラクター。同年齢でも本音のコミュニケーションが絶望的に難しく、日々そのことに心を揺らしている今どきの10代の心情を丁寧にすくい取りつつ、一緒に帰る、手をつなぐ、みんなの前で告白する（ここまで第1話）、初デートの約束（第2話）、などなど、10代でしかあり得ないトキメキ満点の学校イベントをいっこいっこ積み重ねて描くこれは理想郷。緩急の差がくっきりしていてテンポがよいのもいい。ポップでなんともかわいい世界観はラブコメ好きにはたまらないかと。現実の学校生活もみんなこうならいいのにな。

日本経済新聞記者 / 天野賢一

- 1次投票で推した作品が2次にノミネートされていて嬉しい。その他のノミネートで、初めて読んだもの、改めて読み返したものの、どれも素晴らしくて読者を強く惹きつけるパワーのある作品ばかりだったけれど、やはり今年のイチオシはこの作品にしたい。派手な見せ場の事件や驚くようなトリックは無いけれど、ものすごく「自分ごと」の身近で懐かしいような、読者ごとにどこかしら自分に似ていると思えるような人物が描かれている。むずむずとした甘酸っぱさ、眩しさだけでなく、自己嫌悪や自意識過剰さ、他人の目が気になって身動きがとれなかったり、かと思えば周りが見えなくて暴走してしまうような。そんな恥ずかしくて懐かしくて、でも今も心のどこかにそんなものが残ってることを思い出させてくれる。そんな作品です。知って欲しい！読んで欲しい！

元書店員 / 内野智未

- あまずっぺ〜〜〜とジタバタさせられました！ただ、登場人物たちがラブコメ的なお決まりキャラではなく、飄々としていてチャラチャラなようでいて、しっかりとした個々の考えを持っていて、すごく今風だなと思いました。大人の人間関係においても必要なことが描かれているので、ハッとさせられます。

会社員 / 畑中 瀬路奈

- ラブコメでこういう切り口の表現する作品は読んだことがありません。著者の前作も読んだことがありますが、「早く続きを読みたい！」と思う気持ちが高鳴ります。この作品ももちろんそう。古い言い方になりますが、胸キュンです。ずっとキュンキュンしっぱなしです。

会社員 / 八重田幸子

- 登場人物全員好きになる。明るく友達が多いけど周りを気にしてしまう鈴木さんと、物静かだけど自分を持っている谷くんを中心に個性豊かなクラスメイトがたくさん登場します。そのキャラクター作りや、それぞれの感情を言語化するのが本当に上手い。なんとなく考えていることや自分でもわからないような感情を伝えるように言葉にするってすごく難しいと思うのですが、わかるわかる！と共感できるし、長台詞も説明くさくなく、ちゃんとキャラクターが喋っているのがすごい。明るい鈴木たちも好きだけど、拗らせてる平（たいら）も好き。「自分のいない所で言われてた褒め言葉が1番嬉しいだろが」裏表のない山田はピンときてなかったけど、とてもわかるよ、平。からの「自分の悪感情と向き合う過程でたまたま今お前にとって良いことをしただけであって俺は良い人間じゃね

え！」も好き。それを正直に言えるのは良い奴だよ。幸せになってくれ、平。ジャンププラスでのカラーの使い方も好きですし、単行本だと描き下ろしがあって、それがまた最高なので両方でぜひ。

声優 / 富岡美沙子

- 言語化の神なんよ。澗のように溜まっていたものがすごく丁寧に分かりやすく言語化されていて、なるほど！っていう納得と、確かに！っていう共感がすごい。恋愛における凝り固まった「こうあるべき」を良い意味で守ってなくて、逆に自分が今まで読んできたラブコメって主人公たち聖人聖女かよって思うまである。清すぎるんだよなあ。でも鈍感朴念仁が主人公のラブコメも愛してるぜ。「そうはならんやろ！」が平成のラブコメだったとして、この作品は「わかりみが深い！」に突出してるんだよなあ。これが新時代なのかな。ご都合主義だとか超展開だとかそんなチャチなものじゃあ断じてねえ…初めての恋愛じゃないなら純愛じゃないなんてことは無いし、男性から告白が当たり前なわけではないし、登場人物の話すセリフに刺さるもの多くて毎話すっごい頷いちゃう。人によってバイブルになり得る作品だと思います。オムライスの例えとか的確すぎてまじ聖書。時々ある真顔なツッコミが書体含め狂おしく好き。平くんの心理描写もあんま共感はできないけど好きだ〜。昨日 BAD 入った平くんは私の平常運転です。でも最推しは渡辺さん

会社員 / 布施直人

- 年齢的に、もうこんなピュアスイートなお話は読んでいて恥ずかしくなってしまう……と思ったのですが、読み進めるうちに楽しくなっていました。谷くと鈴木さんのとってもピュアで可愛いカップルのお話もすごく面白いのですが、彼らの友人たちがまた魅力的。とくに平くと東さんがお気に入りです。『正反対な君と僕』は、おそらく谷くと鈴木さんだけのことでなく、平くと東さんや、山田くと西さんのことでもあるのだろうなあと思って読んでいます。

主婦 / 堀江千秋

- 絵柄のポップさと内容のギャップにやられました。モヤモヤとした気持ちをこんなにもはっきりと表現しているのに、物語全体の雰囲気はずっと軽やか！「自分とは違う人」と関わることを、とても前向きに描いてくれていて、学生時代に出会っていたら、救われた気持ちもあったかもしれない……と少し切なく思いました。キャラクターがみんないい子なので、読んでいて気持ちが良くて、全員を応援したくなります。特に平くんには幸せになってほしいです！

会社員 / 堀尾素子

- 誤解→距離ができる→仲直り、というディスコミュニケーションを扱う恋愛マンガの流れをなぞっているようで実はなぞってなくて、毎度きちんと言葉でコミュニケーションをとって分かり合う、という流れになるのが心地よい。恋愛の描き方以外にも、なじみのある要素と、見たことのない要素が絶妙に組み合わせられていて、新しさを感じます。主人公カップルだけでなく、学校にいる「いろんな人」たちを丁寧に、細部を大切にしながら描いていくのもいい。

ライター / 門倉紫麻

- 主人公の女子高校生が、全く違う性格の男子高校生に告白して交際がスタートするところからこのマンガは始まります。この二人の交際をきっかけに、全く違う性格の友人間に交流が生まれ、楽しい世界が広がっていく様子は、違う価値観の中への飛び込む勇気や、異なる価値観を認めることの大切さを再認識させてくれます。また、純粋な二人の恋愛は読んでとてもさわやかなので、恋愛マンガとしてもとても楽しめます。何かを新しく始めたいと思っている人に特におすすめのマンガです。このマンガは読んだ人の背中をそっと押してくれる力があると思います。

会社員 / 廣瀬 公将

- どうしたってこの2人の胸きゅんからは目が離せません。付き合えてもお互いを思いすぎてしまうが故にすれ違ってしまふけれど、それでもちゃんと素直な2人が可愛すぎて一生見てたい。ふたりは一生幸せであって欲しい！笑

女優 / 齋藤明里

マンガ大賞2023 ノミネート作品

Souffle/ 秋田書店

「天幕のジャードゥーガル」 トマトスープ

選考員コメント・1次選考

- とても良いマンガだ。学ぶということが、どういうことなのかをマンガで学ぶことができるなんて贅沢すぎる。こういうマンガに出会うことができている。

1616屋 / 杉本 善徳

- 「知」が武器になる。1巻だけでその「強さ」がわかる。壮大な作品がはじまってしまったなあ、という読後の第一印象。続きが大変大変大変楽しみです。

株式会社プロプラス商品部 / 池本美和

- 『ダンピアのおいしい冒険』でのウィリアム・ダンピアに続き、すごい着眼点での題材発掘。モンゴル帝国の最盛期手前の時代を生きたファティマ・ハトゥンという女性の物語とは。彼女がどのような生涯を送ったかはネットで調べればすぐわかる。しかし、自分はこの物語の先行きが楽しみで仕方がない。岩明均の『ヒストリエ』と同様に、ひとつの国家の力が頂点を迎え、文字通り世界の中心となる時代に、その中核にいた人々の至近の視点から語られる物語だからだ。その視点で描かれる、モンゴル帝国の姿と文化を楽しみに読んでいきたい。

会社員 / やのこうじ

- イスラム圏からモンゴル帝国までを舞台にした骨太な歴史漫画が出てきた?!とワクワクしました!かわいらしい絵柄ですが、背景含め細かい描写により物語の壮大さが削がれることなく、また奴隷や敗者の末路など悲惨な展開が多いですが絵柄がそれらを緩和するのか読みやすい。知と怒りを力にして生き抜いていく女の子の強さよ。まだ始まったばかりですが、導入として完璧な第一巻。

公務員 / 宇田川結衣子

- 「ありふれた奴隷市場からこの物語は始まる」 いやいやいや、奴隷市場、ありふれてないから! 「学ぶ」「知識」とは何か、という超超普遍的なテーマを、日本人の私としてはまったくなじみのない、イランからモンゴルに売られた少女の物語として享受させてくれる。初めて知る知識の快感!! 現代に最適化された手塚治虫のような絵柄(口の形がポイント!)で描かれたイランやモンゴルの文化的意匠もめっちゃ魅力的なのだが、それを意識させない物語の骨太さ。この絵の魅力に、物語を飲み込んだ後に気づくのだった。「ダンピアのおいしい冒険」もとても面白んだけど、覚醒を自覚したあとに始まったこの作品、空恐ろしいほどの突破力に満ち満ちている。

ニッポン放送アナウンサー / 吉田尚記

- ダンピアの美味しい冒険で注目が集まったトマトスープさんの新作は、モンゴル帝国勃興期に後のキングメーカーであるトルイに滅ぼされた街に住んでいたイスラム学者一家に仕える奴隷の少女シタラが、学者一家から与えられた教養・知識を頼りにモンゴル帝国に対して復讐を誓うという、出だしからしてグッと掴まれるロケットスタートであり、近年発展の著しいモンゴル史研究も反映させつつ「女性から見たモンゴル帝国史」を描こうという試みとくれば、これはもう是非とも応援しつつ楽しんでいく作品ではないかと。

住職・ライター / 蟬丸 P

- 一コマ一コマがまるで額に飾れるような、簡潔で可愛い絵柄にまず目が引かれましたが、絵柄からは想像出来ないほどドラマティックな作品。主人公の感情の描かれ方にグッと引き込まれました。親愛、諦め、憧れ、好奇心、怒り、野心・・・感情がストレートに伝わり心が惹きつけられる。まだ一巻しか刊行していませんが、これからどんどんスケールの大きくなっていくことは間違いないので、今絶対注目すべき作品だと思います。

フリーランスデザイナー / 金輪英恵

- 中世モンゴルがテーマの作品。歴史ものを書きなれている作者なので、史実を織り交ぜながら進む話の流れ、細かいところに説得力がある。

MIGIMIMI SLEEP TIGHT / 涼平

- 歴史物語という括りで岩明均と共通点が見出せますが、絵柄の違いで大きく作風が分かれるあたり、マンガ表現の懐の深さを感じます。

マンガ研究 / ライター / 会田洋

- 世界史でちらっと触れて、そのまま記憶の彼方に押しやっていた「モンゴル帝国」の存在が俄然いきいきと輝き出す作品。絵は柔らかで読みやすいけれど、描かれるストーリーはシビアな場面も多い。科学・文化史のエッセンスも交えながら、ぐいぐいストーリーに引き込んでくれる。遠い世界に連れて行ってくれる作品

一般社団法人マリーゴールド / 島影真奈美

- 昔話の絵本のような歴史書のような…遠い国の遠い昔にあった物語だよとファンタジー的な印象と共にきっちり描かれる歴史的な事実や考証に基づく描写がとても気持ちよくミックスされていて、悲しくて残酷な場面は物語的に、当時生きていた人々の生活や考え方はリアリティをもって伝わってくる。カラーで読めたらさらに楽しいだろうなと思う。

元書店員 / 内野智未

- シンプルな絵柄ながら、骨太の歴史もとその考証と強く気高い登場人物。女版横山光輝と勝手に読んでる。1話からあっという間に舞台は変わるんだけど、1話での主人公の人となりと生き方が決まりずっと変わってない。不遇の環境でも気高く賢くあれ。そんな生き方がかっこよくてこれから色々起こりそうだけど応援してしまう。

鳥取県高等学校教諭 / 佐川由加理

- すぐに続きを読みたいけれど、逆に続きが気になって仕方ないので、心の平穩の為に完結してから一気に読むのが良いような…？物語はまだ序盤ですが、今後の展開に期待できないので、著者がつつがなく健やかに筆を進めて下さるのを、ただひたすらに願うばかりです！

元書店員 / 井出 麻悠美

選考員コメント・2次選考

- こういう漫画に頑張ってる欲しい！そうそう見かけない内容を色濃くやってる手塚治虫スピリット感じる中東歴史漫画に拍手！

OKAMOTO'S(SMA) / オカモトショウ

- チンギス・ハンがモンゴルの草原の勃興して遊牧民をまとめあげ、戦いながら西へと版図を広げていくストーリーだったら、『三国志』や『水滸伝』を描いた横山光輝の『チンギスハーン』にきっと描かれているだろう。身内には優しく敵対するものには残酷な姿は歴史で做うモンゴル帝国のビジョンと大差ないが、そこは横山光輝ならではの物語る力によって悠久の時を飛び越え、かの時代へと心を導いてくれる。そんなモンゴル帝国に攻められ追われる中で反抗を志す者たちの物語だったら、伊藤悠による『シュトヘル』があって現代人の少年が「シュトヘル（悪霊）」と呼ばれる女戦士の肉体に転移し滅び行く西夏国の文字を守りつつチンギス・ハンの勢力と戦い続けるストーリーが、粗い筆致によるダイナミックなアクション描写を交えて描かれモンゴルの強さや恐ろしさであり、けれどもそんな強大な相手に挑む存在がいただろう状況を教えてくれる。総じて権力者の側だったり、敵として戦う側だったりから描かれることが多いモンゴルという存在。それを、愛らしさが漂うポップな描線やキャラクター描写によって、女性の側から描いてみせているところにトマトスープ『天幕のジャードゥーガル』の目新しさがあり、同時に片面からは見えなかったところに気づかせてくれる奥深さがある。奴隷の少女が暮らしていたペルシャの街がモンゴルに攻められ、少女は連れて行かれて奴隷のような扱いを受ける。表向きは逆らわず言われたことをしっかりとこなして生き抜こうとしているが、心の中では優しくった奥様たちを思いモンゴルへの怨みを消すことはなく、いつか何かしてやりたいと思っている。そんな少女ファティマの物語がおそらく描かれるだろうことが第1巻からだけでも想像できる。同じ中央アジアが舞台でも、森薫『乙嫁語り』の精緻さとは正反対のデフォルメされた絵柄となっているが、背景などは案外に緻密で習俗なども研究の成果が反映されて、自分も12世紀のモンゴルに立っているような気にさせられる。この後、クビライが元朝を打ち立てるものの100年を持たず明に変わられるモンゴルの歴史の裏で何があったのか。ファティマとそしてドレゲネというオゴタイの第6夫人によって紡がれる物語から目が離せない。

書評家/ライター/タニグチリウイチ

- モンゴル帝国の版図がその最大限に向け広がっていく隆盛の時代を、政権の中核直近で生きて死んだファティマ・ハトゥンという女性の物語。『ダンピアのおいしい冒険』でのウィリアム・ダンピアに続き、題材発掘の着眼点がすごい。彼女がどのような生涯を送ったかはネットで調べればすぐわかる。でも結末を知ったらネタバレ、読む価値が損なわれる、というわけではないのが歴史マンガの楽しいところだ。自分はこの物語の先行きが楽しみで仕方がない。岩明均氏の『ヒストリエ』と同様に、ひとつの国家の力が頂点を迎え、文字通り世界の中心となる時代に、その中核にいた人々の至近の視点から語られる物語だからだ。その視点で描かれる、モンゴル帝国の姿と文化を楽しむに読んでいきたい。

会社員 / やのこうじ

- やはり今季推さずにはいられない一作です。ノミネートされて改めて読み返してみましたが、一巻のストーリー運びが素晴らしく、お話の中にぐぐっと引き込まれます。ややデフォルメされた頭身、シンプルけどもしなやかな線で描かれるキャラクターも背景も作品世界を表現するには十二分であり、それでいてしっかり読み応えがあるというマンガ力の高い作品だなと感じました。ペルシャからモンゴル帝国を舞台にした作品ということで、お話の背骨になる文化の描写も興味深く楽しいのですが、弱き立場の主人公が知の力を借りて生き抜いていこうとするだけでなく、作品全体において皆知恵という力を信じて求めている、というのがとてもよいです。既に多方面で注目されているかと思いますが、印象以上に骨太な作品なのでマンガ読み以外にも嗜んでいただきたいです。

公務員 / 宇田川結衣子

- 主人公の行く末が気になります。チンギスハーンの時代という珍しいテーマ。歴史好きならハーンの争奪戦がどう描かれるかにワクワクしますし、歴史を知らない人は「どうなるの？」的な楽しみ方があるかと。血なまぐさい時代が持つ重さを、絵のタッチが緩和してくれるのか、とても読みやすいです。

サブカル専門ライター / 河村鳴紘

- 史上最大の帝国に運命を狂わされる奴隷の少女。後宮での戦いに知性で立ち向かう歴史ロマン。

マンガ研究 / ライター / 会田洋

- 激動の時代を生き抜こうとする少女の強さ。腕力ではなく、知力と気力で道を拓こうとする意志の強さがまぶしい。マンガ的にディフォルメしつつも、生々しい感情を伝えてくる絵も素晴らしいと思います。

角川文庫編集部部長 / 関口靖彦

- 面白いものは、市場でマーケティングしてはいけない。信じるに足る少数者が、独善を行ったときに面白いものは現れる。イランから売られた奴隷少女がモンゴル帝国で地位を築いてゆくという現代日本人がほとんど知らないであろう大河ドラマを、ディフォルメを極めているのに、キャラクターの心情と歴史風俗のディティールがここまで伝わる画で描く、なんて、企画書には絶対に載らないであろうと思う。そしてその物語の魅力も画の魅力も、完成品を見れば誰の目にも一目瞭然。完成品をいきなり味あわせてくれる、マンガという手法の極みがここに。あー、完結までに何年かかるんだろう…！！

ニッポン放送アナウンサー / 吉田 尚記

- その絵柄の可愛さに惹かれた一巻から更に主要人物が増え、モンゴル帝国への復讐の始まりを予感させる二巻へ続いていく。タイトルの『ジャードゥーガル』とはアラビア語で『魔女』とのことだそうです。人の尊厳を奪い奪われることが当たり前、憎しみ渦巻くこの物語においてファティマ（シタラ）はどんな魔法を振るうのか。2023年沢山の人に読んで欲しい漫画として選ぶなら、本作を推したいと思います。

フリーランスデザイナー / 金輪英恵

- このところの歴史漫画の充実ぶりがたいへん素晴らしい日本ですが、ほんとどうしちゃったんでしょうか、チンギス・ハン死後のモンゴル帝国の動乱を後宮の女性の視点から描く大河ドラマ誕生です。チンギス・ハンの息子たち、兄弟間の葛藤の背後で交錯する女性たちの運命。殺戮と陰謀。話はハードなのですが、登場人物たちとの一定の距離感が作品に落ち着きを与えています。正直、まだこの物語の奥行きは底が知れず、これから歴史の荒波に翻弄されて時間の彼方に散り散りになっていくだろう登場人物たちの運命を見届けたいです。

教員 / 戸田穂

- 知を求めることが本当に人を救うのか。残酷さが常に漂っていて怖い。

大日本印刷 / 佐々木愛

- 改めて読み直したけど、シンプルな絵の中に複雑な感情が閉じ込められている表現が物凄くよい。知性をもつ大切さが第一話まるまる使って丁寧に描かれてるが、知性があるからこそ主人公は葛藤するのだと気づいてゾワッとしちゃう。賢い女が幸せとは限りないというけど、やっぱり賢い女は魅力的。

鳥取県高等学校教諭 / 佐川由加理

- モンゴル帝国の版図拡大時代におけるイスラム都市（ホラズム朝の都市か）に住む少女が主人公。この時代と地域を舞台に選んだのは秀逸（今後は時代考証が大変でしょう）。惜しむらくは、登場人物の絵が可愛いすぎる。どの顔もペコちゃんみたいで人物の区別もつかない。トゥルイ以下のモンゴル皇族がこんなに可愛い顔のほずがない。「乙嫁語り」レベルの絵を描いてくれとは言わないが、もう少し写実的な描写を切望する。

弁護士 / 三村 量一

- ポップな絵柄で誤魔化されそうだけど、シビアな物語。手持ちのカードで勝負する、なんて言うけれど、知識という、相手が持っていないカードで立ち向かう強さが好きです。

八重洲ブックセンター宇都宮パセオ店 / 山本さとみ

- 知らない世界を知ることができました。文化も考えも今の自分からすると新鮮で、ページが進むごとに好奇心がぐすぐすられました。一巻ラストの衝撃。奴隷の星に対し、優しく接し、学ぶことの素晴らしさを語った後に、感心するのではなく、腹立たしい、という感情が出てきたこと、そして、1ページまるまる使ってその感情を表していたことに、驚いたというか、意表を突かれた気持ちになりました。個人的に絵がとっても好みでした。

TEAM SHACHI / 秋本帆華

- 秋田書店のマンガサイト『Souffle（スーフル）』で連載されている、13世紀の中央アジアのモンゴル帝国を舞台とした作品。二次選考の時点ではもう2巻が発売されているが、今回の選考対象（2022年中に発刊されたコミックス）は1巻のみ。そして1巻は前提となる前フリ物語……なので票を投じるか迷ったが、1巻の時点で壮大なスケ-

ル感が描き出され、主人公の心情が激情と抑制の間でダイナミックに揺れ動く。21世紀の日本人には理解が難しいであろう世界観なのに心が揺さぶられる。名作の予感ひひし。面白いことに近未来を描いた「日本三國」同様、いまから800年近く前の世界を描いた本作も1巻の巻末に「13世紀初頭のユーラシア」と作中の登場人物や民族の関連を示した地図や作中の人物の相関関係、さらには人物の背景にも大きく関わる当時のイスラム世界の「奴隷」制度について説明がなされ、作品の土台となる部分を細かく規定している。細やかな設定を咀嚼してこそ満喫できる作品は現代マンガにおけるひとつのメインストリームでもある。既刊2巻（選考対象巻は1巻まで）以下続刊。

ライター／編集者（馬場企画）／松浦達也

- 歴史というものは、どうしても時代を経て歪んで伝わっていくものだと思うので、正しくはどうか？なんてのは私には到底わからないことですが、それでも歴史の一部を知ることができる上に、「かしこさ」の重要性も知ることができる美味すぎる作品……というのが既刊に対する感想として強くあります。ただ、それ以上に主人公ファティマ・ハトゥンのことを少しでも知っていると、この絵柄からどのように、その凄惨な生涯が描かれるのか興味が尽きません。ところで、「ジャードゥーガル」って「魔女」の意味なんですね！ ファティマと魔術って、切っても切り離せないキーワードだと思いますし、タイトルから何まで本当に好きです。

1616屋 / 杉本 善徳

- 絵が可愛い。とてもかわいい。昭和初期作品のような丸みのある可愛い造形。このかわいさと裏腹な骨太なストーリーが何よりも魅力。絵がかわいいので、骨太ストーリーを読む気分じゃないときでもずっと読めるところもポイントだ。作品に感情移入しがちな人は、重い話は精神を削られることが多いだろうが、絶妙なバランスでとても読みやすい。広くおすすめしたい作品！

クラスター株式会社 広報 / 西尾美里

- うっかりファティマに関する史実を読んでしまったが、本当にこれを最後まで描ききったら、ものすごい作品になるだろう。今から鳥肌が立ちます。「チ。」に近いテーマだと思いますが、ファンタジーでない分、難易度も高いはずで、そこも評価したい。小説でも映画でもおそらく不可能な、マンガでしか表現できない野心作。第1巻ではまだ早いかもしれないが、作者の志を応援したい。

読売新聞文化部編集委員 / 石田 汗太

- 逆境をひっくり返そうと、もがく主人公の話が好きなんです。かといって表からいくことはなくひたすら時機を待ちつづけ、「賢さ」という武器で立ち回る彼女の生き様、見届けます。

株式会社プロプラス商品部 / 池本美和

- 優しい画と対照的に苛烈な歴史物語が展開されてゆく作品。未だ巻数は進んでいないものの、主人公の成長してゆく様子は男女問わず共感を覚えるはず。おすすめです。

本と文具ツモリ 西部店 / 津守晋祐

- まだ一巻。壮大な物語の序章といったところ。これから始まる物語の期待を高める一冊でした。主人公のシタラ（のちのファティマ）の賢さと強さがとても魅力的です。シタラが学ぶことを決めるムハンマド坊ちゃんとの会話のシーンはその後の彼女の生き方を決定づけたといえるエピソードですが、これでこの先が面白くならないわけがない！と思わせてくれるエピソードでもありました。これからはとても楽しみです。

会社員 / 津田圭

- 中東の奴隷市場に売りに出された少女シタラ（後に、仕えた女主人ファティマの名を名乗る）が知恵と機転、そして怒りを武器に生き抜いていくさまを描く成長譚。既刊たった1巻でのエントリーだけど、中身はたっぷり濃厚。モンゴル帝国の勃興にも中世ユーラシア大陸史、みたいな世界にもまったく疎い自分でも、ぐいぐいと興味深く読める。「奴隷」という単語から想起される境遇と当時のイスラム社会のそれはずいぶん違ったものだったということも含めて学びの多いマンガ。現代からみればはるかに遠い13世紀が舞台ではあるが、人が社会をなすことの意味や、人間の容赦のなさ、何よりも「勉強して賢くなる」ことの大切さ、それが将来の難局において自分の身を助けることにつながるという時代を超えた真理が語られて腑に落ちる。世の中がみみっちい悪事に満ち満ちている今日のごろ、読むなら善悪の別を超えてこれくらいスケールの大きな作品が好ましい。昭和のアニメがぐるっと一

周してリメイクされたような、素朴にも感じられる、でもとてもかわいく達者なキャラクター造形（目力強い）や、広大かつ荒涼とした草原や漆黒の夜空をぐいと描く迷いのない描線にも助けられ、時空を越えた壮大な物語世界に案内してくれる。

日本経済新聞記者 / 天野賢一

- 「生きるって何?」「学んで何?」と真正面から突き付けてくる作品。当たり前のように自由があり、当たり前のように一定の選択肢がある日常が、当たり前ではないことに気づかされる。やたらと広大で、荒涼としたイメージばかりを勝手に思い浮かべていたモンゴルの、まったく違う顔に出会わせてくれた作品でもあります。

一般社団法人マリーゴールド / 島影真奈美

- 子供で、女性で、奴隷で…そんなシタラの目を通して描かれる過酷ながら熱の有る物語に引き込まれました。奪った側・奪われた側、どちらもまっすぐ未来を見ているのに共に有ることはきっと出来ない。これから彼女たちがどうやって生きて行くのかがとても気になります。当時の奴隷文化なども分かりやすく描いてあり、歴史モノが苦手な人や普段マンガを読まないけれど世界史が好き、という人には是非おすすめしたい一冊です。

会社員 / 畑中 瀬路奈

- モンゴル人が席卷するユーラシア大陸で、奴隷少女ファーティマがいかに生きていくのか。グローバル化が進んだ現代でも、東アジア、中近東、ヨーロッパなどと分かれてしまうユーラシア大陸だけど、モンゴル帝国ができたことでまぜこぜになってダイナミックに動いたこの時代は面白い。また、一人の女の子から見たモンゴル帝国というのも興味深い。

鳥取県立図書館 / 野間勤

- 実在の人物、ファーティマ・ハトゥンの生涯を想像を交えて描き出す作品。作者のフィクション部分のストーリーも素晴らしいので結末がわかっているにもかかわらず物語の行方から目を離すことができません。

MIGIMIMI SLEEP TIGHT / 涼平

- 中東とモンゴルの話しですが学ぶ事の尊さや反逆劇を面白く思いました

tetote 代表 / 力丸 真

- モンゴル帝国が世界最大の版図を誇った苛烈な時代。そんな時代に翻弄されながら、逞しく生きる少女が主人公です。非力な主人公は力が支配するモンゴル帝国の中で知恵を武器に逞しく動く生き抜いて行きます。その姿は学ぶ時間が充分にある頃にはなかなか気が付けなかった、「知恵は自分の未来の選択肢を広げ、人生を豊かにするきっかけをくれる。」ということをごく自然に教えてくれます。選考時点でまだ一巻しか出ていないのですが、自信をもってすべての人におすすめできます。

会社員 / 廣瀬 公将

マンガ大賞2023 ノミネート作品

マンガワン・裏サンデー / 小学館

「日本三國」松木いっか

選考員コメント・1次選考

- 設定が作り込まれていてどんどん主人公に感情移入していく作品。日本の国取り物語。間違いなく今年一年1番人に勧めた漫画です。

ヘアメイク / 北原由梨

- 次にくる漫画はこれで決まりでは?! 弁が立つことを武器に主人公がどうサバイブしていくのか見もの。軽快な会話とスカッとジャパンみのあるストーリーが気持ちよい。少し変わった線で描かれた絵柄が良い! キャラもそれぞれに癖があり、それも良い!

bar 図書室店主 / 岡部愛

- 個人的には2022のNo.1 ヒット漫画です。近未来の日本を舞台にした架空戦記ものなのですが、クオリティがとにかくすごい。絵もキャラクターも話の詰め具合もどれをとっても穴がなく、凄まじいです。日常の会話のギャグもシュールで好きですし、そこでさえIQの低さが近未来の日本を舞台にした場合どういう教育がなされるかなどの設定から来てるのを読み解けて、その徹底具合にため息が出ます。唯一言おうとするなら、きっとこの漫画は20巻やそこそこ出たとしてもまだ序章の可能性があり、大ヒットしないとこの面白い漫画の続きが読めないかもしれないという危機感があります。どうにかして読みたい!と思わされてしまうほど好きです。以前ブクロキックスという漫画を書いていたのは知っていたのですが、まさかここまで化けるとは…。

OKAMOTO'S(SMA) / オカモトショウ

- 未来の話なのに文明レベルが下がってる。その時人々は・・・と作りこまれた設定と練られたストーリー。これぞ硬派、まさに骨太な作品です。作者が「描かれている舞台」よりも前の年表も公開されており、その熱量たるや。自分の正義と生き様を見せつけられていきます。こんな強い想いで「生きる」ことをしていますか。どう「自分」を時代に残しますか。答えられない皆様は必読です。

図案家 / 橋本寛子

- 令和末期の第4次産業革命に圧倒的大敗を喫し、少子高齢化は加速の一途。教育レベルは転げ落ちる坂のごとし。おりあしく核戦争が勃発して難民が一気に流入。新型コロナを凌駕する新型感染症も蔓延する。政治は墮落し経済は腐敗を極め、国富が上級国民に集中するさまを目の当たりにした民衆が暴力革命で蜂起。インフラ、文化、技術を破壊し尽くし、わずか数年で人口は10分の1以下に。文明レベルは明治初期の水準まで後退し、軍閥が割拠する戦乱の世が始まった。——なんていう荒廃しきったディストピアとして未来の日本を描いているところがもう、身もふたもなくすごい。日本人が日々漠然と、あるいは確信的に「こうなるんじゃないか」と思っている国の将来像をそのまま提示した舞台装置で、権力闘争とか欲望とか力とか奸智とか知力とか胆力とか決断力とかの古典的な「ものがたり」が縦横に展開するのだから、これは引き込まれずにはいられないというもの。

日本経済新聞記者 / 天野賢一

- 空想の日本の設定の完成度が高い

会社員 / 齋藤隼

- 日本が滅亡した。社会崩壊、文明後退、戦乱の世へ突入。そんな時代でも幸せだった青輝の復讐劇が始まる。劇画のようで、物語の軸がしっかりしているので久しぶりの読ませる漫画。

コミック担当 / 実松由夏

選考員コメント・2次選考

- 今後への期待も含め、この漫画の勢いが去年の No.1 でした。

OKAMOTO'S(SMA) / オカモトショウ

- 時は未来、文化は過去という異色の日本で、怒涛の如く展開するハードな国取り模様一気に引き込まれる。彩度が低く、冷たくて重たそうな世界の空気をビシビシと感じさせてくれる画が印象的で、人物たちのハイライトの無い瞳によって感じさせられる恐怖や緊張感がまたクセになる。敵役が最高に敵役してくれているのもいい。圧倒的な権力と武力を、知略がどう掻き回していくのか、この先も期待大。

会社員 / 伊東敬祐

- 世界戦争により文化文明が破壊され明治初期レベルまで衰退し、3つに分かれた日本を舞台にした作品ですが、これを近未来戦記物、と表現するにはあまりにも生々しく、荒々しく、収まりきらない迫力を感じます。言葉遣いや背景に今の世との地続き感がありますが、いわゆる近未来感ゼロ（笑）近代的な武器等は今のところは一切出でこず日本の戦国時代のように人を動かし、策略し、戦争というよりは戦（いくさ）で世が動いていく世界です。カタストロフィ後の世界を描いた作品は漫画に限らず星の数ほどありますが、ありそうでなかったこの世界設定が素晴らしいと思います。戦ものということで導入からずっと野蛮で残酷なストーリー展開が続くつらいところですが、敵味方入り乱れるなか各陣営の軍師や将軍たちがどのように策を練り、どのように打破していくのか、そして三国に分かれた日本がどのようになっていくのか先が気になります。タイトルもシンプルに日本三国とされているところも、歴史ものではない、なぞらえているのではない、ただ今この日本の三国で起こっているというリアルである、という感じがします。ノミネートされて初めて読みましたが、既刊3巻でこんなに濃い作品が出ていたことにびっくり。もっと知られてほしい！！

公務員 / 宇田川結衣子

- 衝撃的な始まりから戦いに挑む主人公が熱い！！己の知力を駆使し、これからどうやって勝ち抜いていくのが楽しみです。まさに、「舌は刃より強し」！！また、主人公を取り巻くキャラ達の濃ゆいこと、、、必見、ということで宜しいか。

うすまりこ鍼灸院 / 碓氷麻里子

- めちゃくちゃ迷ったんですが、作品にあふれる意思の強さを見過ごせず選んでしまいました。空想歴史合戦もので理屈が多いので読むの時間がかかりますが、夢中になって読んでしまった。3巻がとてよくて、続きも気になる美味しいところです。これからどうなるのか、どこまで続くのかわかりませんが、見守っていきたい。

ヘリックス・クリエイティブ(株)WEBデザイナー / 河本 智芳

- ページをめくらせる力がいばん強かった作品。こちらもち知力と胆力で時代と切り結ぶ青年の物語。過去のような未来のような「日本」の在り様がリアル。

角川文庫編集部部長 / 関口靖彦

- 未来の日本版三国志。そんな未来無いだろうと思いつつも、ドンドン読みたくなるストーリーで話の作り方が上手い！！読む手が止まらなくなる。1巻3話目に、未来の話というのを活かして現在のネタで切り返したのは、その手があったかと感心した！意志の強い主人公が武力ではなく知識で駆け上がっていく様を見るのは面白く、どこまで行けるのか見てみたいです！

主婦 / 岸本しのぶ

- 腐敗や理不尽、退廃。そこに生きて自分を武器としてどのようにして、かく生きていくか。どしんと重さを感じる硬派な作品です。快樂のため、正義のため、復讐のため。恐ろしく冷たい環境設定ですが、リアルさを感じてヒヤッとします。こうなったら、どう生きていくんだろうか。考えながら読み続けたいです。

図案家 / 橋本寛子

- 強烈な刺激的漫画。揺さぶられる。知略、計略、謀略。一人の青年が分かれた日本を再統一するために立ち上がり、信念を貫く。読み応えがあり、引き込まれること間違いなし。

三省堂書店海老名店・コミック担当 / 近西良昌

- 時代設定、キャラクター、台詞回し、画の魅せ方、その端々に作者のセンスの良さが垣間見える。珍しいのが、本作は残虐な処刑描写はあれど何故か戦闘シーンが驚くほど描かれない。その戦闘シーンの少なさを補って余るぐらいの圧倒的台詞量が目が離させないのかもしれない。最近流行りの流れとはまたちょっと異なる、新しい時代の漫画を読んでいる気がする。まだまだこの作品がどんな風に化けるのかが予想できないので、これからも自重せず突き進んで欲しい。

フリーランスデザイナー / 金輪英恵

- 一巻の入りがとても重いし、日本が減んだあとの if 話ぐらいかな？とおもって読み進めていくと、いつのまにかしっかりとした戦国歴史小説を読んでいるような感覚にされる。巻数を重ねるごとに引き込まれていくので今後が楽しみですな作品です。

デザイナー / 高永貞光

- 文明が後退した日本が舞台の架空戦記。構成が練りこまれており、作者の熱意を感じます。現代の日本社会を経た未来の設定なので、キャラクターが現代風の台詞を使うのも緩急があり読みやすいです。今後、どのような軍師になるのか楽しみ！

出版社営業 / 佐々木つむぎ

- 圧がすごい。

大日本印刷 / 佐々木愛

- 導入と設定が突飛で最初面喰いでしたが、1話1話での丁寧な設定の説明、魅力的なキャラ、異様な情報量と凄まじい画力で軽快に進む硬派なエピソードが本当に面白い。タイトル通りなんですけど三国志を始めとした、歴史戦国モノの作品に造詣が深いとより楽しめると思います。

会社員 / 三浦佑樹

- 物語のスケールがでかい！っていう中に個々の人生の厚みと煌めきがあって、逆に儂さが際立つ。これこそロマン。

往来堂書店 / 三木雄太

- 久しぶりに「読ませる漫画」に出会える作品。過去の話かと思いきや、遠い未来に国家が崩壊した後の衰退した日本の話。線が太くて迫力のある絵と、登場人物の圧倒的熱量、そして作りこまれた設定と物語の進み方が素晴らしく、引き込まれる。

コミック担当 / 実松由夏

- 今一番続きが気になり、できれば完結したとき全巻一気に読みたくなるいろいろと圧倒的な作品。

ロングランプランニング / 小森和博

- 落語には`古典、と`新作、のほかにも`改作、というジャンルがある。古典落語を現代的な設定や描写に置き換え、アレンジした解釈で聞かせるのが改作落語だ（※『あかね噺』参照）。そして『日本三國』はかの『三国志』の改作マンガという新境地を開拓した。出版社の説明文には「文明崩壊後の近未来、再び戦国時代と化した日本を再統一すべく一人の青年が立ち上がった。名は三角青輝。後に奇才軍師と称される彼の伝説が、いま始まる！！」と書かれているように、主人公は軍師（となる予定の男）……ではあるのだが、本作品は1行で語り尽くせるような作品ではまったくない。知略に長けた主人公に、武に長けた準主役。その他の登場人物も含めて、実にキャラクターが躍動的。敵役の憎憎しさは、心底腹立たしい気持ちになるほど。現在刊行されている3巻までの巻末にはより細やかな設定が記されている。1巻は作中に描かれた近未来年表と人物紹介①。2巻は人物紹介②と組織図。3巻には皇族氏族・人物紹介という風に非常に細かい設定がなされている。緻密な設定はとても強固で、そこに盛大に風呂敷を広げた作者の度胸は覚悟となって作中の登場人物に憑依する。絵柄に得手不得手はあるタイプタッチだが、血なまぐさい描写やシーンにはすべて理由がある。主人公のみならず、今後どのキャラがどのように育ち、国同士の衝突はどうなるか、最前線に立つ兵士はどう描かれるのかなど、興味は尽きない。既刊3巻以下続刊。

ライター／編集者（馬場企画） / 松浦達也

- 1話から衝撃だ。王道の展開といえば展開だが、やはり引き込まれる。その冒頭から広がる壮大な戦物語。たまらない。そして絵が美しい。まるで映画を見ているかのような1コマ1コマの美しさに引き込まれる。セリフもまた

そう。そして女性が強くたくましくて素敵なのもいい。好き嫌いは別れるだろうが、重厚な物語が好きな人にはぜひおすすめしたい。

クラスター株式会社 広報 / 西尾美里

- 三国志や軍記モノでの三つ巴というのは基本面白いんですが、細部をどう詰めて納得感がある大嘘をつくかという匙加減は非常に難しく、読み進める中で引っかかりを感じて読むのをやめてしまうという事が多いのですが、時代と舞台の設定・各勢力の描き方。主人公の動機を含めて「こりゃ一本取られた！」と感じ入ってしまう着眼点に終始圧倒され、最新刊まで一気に読み進めてしまった作品

住職・ライター / 蟬丸P

- 連載開始当初から自分の周りでは「これはやばい」と話されていたほど、最初から異質な雰囲気を出していた漫画です。そこはかとなく醸し出される昭和劇画テイストの絵柄にマッチしすぎているストーリーは、ファンタジーとリアリティの丁度ど真ん中に突き刺さり、読み手をその物語の中にどっぷりと漬からせてくれます。戦時中なのでお気に入りのキャラクターたちがいつどこで死んでもおかしくない状況なのも読んでこちらとしてはドキドキが止まりません。そのくせ物語はたんと進んでいくので気付いたら読めるところまでは読み終わってる不思議。やばすぎて僕個人は1次選考で投票するの忘れてて、それでもノミネートされて「そうだ、忘れてた。やばい」とまたなりました。

バーテンダー / 村井真也

- まさかこんなにもぐわっと気持ちを鷲掴みにされるとは。他の作品を圧倒するほどの圧倒的な画圧力で目が離せなくて。まるで戦国時代のような群雄割拠の時代となった日本三國の世界に、権力と暴力に立ち向かうべく、軍師として立ち向かい、登り詰めていくのか…。不条理に立ち向かう行き着く先はどこなのか。とにかく読んで！とおススメしたい作品です。

女優・ジェネラリスト / 大倉照結

- 武力と戦略！策略なのか？という先の読めない展開に頭をフル稼働してついていく。イッキ読み必至のマンガ

あゆみ BOOKS 仙台一番町店 店長 / 土屋修一

- 令和末期、様々な事が起き事実上の日本滅亡…文明が明治初期レベルまで後退したその数十年後の話。という説明が冒頭4ページで終わります。そこからの1話が重く、個人的にダメージを受けたのですが、2話からのテンションが…思ってたんと違う。民のために動く女総帥は「尊い」、親指をぐっと立て「いいね」、芸妓集団「愛踊須田亜(あいどるすたー)」の髪型や衣装は日本時代末期風、即ちAKB風。一度滅んだからこそその台詞が面白く何度も笑ってしまいました。みんなモノローグでノリツッコミするのも好きです。シリアスなのにテンポよく笑って読める不思議な漫画。むちゃくちゃなことする奴らは見ていて面白いしスカッとする。早く続きが読みたいです。

声優 / 富岡美沙子

- 文明が崩壊した未来は戦国時代だった、という世界観が心をくすぐります。知力を使い日本統一を目指す主人公はもちろん、他のキャラクターも魅力的で本当に格好良い。正義の敵は正義であるし、清濁の両方を孕むのが人間なのだと感じるマンガです。残虐性とコミカルさのギャップもあり、テンポ良く読めます。

デザイナー/シンガーソングライター / 平松新

- きつさと怒りのスタート。自分がこんな目にあったらこうするだろうな(実際にはできないけど)こうすることが自分を保てるだろうなと思わせられました。

カメラマン / 平沼久奈

- 最初は歴史物だと思っていたが全然違った。キャラクターがとにかく魅力的。この漫画の面白さが伝わるように一生懸命色々考えたが何も思い浮かばない。読めばわかるメチャクチャ面白い。

ヘアメイク / 北原由梨

- 作品がアンバランスになっていきやしないかとか、あまりに大風呂敷で展開しすぎて破綻するんじゃないかとか、心配するのをよそに、どんどん進むこのドロドロした未来の日本。これはもう先に何が起こるのか知りたいという意味でも、ナンバーワンしかありえない。現時点での期待感は群を抜いているし、妻との誓いをどう達成す

るのか、そのページを見るまで、自分も生き残らねば、という気持ちにすらなる。どうかご無事で。そしてこの乱世の終結を描き切ってください。

October Beast 代表 / デザイナー / 北山友之

■ 驚愕の設定の緻密さ

会社員 / 齋藤隼

マンガ大賞2023 ノミネート作品

少年ジャンプ+ / 集英社

「さよなら絵梨」藤本タツキ

選考員コメント・1次選考

- 今までの作品より、さらに作者自身のルーツ感が色濃く出ているように感じられる作品。話の緩急が自在で素晴らしい作品です。

MIGIMIMI SLEEP TIGHT / 涼平

- 『ファイアパンチ』に『チェーンソーマン』。発表当時、自分的大ブッシュをし、「マンガ大賞にしたい！」と選考で熱く推しまくったのを思い出す。残念ながらどちらも大賞は逃したが、『ルックバック』でSNSから話題になり、評価を得て賞もとり、著名人の絶賛コメントと共に世間にその名を轟かせたのは皆さんもご存じの通り。そして昨年の『チェーンソーマン』のアニメは大人気に。今や売れっ子の藤本タツキに、もう名を売ることのないこの作家に、でもまたこうしてブッシュをしてしまうのは何故なのか？マンガの可能性はまだこんなにもあるのかという「衝撃」。異端ではなく彼は紛れもなくマンガに革命を起こしている。かつての手塚治虫が映画的だと評され、大友克洋が映画そのものだと評された。それと同等のようでありながらまったくもって新しい。まだ世間は作品が面白すぎてその大きさに気が付いていないのかもしれない。作家の化学反応は少なくともここ数年既に起こっている気はする。『さよなら絵梨』は映画を題材にしながら映画そのものを漫画にした1冊。母の死を、恋人の死を、ドキュメンタリーをエンタメにしてしまう手法を取った。これはマイケル・ムーア映画のように恣意的で『レナードの朝』のように涙にくれる。だがその実『食人族』のようなユーモラスなフェイクさにあふれている。『ルックバック』と肩を並べる傑作だし、推さない理由など何もない。

October Beast 代表 / デザイナー / 北山 友之

- すべてここにもっていくのか！読み終えた瞬間つながって、ここまで考えてたんだと思った夢中で読める1冊でした。

ブックエース上荒川店コミック担当 / 倉本かおり

- 去年は『ルックバック』が2021年ベスト単行本と挙げたが今年は『さよなら絵梨』でいいや。虚々実々を織り交ぜて、凶暴で乱暴で、ハンマーの一撃みたいに強烈で致命的だが、最後には未来への希望だけがある、パンドラの箱みたいなマンガ。ただし箱にはばくだんが仕掛けられて、5%の確率で爆発する。爆発は、ありとあらゆる不安としがらみと不幸とを、高らかに吹き飛ばす。その爆発を背に、人は歩いて行く。その人の顔は、少しだけ朗らかだろう。

ソフトウェアエンジニア / 第弐齋藤

- 何て都合の良い展開！と思いつつもヒロインの魅力に抗えず引き込まれて読み進めれば、ページをめくるごとに鮮やかなどんでん返し！ 風に舞う木の葉のように翻弄されて、読後は「いったいま自分はどこにいるの？」「私は何を読んでいたの？」と、呆然とさせられる。

朝日新聞記者 / 小原篤

- 話の構成やコマ割りが練り上げられていて、読んで良かった！と思わせられる作品。

主婦 / 岸本しのぶ

- さすがの藤本タツキ先生。とにかく漫画を読ませる腕力がピカイチで強い。頭鷲掴んでコマから目を離さないようにしておいた癖に、ラストで原稿グシャッと握り潰してぼーい(※爆散)で、おしまい。私は藤本タツキに振り回された体験だけで超満足しました。こんな感想で申し訳ない。

フリーランスデザイナー / 金輪英恵

選考員コメント・2次選考

- 作り手が勝手に救われる話かもだが、やはりそれでも求めてしまう上手さがあります

コメディアン / インコさん

- 前作読切「ルックバック」に続き、読切1作品のみで単行本化って凄まじいですね。藤本先生の作品は急にヒンヤリするシーンをぶっ込んでくるので、今回は身構えて読み、段々藤本作品に慣れてきたぜっ!と思っていたのですが、ラストシーンにお口があんぐりでした。。最高。普段読んだ作品のレビューなどは見たりしないようにしているのですが、この作品に関しては他の読者の感想を見たいなと思いましたし、特に最後のシーンについては延々と話ができる気がします。

会社員 / ターシ

- 小説のようでもあり、詩集のようでもあり、映画のようでもあり、ドキュメンタリーのようでもある「さよなら絵梨」。間違えなくマンガなのです。マンガなのに行間を読むとでも言うのでしょうか。シーンによってはセリフもト書きも一切なく絵だけで表現されている。決して作者の独りよがりではなく、このマンガを読む僕たちにたくさん語りかけてきます。

(株) エフ・ジェイエンターテインメントワークス / 阿部 大介

- ゆるく見せることに対する、緻密な緊張感。読者のためのサプライズが、内発的に感じる。アーティスティックなようで、エンターテインメントとしてケリがついている。ミュージカルのような圧倒的な作り込みの感動はこの世にももちろんあるけれど、本人が本人のために描いているような作品を、横から覗かせてもらえた時にだけ感じられる満足感が、マンガならではの楽しみなんじゃないでしょうか。客席で圧倒されるわけでもなかった、舞台裏を見るドキュメンタリーでもなかった。初めて連れてこられた視点の作品。1冊の本としての満足感がすごい。

ニッポン放送アナウンサー / 吉田 尚記

- 虚構と現実の境界がどこなのか、何度も突き放されてひっくり返るとんでも世界観な作品です。この作品をどう捉えるのか、禅問答に付き合わされているかのようで、読み手によってどこに感情の琴線が触れるのか異なると思います。一見、大人向け難解な映画によくある作品のようで、とてもわかりやすくあり。問いかけてくるようでケムに巻いてくる。王道のようで邪道でもある。しかし決して不愉快ではない、どこまでも不思議な漫画です。

会社員 / 佐藤優

- 甘いものと塩辛いものを交互に食べると止まらなくなる、と言いますが、このマンガも同じ。痛いと思えばカッコいいし、ひどいと思えばやさしいし、良い話と思えば悪い話になるし、ハグされて蹴飛ばされ、泣けると思ったら大笑い。楽しませてもらいました。

朝日新聞記者 / 小原篤

- 登場人物のセリフにもあるように、どこまでが真実で創作かわからなくて読み手が翻弄されるような展開が面白く、色々考察したくなる作品でした。前作「ルックバック」同様今回もクリエイターが主人公の作品ということで、セリフにも説得力と生々しさがあり、とても引き込まれます。

会社員 / 小野塚博之

- 読み終わった直後「こりゃすげえ」と漏らしていた。どこからどこまでがひとつの作品なのか、どれが物語の中でのフィクションで、どこまでが現実なのかわからないストーリー。特徴的なコマ割りも物語に噛み合っており、秀逸。自分が感じた衝撃は、これを読んだ他の方にはどう伝わるのだろう。ぜひ手にとって読んでほしい。

会社員 / 杉 佳尚

- 毎年同じことを書いていますが、この人のマンガ表現における映像センスは、大友克洋以来の「革命」だと思います。ジャンプ・ブランドのど真ん中で、ジャンプの方法論を脅かすような、批評性の高い作品を描き続けているのもすごい。それがよく発揮されている点で、本作は前年の「ルックバック」より断然よいと思う。実はさらにその上に行くのが「チェンソーマン」第2部（第12巻以後）だと思っていますが、この賞の規定で推せないのが残念です。

読売新聞文化部編集委員 / 石田 汗太

- モキュメンタリーはあくまで創作でドキュメンタリーではない。いや、ドキュメンタリーも誰かが撮って編集してるときに創作なのかも。なんてことを考えながら読みました。何度も読んで、理解したくなる作品。いややっぱり、

漫画を描くのが上手いな。映画のシーンカットのようなコマ割り、人の感情の動き、絵のうまさの全部詰め。一冊読み切りでまとまりが良い。大賞に選ぶなら、やっぱりこの作品かな。

主婦 / 赤坂真実

- ドキュメンタリー調のコマ割りで進んでいく本編とそこに重ねられる虚構、話が進んでいくうちに明かされる美談とはいえない家族の側面、閉塞感からの脱却を為そうと足掻いてみせるも……と、読者の感情を揺さぶりつつミスリードをさせ、そのミスリードすら真実ではなかったという入れ子の構造をモキュメンタリーとして読ませきるスピード感。読後の酩酊感と爽快感はひとしおであり、技巧と表現の巧みさという意味では選ばざるをえないという作品でした。

住職・ライター / 蟬丸P

- すべてここにもっていくのか！読み終えた瞬間つながって、ここまで考えてたんだと思った夢中で読める1冊でした。

ブックエース上荒川店コミック担当 / 倉本かおり

- 2022年のベスト単行本。映画大好き藤本さんの面目躍如。これだけ大々的に映画！映画！映画！にフォーカスしておきながら、でもやっぱり漫画でしかできない表現になってるのがすげえ。単行本1巻まるまる全部コマ割り一緒とか正気じゃねえよ。ラストページの爽快感といったらなくてありとあらゆるものを吹き飛ばさないと描けない抒情というものもあるんだろう、と思うのこと。努力 未来 A BEAUTIFUL STAR 努力 未来 A BEAUTIFUL STAR

ソフトウェアエンジニア / 第貳齋藤

- 藤本タツキ先生の短編作品が大好きです。前作もとんでもない魅力が詰まっていたわけですが、今作「さよなら絵梨」については、個人的にとてつもなく心に突き刺さるものがありました。藤本タツキ先生の作品をつくる上で哲学が透けて見えてくるようなワードが多く、くすぐられまくり…。おそらく、作り手の皆さんにはことさらピンピン響くんじゃないかなあ…と思います。「ファンタジーがひとつまみ たりないんじゃない？」名言ですね。流行語大賞に選ばれてほしいくらい。この作品内においての「ファンタジー」が全て「爆破」として描かれてるあたりにも、リスペクトを禁じえません。

音楽家 閃き堂店主 / 谷澤智文

- 途中で漫画を読んでいることを忘れてしまうような、本当に一本の映画を観ていたような読後感。漫画の技法で、漫画ではないものを表現している。現実の生々しさと夢の中にいるような不条理さ、アンバランスなのに切り刻まれるようなリアリティ。一つの画面に固定された、人々のある一面しか描かれていないのに肌にビリビリするくらい人間の感情が実感できる。説明が難しい、読んで感じる、体験する作品。ラストシーンに鳥肌。

元書店員 / 内野智未

- どこから書くべきか……うまく言語化できない私なんぞ爆破してほしいでホンマ。一回読んだら絶対に忘れられない話だよいつだって脳裏に浮かぶ。どこから現実でどこから空想？どこから事実でどこから創作？インターネットは脳世界を創り出してスマホは脳世界をいつでも手を伸ばせば届く距離に引き寄せた。ゲームやアニメやマンガは毎日数えきれないほど生み出されていて、ある人にとってはやリアルなんて現実には無い。「死ぬほどある」なんていう言葉があるけど世にある作品なんて一人が死ぬまでの時間じゃ追いきれなくて普通に時間足りないよね。何なら現代人が生きてる時間の何割を創作物に触れるために費やしてるかなんて考えると、私なんて余裕で人生の3割はファンタジーだ。125ページの母親の一言、一コマでガラッと世界がひっくり返ったのがもう堪らなく筆舌しがたい体験だった。「人の思い出させ方」という概念をこの作品通して読者全員が思い知ったと思う。三人で食事してるクソつままないシーンでお父さんの言った「作り手も傷つかないとフェアじゃない」っていうのがすごい刺さって刺さって…。そんなストイックじゃなくて良いけどストイックにならないと創作なんてそもそもできないし受け手が毎回傲慢でほんと申し訳ない。お父さんが怒り出したシーンも移入しようと思ったらすぐひっくり返されて本当に掌の上をコロコロさせられて楽しい。私もファンタジーをひとつまみ入れられる人間になりたい。ちくしょう自分が拾いきれてない仕掛けはなんだ？分からない自分が恨めしい。「爆発オチなんてさいてー！！！」

会社員 / 布施直人

- 稀代の異才が「表現」をモチーフに奇術的な語りを駆使した野心作。特徴的なコマ割りと反転を重ねるプロットの作家性に圧倒される。

書評家 / 福井健太

- 母親の病をきっかけに映画を作る主人公と、それに協力する少女絵梨との体験を描いた作品。言葉にするとどれも不正解な気がしますが、自分の感情をミキサーに入れてかき混ぜられて、最後爆散するみたいな感覚になります。虚無虚無虚無虚無・憤怒感動・虚無爆散みたいなイメージです。何も伝わりませんね。タツキ先生の作品はどれも感情を揺さぶられますが、今回もしてやられました。映画に対する愛も感じられて、とてもすきです。

デザイナー/シンガーソングライター / 平松新

- 淡々としたコマ割りが意外と読みやすく、最後の展開がまったくわからないまま最後まで読みきってしまいました。まさかのオチが天井。落とし方がそこまでの物語をすべてふっとばしてくれて、スッキリしました。

デザイナー / 平沼寛史

- 悲しいけど温かい！けど悲しい。そんなマンガです。

カメラマン / 平沼久奈

- 『さよなら絵梨』は映画を題材にしながら映画そのものを漫画にした1冊。母の死を、恋人の死を、ドキュメンタリーをエンタメにしてしまう。これはマイケル・ムーア映画のように恣意的で『レナードの朝』のように涙にくれる。だがその実『食人族』のようなユーモラスなフェイクさにあふれている。『ルックバック』と肩を並べる傑作だし、推さない理由など何もない。最終で再度読み直したが、帰納法が実にちゃんとしていた。オーソドックスをちゃんと踏襲していることも称賛に値する。

October Beast 代表 / デザイナー / 北山友之

- 初見の衝撃に圧倒されがちですが、是非何度も読みたい、読んで欲しいお話です。絵梨とは何だったのか？それが現実か虚構はあまり大きな問題ではないのかもしれないです。優太はきっとこの先、この記憶を頼りに生きていく。私たちも結局、絵梨と優太にとっての映画のような、何か一つのを頼りに、この世界を生きていくしかない。前作ルックバックを読んだ時にも感じましたが、とにかく生きて自分の生活を送ることが全てなのだと思うされるお話でした。

会社員 / 堀尾素子

「スーパーの裏でヤニ吸うふたり」地主

選考員コメント・1次選考

- 喫煙所という昨今は肩身の狭い場所を契機にして、しがないサラリーマンとスーパーのレジ係のヒロインが徐々に打ち解けていくという Twitter 発・web 投稿からの作品。商業ベースの連載であれば企画を通すのも難しかったであろう題材やシチュエーションも web 発であれば反響次第でゴーサインが出るというパターンは最近では珍しくなくなりましたが、従来の出版事情であれば死蔵されてしまったであろう漫画やアイデアが世に出る可能性を広げてくれたのでインディー感も含めて Web 投稿は無視できないジャンルに育っていると実感します。

住職・ライター / 蟬丸 P

- 中年サラリーマンとスーパーのレジ係の恋愛とも友情とも尊敬ともいえぬ感情を抱く二人が、喫煙所でたばこを吸うという時間をお互いが大切にしているところをほっこりした気持ちで眺めている物語。穏やかに流れる時間を共有し、とても癒される。

デザイナー / 高永貞光

- 山田さんの 2 面性のギャップが好き。忙しい日が続いた後の、ふとした時間に読んで待ったりできる作品です。タバコは僕も吸ってますが、こんな出会いはなかった。

広告会社 プランナー / 平沼良章

- もう売っていますが、推しです。主人公の中年男性の歳が近いからでしょうか。鈍感なこの男性を少し羨ましいと思ってしまいます。早く付き合っちゃえよ！とか思ってしまいます。でも、ヤニ吸うこの距離感と関係性がとても絶妙で、ニヤニヤしながら読んでしまいます。是非試し読みからでも読んでみて欲しい作品。

三省堂書店海老名店・コミック担当 / 近西良昌

- ふと『恋は雨上がりのように』を思い出した。おじさんと若き女性というシチュエーション、おじさんを女性の方がむしろ好きになってしまっているのも似ている。が、この感情の伝わらないドキドキがたまらない。山田と田山が同一人物だとわからない（わかるよね、普通w）鈍感すぎるおじさん佐々木。このままの関係でずっとずっといて欲しいと願いながら発展も願っている店長の感覚にシンクロする読者の顔すら感じてしまう。してやったりのスゴ技だが、このバランスを維持するのはなかなか大変な気もしてしまう。スパッと終わってしまってもいいし、ずっと続いてしまってもいい、なんというか絶妙。夢のような漫画の中なので、2 人が最後までうまくいきますように。

October Beast 代表 / デザイナー / 北山 友之

- こここ！こういうのが！良いんだよなア〜〜！自分はタバコが大の苦手なのですが、このシチュエーションがすっっっごく羨ましい！！タバコ吸いたくないけど羨ましい！！副流煙が本当に嫌なんだけど！！とにかく羨ましい！！スーパーの裏で深まる 2 人の関係を、微笑ましく見守っています。

デザイナー / シンガーソングライター / 平松新

- このご時世にタバコを題材にした作品はなかなか強気だなと思いますが、内容自体はただほっこりするもので、一人の疲れたサラリーマンと一人のスーパーの店員が、ただ喫煙所で一緒にタバコを吸って交流する、ただそれだけの内容。でもそれがたまらなく愛おしく思えるやり取りで、夢中でページをめくってしまいました

会社員 / 三浦佑樹

- 物語はタイトルの通り。二人の登場人物がスーパーの裏でタバコを吸う。そこに事件があるわけでもなく、タバコを吸いながら会話を交わすことが物語の大筋である。ただそれだけなのにこの物語は優しさや柔らかい雰囲気でもまれており、読むと心が暖くなる。レジ打ちバイトの山田の笑顔に癒されて日々の激務を耐えているサラリーマンの佐々木だが、誰もがそういった些細な癒しや楽しみに救われているのではないだろうか。読むたびに気遣いや優しさについて考えさせられ、荒んだ日々の中でも穏やかな心持ちでいられる。自分にとってはこの物語こそが、佐々木にとっての山田の笑顔のような存在である。

会社員 / 杉 佳尚

■ なぜ気づかない！はさておき、純粹に中年男性（私）はニヤニヤが止まらない！

あゆみ BOOKS 仙台一番町店 店長 / 土屋修一

選考員コメント・2次選考

- 世の中的に肩身が狭いタバコが介する、もどかしい二人の関係、、、と、今だからできる設定にも共感しました

コメディアン / インコさん

- 二つの顔を持つ田山さんと、鈍感な佐々木さんのポジショニングが絶妙。二人の関係をほとんど進めないまま、これだけネタがあることに感心します。疲れた大人の人はぜひ一読を。何だか癒されます。

サブカル専門ライター / 河村鳴紘

- 喫煙者ではないし、吸いたいたも思わないですが、この作品を読んでなんとも羨ましいシチュエーションだことと思いつつ、それでもニヤニヤが止まらない。エア両想いな漫画。はやく気付け！と声かけたい衝動に駆られながらも、いやいやこの二人の関係性をまだまだぞっと見ていたいと思う心との葛藤。読者へ巧みな心理をついてるなあと感じます。微笑ましいこの二人をずっと眺めていたい。

三省堂書店海老名店・コミック担当 / 近西良昌

- 恋のような憧れのような尊敬のような気持ちがいきりじまじるが恋愛に発展はせず、その空気感をひたすら楽しめる漫画。この漫画からしか得られない栄養がある。

デザイナー / 高永貞光

- 今後どうなるかゆるく気になる。ほっこりして好きです。

ヴァイオリニスト / 佐藤帆乃佳

- タイトル通り、スーパーの裏でたばこを吸う・・・だけですが、そこで繰り広げられる会話や人間模様が素朴だけどもとてもリアル。そしてとにかく、登場人物が全員、なんだか、かわいい。タバコ嫌いですが、こんな関係性は嫌いじゃないです。

コミック担当 / 実松由夏

- 2人の関係にニヤリとしてしまいました。

ブックファースト新宿店 / 渋谷 孝

- 自分にとって今年、人にぜひ勧めたいと思う作品を思い浮かべたときに真っ先に浮かぶのはこの作品。登場人物がそれぞれ非常に魅力的で、どの話も優しさであふれている。その一方で日々感じる理不尽にさらされたり不満を感じたりと彼らが負の感情を抱えるシーンもある。普段の我々の日常もそういったことの繰り返しであると思う。そんな中で佐々木と田山はそれぞれにいろんな癒され方をして、お互いに勇気づけられて。そうやって乗り越えていくその姿に自分を重ね合わせたりして、今日も頑張るぞ、となる。ただ癒されるだけでなく、元気ももらえる。そんな作品なのだ。喫煙者にとってはタバコで一服するのが至福の時間であったりするが、タバコを吸わない人も、もちろん吸う人も。この物語で一服、いかがでしょうか。

会社員 / 杉佳尚

- 読者の感情を上にと揺さぶってくるエントリー作品が多い中、さえない中年サラリーマンと若き 24 時間スーパーのレジ係という、大事件が起きるでもなく悲喜劇があるでもない市井の人を描いており、若干のファンタジー（おっさんに優しい若くて綺麗な女子は存在しない）要素を交えつつも展開される会話が心地よく、喫煙者の形見の狭さも伝わってくる世相も含めて気持ちの良い読後感がある作品でした。（喫煙者）

住職・ライター / 蟬丸 P

- タバコ吸いませんが喫煙所に行きたくなる漫画です。

ブックエース上荒川店コミック担当 / 倉本かおり

- 主役の入れ替わりに気づかないなんてありえねえ！と突っ込みつつ、力技で読まされてしまう。それ程ひたすらに主人公の二人が可愛い。その代わりハッピーエンドしか絶対許さねえぞ！と吠えておきたい。

コミティア実行委員会会長 / 中村公彦

- 若い娘とおじさんのほっこりラブコメということになるのでしょうか。その「ほっこり」加減がひたすら丁寧にそして心地よく描かれていてなんとも言えない暖かい気持ちになります。こんな二人の関係、ファンタジーって一笑

に付される方もいるかもしれませんがね。でもそれでいいんです。事実は小説より奇なり漫画より滑稽なりと昔から申しますので。私自身はヤニは食わないんですが、ヤニだけにニヤニヤしちゃいますね。冗談はさておき、素敵な漫画を読んだときにだけ無意識で漏れてしまう笑いがこの作品にも間違いなくありました。「そうくるの?」「すげえ!」「楽しい!!」って感じのやつです。これをもって心からの賛辞とさせていただきます。

めがねっ娘教団 大司教 / 田中海渡

- なぜ気づかない!? は置いておいて、読むととにかくニヤニヤが止まらない。オジサン（オジサンじゃなくても）には究極の癒しのマンガ。それにしてもこの設定はうまいなあというかずるいなあ

あゆみ BOOKS 仙台一番町店 店長 / 土屋修一

- 喫煙者が肩身が狭すぎるこの時代に、真正面から「喫煙所」のあの、なんとも言えない親密さと楽しさと後ろめたさと、いろんなものがないまぜになった時間と空間を描いてくれたことにまず拍手を送りたいです。もう喫煙者じゃなくなってずいぶん経っちゃったけど、そうそうそう！ ねえ！となつかしくてたまらない。喫煙所にさすがにあんなイケオジはいなかった気がするけど、それでも、ああ愉快的な時間だったんだよなあとそんなことを思い出したりもしました。

一般社団法人マリーゴールド / 島影真奈美

- スーパーで働く田山さんと、そのスーパーに通う佐々木さんのお話。スーパーの裏の喫煙所で出会った2人が少しずつ打ち解ける様、掛け合いが尊くてすきです…。何より佐々木さんが鈍感すぎることで、感情のうつろいが乏しい（ように見える）田山さんが、感情的になるところが素敵ですね。テンションあがりますね。ヤニ吸わないけどスーパーの裏行きたくなっちゃいますね。捕まりますね。佐々木さん田山さん、どちらもかわええのでぜひ読んで癒やされてください… ホワァ。

デザイナー/シンガーソングライター / 平松新

- こんなスーパーあったら裏でヤニ吸いたいです。多分毎日行く。なんて、少し非日常的な感じがいいですね。懐かしいような、疲れた時に読みたい！

デザイナー / 平沼寛史

- このコメントを書くにあたり、喫煙所で会話してるだけなのになんでこんなに面白いんだろうと真剣に考えてみたんですが、多分リアルな喫煙所には男性ばかりで偶然の女性との出会いなんて無いからなんじゃないかという結論に至りました。これは日常を描いた作品に見えるファンタジーなんじゃないかと。

会社員 / 林礼春

マンガ大賞2023 ノミネート作品

ビッグコミックスベリオール / 小学館

「劇光仮面」山口貴由

選考員コメント・1次選考

- 戦後史、特撮史がボクらの時代と交錯する。まだまだ本当の企みはこれからなのだろう。

ときどきライター / 縣丈弘

- 趣味に真剣に向き合った果ての神秘体験。自分もそれがあったから今でもマンガを読んでいるのかもしれないです。

マンガ研究 / ライター / 会田洋

- 冒頭から、映画「タクシードライバー」じみた鬱屈さと鋭利さを突き付ける現代ドラマが始まり、「な、なにこの新境地!？」と度肝を抜かれるんですが、そこから山口貴由先生でしかありえない異様な物語世界へと引きずり込まれていく凄まじさ……！ ここにあるのは単に虚構と現実が入り混じるといった話ではなく、太平洋戦争とヒーローという山口貴由先生の2大オブセッションが（円谷特撮というガジェットを介して）現代に直結するという魔術的な回路です。

会社員 / 末永龍介

- 予想を絶するテーマと掘り下げっぷりに驚き、今もまだ驚いたまま気持ちの整理がつかない状態なのに、続きが楽しみでたまらない。

PENICILLIN / HAKUEI

- 全人類待望の山口貴由先生の新作は、まさかの現代劇。しかも、特撮（しかも黎明期の昭和特撮）に魅入られた、重篤な特撮ファンたちの姿を描く特濃のオタク賛歌。「特撮」が、人々の夢と想像力、創意工夫の結晶であるという部分に徹底的にフォーカスして、映像技術も何もかもが発達した現代において、そこに何を感じるべきかと問いかける作品に思えます。特撮愛以外になにも持てなかつたいびつな主人公が、どんな物語を紡いでいくのか、2巻ラストでの衝撃的すぎる展開からどうお話が転がっていくのか、気になりすぎる作品です。

株式会社アニメイト / 岡部 真矢

- 作品としてはおそらくまだ導入部。でも目指す先は眩暈がするほど高みであるに違いなく、これからすごい景色を見せてもらえるに違いないという期待感しかない。

医師 / 岸本 倫太郎

- セリフ、ネーム、絵の端々から山口貴由の魂を感じる。

往来堂書店 / 往来堂書店・三木雄太

- 作者は「シグルイ」の山口貴由先生。舞台は現代、そしてテーマは「特撮」。この漫画を読んだ感想なんですが「ハッキリ言ってまだよく分からない」です。ただ「シグルイ」で感じた圧倒的なパワー。この漫画を読むと先生の画力だけでそれが伝わってきます。説明してくれ！と言われても、読んでくれ！としか僕には言えませんが（笑）そんなところの漫画家では絶対に出せないエネルギーがある漫画であることは間違いありません！受け流せません。

吉本興業 / ムーディ勝山

選考員コメント・2次選考

- こんなところにこんなロマンがあるなんて、と、目から鱗が落ちました。信じられない熱量で理屈や違和感などをねじ伏せてくる作品だと思います。

PENICILLIN / HAKUEI

- こんな特撮漫画がこの世に誕生するなんて…天才過ぎて息を飲みました。

OKAMOTO'S(SMA) / オカモトショウ

- 本作は日本の特撮文化を踏まえたヒーローものだ。いやきっとヒーローものになるのだろう、それもダークヒーローものに。このような表現になってしまうのは、既刊2巻分を費やしてまだ何もはじまっていないからだ。何もはじまっていないが、主人公をとりまく状況が次第に明らかになっていく。主人公が背負う業が明かされ、「ふつうの生活」への退路は次々と断たれていく。背景に流れる空気が徐々に緊張感を高めていくのを感じ、先を読まずにはいられない。そして本作は特撮文化を踏まえているが、物語に所与のものとしてヒーローや敵対する悪の組織が登場する世界観の作品ではない。あくまで現実からみたフィクションとしての特撮、現実と地続きのかたちで特撮文化を語りつつ物語を動かしていく希有な作品だ。加えて、現実と特撮とを地続きでつなぐカギとなるのが、作者の山口氏がこれまでの作品で読者に見せてくれた、人間のリアルな身体性の追究。鍛えてはいるがあくまでただの人間であり、現実世界のルールの下に生きる主人公が、果たしてこの先どのような姿を見せてくれるのか、とても楽しみだ。現実世界のダークヒーローが向かう先に都合のいい幸せは決して待っていないことをわれわれはすでに多くの作品で経験しているが、その終着点までしっかり見届けたい。

会社員 / やのこうじ

- 特撮って凄いんだな、というのと、なんだか良く分からないけどもう目が離せなくて、興奮している自分に驚いています。是非この分野に興味無い方にも読んで欲しい作品です。

うすいまりこ鍼灸院 / 碓氷麻里子

- 特撮愛によって描かれた作品は過去にもいくつかありましたが、本作は、特撮を「ヒーローを作る理由」「超常の存在を実物として作ること」「いかにして超常の存在を超常の存在に見えるように作るか」といった課題に、映像技術が発達する以前に挑んだ先人たちの知恵と祈りの結晶である、と描いていることに、既存の特撮をモチーフとしたマンガとは異なる切り口を見せています。山口先生はこれまでも多くの「超人」たちを描いてきましたが、一般人が「超人」に焦られる心や行動の美しさや危うさを描いた新境地に見えます。

株式会社アニメイト / 岡部 真矢

- 真剣に妥協なく趣味の世界に打ち込んだ者だからこそ、直面して向き合わざるをえない精神性、そこでのかけがえのない神秘体験の素晴らしさ。

マンガ研究 / ライター / 会田洋

- これからの展開への期待値の高さが抜きん出ている作品。この体験に今、参加しておくべき。

医師 / 岸本倫太郎

- 大学卒業後もアルバイトで日々の糧をえる主人公。そんな日常の中で大学のサークル時代の友人の訃報が舞い込んだ。その葬儀に際してかつての仲間が集まり物語がはじまる。そのサークルとは特美研、特撮美術研究所。というところまで聞けば、それほど違和感なく作品世界に入っていきそうなものですが、随所にというか全編に違和感か漂わない怪作が生まれてしまいました。歴史でもSFでもなく現代劇であるにもかかわらず、どこまでがリアルでどこからがファンタジーなのか、その境目が侵されていく。やばい漫画が生まれてしまった。

教員 / 戸田穠

- 1次選考と今でも随分連載の雰囲気はまた変わってきている。最近の展開が孕む、特撮に魅入られた(取り憑かれた?)人間の危うさにますます目が離せない。

往来堂書店 / 三木雄太

- 「ヒーロー」という素材をここまで深掘りしてしまう山口先生は流石としか言いようがありません。「戦隊モノ」とかそれ系のジャンルが好きな大人を子供染みていると感じている方々にこそ読んで頂きたい、とも思いましたが、むしろそういう視線を送られてヤキモキしたことがある人が読んだほうが良いと思ひ直しました。そのヤキモキの大体を言語化してくれている漫画だと思います。そしてなによりカッコいいです。

バーテンダー / 村井真也

- 特撮といえば、ヒーローや怪人が戦うテレビ番組…というイメージしかありませんでした。よく考えれば、なぜ特撮が戦後に生まれたのか。なぜ今も日本人の心をつかんでさなさないのか。不思議に思えてくるジャンルです。ゴジラと原爆の関係くらいはうっすら知っていたものの、本作を読むと、「特撮」が戦後に出てきたのは必然だったと思えなくなります。山口先生が、唯一無二の作家であることがあらためて実感できます。

ブログ「マンガ食堂」管理人 / 梅本ゆうこ

- かつて『覚悟のススメ』に圧倒された。だんだんと人間らしさを伴っていく主人公に、女体化しカオス化する兄に、時に置いてけぼりを喰らうほど世界は広大だった。『劇光仮面』は現代劇でありながら特撮美術研究会の本気に、主人公・実相寺二矢のストイックさに、これまた連れていかれてしまう。戦中戦後のことなど結局わからない。でも特撮に想像力と実体験を重ねることで、引力に導かれるようにその時代を追体験していく男たちがここにはいる。そして読み手はこの作品の熱さに吸い寄せられていく。青い炎みたいな怖い熱さだ。

October Beast 代表 / デザイナー / 北山友之

- フィクションのヒーローに憧れるということは、ヒーローになることと同義でなければならない。もしテレビを消して、あるいはマンガのページを閉じて、それで忘れてしまうというなら、それはあなたにとってヒーローではなかった。ヒーローに救われるということは、ヒーローとしてだれかを救うことによってはじめて成就するのだから。もちろん、それを狂気だと言うひとはいるのですが、そうであるならヒーローによる救済そのものが狂気の産物なのです。

会社員 / 末永龍介

- 2巻までは「まだ何も始まっていない」というか、ここからが本格的なスタートだと思うが、それなのにずっとヒリヒリさせられてしまう。今後やって来るであろう恐ろしい何かへの不安（と期待）で既に震えがきています。

ライター / 門倉紫麻

- 今までになかったようなテーマの描き出しかたに驚きました。特撮愛にあふれた作品ですが、それだけではなくそこに現実の社会での活躍（ファンタジーではなく）を入れ込むことによって見たことのない初めての感覚に襲われながら読んでいます。とてもいい意味で、読む前の想像と全然違った、最高です。

MIGIMIMI SLEEP TIGHT / 涼平

- 「特撮」を軸に描かれるオルタナート・ヒストリーと青春の燦り。作者の新たな代表作となる気配を感じます。

ときどきライター / 縣丈弘

「タコピーの原罪」タイザン5

選考員コメント・1次選考

■ いわゆる毒親や機能不全家庭は、ここ数年のマンガやアニメにおいて、キャラクターの動機づけや読者の情動刺激剤として大いに活用されてきたように見えますが、本作はそのひとつの到達点といえるのかも知れません。タコピーとヒロインの噛み合わない会話になぜこれほど心が揺さぶられるのかということ、それが「家族って素晴らしい」といった紋切り型の言葉と、機能不全家庭に育ったひととのあいだにある、絶望的な断絶を象徴しているように思えるからではないでしょうか。『ドラえもん』のび太は、少なくとも愛ある家庭に育ったように見え、だからこそ「好きな女の子と結ばれる」ことをゴールとして物語が展開されます。では、そうした「あたりまえの家庭」を持たなかった子供にとっては、何がゴールに、あるいは救いになるのか。現代のエンターテインメントには、そこへの答えが求められているように思います。

会社員 / 末永龍介

■ これは女の子が「ハッピーになる」話だ。ハッピーに「してあげる」ではない。「幸せに」なる話でもない。早々にショッキングなシーンがあり、その後も衝撃的な、あるいは辛いシーンがあるから、途中で本を閉じる人はいるだろう。怒る人もいるかもしれない。でも、そんな人こそ読んで欲しい。彼女たちとおはなしするために。

八重洲ブックセンター宇都宮バセオ店 / 山本さとみ

■ コンパクトに駆け抜けた作品。SNS での話題のなり方も狙ったのではないかと思わせる。結末がある程度想像されやすい作品でしっかり描き切った。

MIGIMIMI SLEEP TIGHT / 涼平

■ 現代社会の地獄を読み上げたかのような、人生の辛苦を煮詰めたような漫画です。毒親や不倫浮気などなど、色んな社会問題がふくめられており、そこで振り回される子供たちのちょっと SF おりませた物語で、極めて心が重くなります。雪崩れ式に絶望的な流れが押し寄せてきて、かつ、ちょっと救われたかと思いきや、より突き落とされるという衝撃的な絶望が止め度なく押し寄せてくる漫画でした。でもタコピーはかわいい。

会社員 / 佐藤優

■ 人間独特の残酷さや罪深さをタコピーを通してまざまざと見せつけられた感じです。こういうことを理屈ではわかっているんだけど見て見ぬ振りというか、見たくないから見ないようにして生きてきたのかなと考えさせられました。

PENICILLIN / HAKUEI

■ 才能はメジャーなテーマで王道路線のど真ん中から輝かしく現われることもあれば、多くの人は扱うことを避ける周縁のテーマから陰を漂わせつつ現われることもある。本作はまさにその後者から現われた。読む者の心にダメージを与えるネガティブなテーマを、『ドラえもん』を彷彿とさせる枠組みを背景に、これだけの読者を惹きつけるストーリーとして組み上げた作者の力量はハンパじゃない。

会社員 / やのこうじ

■ たこさんウイナー型宇宙人「タコピー」と小学生の友人たち、というと明るいマンガのようですが。。。たった上下巻2冊で、子どもをめぐる社会が抱える様々な課題が、強く、心をえぐるように描かれています。いじめ、児童虐待、家庭内暴力、ネグレクト、離婚、不倫…。その果てに、「ありがとうタコピー 殺してくれて」なんて笑顔で言わせる展開にゾッとします。しかし同時に、このような状況に置かれている子どもたちが今も現在進行形で苦しんでいることが思い起こされます。

弁護士 / 三葛 敦志

■ 各々の家庭問題、児童心理について真っすぐに向き合いつつ、SF で切り込んでくるという異色作。自分が正しい、良かれと思って取っている行動が、他人にとっては正しくない、不幸なことになるという、世の中のあるあるな仕組みをこれでもかと描写してきます。凄まじいスピード感で物語が展開されるので、全2巻という内容が丁度良いなと思いました。ダラダラ続ける内容ではないなと。

会社員 / 三浦佑樹

- 久々に短い時間で一気に読んだ作品でした。1話目の衝撃、後半の伏線回収までの流れ、結末、全て素晴らしかったです。youtubeのジャンプチャンネルにて「初夏の縁側〜タコピーといっしょ〜」が公開されているのですが、本編読了後にその動画を見ると「おおお…」となりますよ。内容が重苦しい話なので読んでいて辛い部分がありましたが、読み終わって単行本の表紙を見るとなお深い余韻に浸れるかと思います。

会社員 / ターシ

選考員コメント・2次選考

- 目を覆いたくなるような人間の醜さに共感してしまったのか、ページをめくる手が止まらなかった。

PENICILLIN / HAKUEI

- どうして下巻の表紙があんな娘なのか？読了後、本を閉じて余韻に浸ろうとした状態で表紙を見た時の感動、その二段重ねが素晴らしいです。大切な人を幸せにする為にタイムリープを繰り返す系の物語は好きなのですが、内容はかなり重苦しいものであり、正直何度も読み返すタイプの漫画ではないかなと思いました。ただ、ふとした瞬間に登場人物達の事を思い出し、また彼等に会いたくなる、そんな漫画でした。

会社員 / ターシ

- 連載当時、Twitter でみんなの考察読みながら祭りのように盛り上がった良い思い出。とにかくパワーがありました。そしてタコピーというキャラクターの発明が素晴らしい。

金海堂イオン隼人国分店コミック担当 / 園田美智子

- タコピーのかわいらしい見た目とは裏腹に描かれてることは辛くて、ガラスのように心に刺さって抜けなくて痛い、そんな読後感でした。何はともあれタコピーはかわいいっぴよ！ありがとう。

主婦 / 紺野泉

- 近年読んだ漫画で1番衝撃度強かったな〜と。ファンシーな絵柄でかかれてるのEGすぎひん？話への引き込み方が物凄く上手い。最終話まで連載待ちつづけてました。読んでほしいのでネタバレはかけないけども、最終的に人間に必要なのは魔法の力でもなんでもなくてのも絶望の中に残った唯一の希望であってよかった。

鳥取県高等学校教諭 / 佐川由加理

- 2022 年も初めの方に完結したにも関わらず、この後味の悪い余韻は今なお健在です。鬱エンドなのか、微鬱エンドなのかは際どいところですが、こういった終わり方こそが今どきのリアリティなの、、、かなあ。いじめ、貧困、毒親などなど、子供達に降りかかる様々な不幸を、タコピーという SF 要素によってより熟成させた、地獄を読み上げたかのような漫画です。時折、ちょっと救われたかと思いきや、より深い（もしくは不快な）絶望に突き落とされるという、ある種あたらしいホラー漫画です。でも、しかし、それでもやはり、タコピーはかわいい。すごくかわいい。

会社員 / 佐藤優

- SF かつ社会派マンガとでも言えるのでしょうか。たこさんウイナー型宇宙人「タコピー」は、不思議な力を持つ道具を持っています。が、どれもクセのある道具で。過酷な状況に置かれて現在進行形で苦しんでいる子どもたちの、声にならない叫び（声をあげていいかもわからない悲鳴）が詰め込まれています。いじめ、ネグレクト、児童虐待、家庭内暴力等々。マンガというツールで、現実のその声に気づく人が少しでも現れますように。

弁護士 / 三葛敦志

- 社会に対する批判的な視点を持ちながら、いじめや虐待など社会的な問題をテーマにした作品。重いテーマと裏腹にキャラクターたちは独特な個性や表情を持っており、テーマとのコントラストが印象的で、かえって不気味さをかきたてる。描写は細かく、感情表現もストレートでリアリティがあるため、読者はタコピーと共に問題に直面し、考えさせられる。しかし、もがいてももがいても解決には向かわず、裏目に出る。そこに救いはあるのか。是非最後まで見届けてほしい一冊。

弁護士 / 三村 量一

- 改めて読むと、思っていた以上に「おはなし」が重要ワードだと感じる。眉をひそめて途中で放棄せず、最後まで読んで欲しい。

八重洲ブックセンター宇都宮パセオ店 / 山本さとみ

- 作者はすごくリアリストだと思う。人生をやり直したい、現状を変えたいと思っても、そう簡単には変わらない。変えられない親・環境・時代の中で、それでも生きていくしかない。どうしようもない現実を徹底的に繰り返す。退路はないと、嫌になるほど身に沁みさせることで、無理にでも前を向いて歩かせる。残酷で厳しいけれど、優しい漫画だと思います。

丸善ジュンク堂書店 営業本部 / 小磯洋

- 孤独な子どもたちとハッピーを提供する異星人の話。純度 100% の善意が悪を生み出しバッドエンドになるので何回もやり直しをするのだけどうまく行かない。おとなの犠牲になり辛い思いをすることも見るのは辛いんだけど、どう結末を迎えるのか気になって最後まで一気に読んでしまった。最後まで読んだら、もう一度最初から読みたくなる。

主婦 / 赤坂真実

- 2022 年の事件だった単行本。候補作をリストアップしている最中に、これが 2022 年の作だったことにショックを受けた。「そーいやタコピー今年だったわ」という「思い出し方」をしたことにショックを受けた。こういう内容の物語、つまり DV や虐待が仄めかされるような物語が、「少年」を冠する媒体で掲載され、万人とは言わないまでも、多くの人びとに受け入れられ、これまでとは比べ物にならない速度で消費されつくして、そして、俺がそうだったように忘却されてしまうのだ、ということが、決定的に明らかになってしまったことがショックだったのだと思う。ということ記録／記憶しておくために票を投じておく。

ソフトウェアエンジニア / 第弐齋藤

- 読んでただただ悲しくなりました。逆説的な表現方法の極？。いろんな意味で世の中に警鐘を鳴らす作品だと思います。

本と文具ツモリ 西部店 / 津守晋祐

- 世相を反映してか不穏な作品が多い中でも一番不穏。

公務員 / 東くるみ

- その年を代表するマンガというものがなんとなくあって、たとえば 2021 年では『ルックバック』だったなあと思うのですが、2022 年なら間違いなく本作でした。壊れた家庭から生まれる願いは叶えようとするほど周囲を壊してしまう、そういう機能不全家庭の問題に直結する鬱展開まっしぐらな物語のベクトルが、後半のある人物のお兄ちゃんをきっかけに変わるところ、そしてラストに見出そうとする苦し紛れじみた希望に、ただの“毒親”語りではない、ひどい現実を突破できるフィクションの力を感じました。夢も魔法も信じない、そんなものに救ってもらえると期待できるほど恵まれていない、そんなあなたをなお救おうとして読者の心に爪を立てるのがフィクションの強さであり、2022 年にその爪にもっとも深い傷をつけられたのが本作でした。

会社員 / 末永龍介

マンガ大賞2023 ノミネート作品

ヤングエース UP/KADOKAWA

「光が死んだ夏」モクモクれん

選考員コメント・1次選考

- まず表紙の印象が強くて良かった。綺麗な青色と表情の良いキャラクター。中の絵もとても良い。田舎の描写がうまい。BLっぽいのかな…？と手に取ったけど、まさかホラーだとは。(もちろん少しBL風味はありますが)いろいろとインパクトの強い作品です。続きが楽しみ！

bar 図書室店主 / 岡部愛

- 日本文学のような、耽美な、ミステリーな、謎めいた、まさに新味の作品。マンガの「表現」というのはこれまでいくつも生み出されてきた。福本先生のざわ…、荒木先生のゴゴゴ…など。今作にも独特の表現がある。音の表現。蝉の音などが特徴的だが、日本文学を読んでいるかのような味わいの、「描きこまれた擬音」がある。これがまたいい味を出している。光という存在は無邪気で、くすっと笑うところもあるのだがやっぱり怖い、怖さを内包している。同時に耽美さも持ち合わせている。初めての感覚。そんな「体験」がここにある。そんなミステリーである。ストーリーもこれからどんどんどうなるかよめず、楽しみでしかない。

クラスター株式会社 広報 / 西尾美里

- 主人公のとても身近な人物が明らかにおかしい、本人のようではどう考えても本人ではない…、という古典的な物語の枠組みを導入に、いきなりその相手から「本人ではない」というカミングアウト。しかしこれは本人でもある……謎と矛盾をはらんで緊張感を拭いきれない存在と、時にバディとして、また時に対立するかたちで怪異譚を駆け抜けていきそうな作品。このあとの展開が楽しみです。

会社員 / やのこうじ

- 良い意味で気持ち悪い!!! 人外となった親友の謎の答え合わせをしないまま話がどんどん進み、その歪な関係が気持ち悪くて不思議な気持ちになりました。背景の擬音語もとても効果的で、ここまで蝉の鳴き声を不気味に表現することが出来るのかと驚きました。

TEAM SHACHI / 秋本帆華

- 始まりから展開に引き込まれてしまいました。コマの中にちりばめられた言葉による演出が不気味さを倍増させて本当に怖い。ひらがなの「く」の下りは最近見た演出の中で一番好きです。

フリーランス / 玉澤綾子

- ずっと一緒に育ってきた幼馴染…が、別の「何か」と入れ替わっているお話。田舎の学生、夏真っ盛り、学校帰りに駄菓子屋でドロっと溶けかけたアイスを食べる…ベタベタに普通の情景からの急展開。ホラーなの？ SFなの？ まだまだわからないからこそ次の巻が待ち遠しい。幼馴染と入れ替わった何かは主人公に好意を持ってるとその感情が絶対人間とは違う異質な感じでゾワゾワするのと、さらに主人公が置かれてる環境が全部を放り投げて逃げ出したくなるような鬱々とした田舎の人間関係で、フラッと闇に吸い込まれそうな雰囲気作品的にいいスパイスです。

元書店員 / 内野智未

- 少年、夏、制服、と一見爽やかそうですが、蠢く何か主人公へ友人の姿で語り、笑いかけながら、じわじわと侵食してくる……間違いなく今年1番のホラー作品です。

会社員 / 竹本 慧

- 開始早々の急展開のインパクトが凄い。

教師 / 持丸宏司

- 古い因習が軸なのに新感覚のホラー。BL味もあってそれも今までにない感じで虚を突かれました。

菓子研究家 / 福田里香

- 作品全体に響く不穏な空気と、少年たちの純粋さ。まぎれもなくホラーでありつつ、まぎれもなく BL でもある、という他にない不思議な作品。方言が魅力的なセリフや、コマに描かれる夏の田舎の風景の効果音など、やけに「耳」に残る漫画でもあります。

ブログ「マンガ食堂」管理人 / 梅本ゆうこ

- 登場人物のやり取りがとてもリアリティーがあって感情移入しやすくて世界に引き込まれます。ストーリーや設定のリアルとファンタジーの混ざり方がとても自然で境界線が曖昧なところが怖くて面白い。

PENICILLIN / HAKUEI

- 狂おしいほどの「夏感」があります。中毒度の高い、続きが待ち遠しくなる漫画です。果たしてどんな結末を迎えるのか…。今から楽しみにしています。余談ですが、光の中がサイケデリックに描かれているあたり、ツボです。

音楽家 閃き堂店主 / 谷澤智文

選考員コメント・2次選考

- 読んでいて時々無性にブルッとなりました。ファンタジーとリアルな混ざり方がすごく自然だからだと思います。まだまだ恐ろしい何か潜んでそうなのでこの先が楽しみです。

PENICILLIN / HAKUEI

- なんでもない田舎の町。いつからかそこに“不穏”がずっと居る、そんな作品。この“不穏”の描き方が秀逸で、付かず離れずの距離でとにかくずっとうっすら怖いんです。その“不穏”が段々と距離を詰めてくる感じがゾッとさせてくれますね。個人的には一巻で、森を抜ける時の森の中の不穏な描写が超絶最高でした。

吉本興業 / ムーディ勝山

- 田舎の村で孤独を感じるよしきと、ただ一人の親友・光……によく似た「何か」の友情のような共依存のようなびつな絆と、「何か」が村に巻き起こす禍々しい出来事を描いたマンガです。「光」が「よく似た何か」であることはお互いに前提となっていて、それでもなお、お互いの存在を必要として、友達関係のエミュレートを続けているという歪みや、人にとって良くない「何か」である「光」と関わり続けることで、少しずつ「そちら側」に近づいて行ってしまうよしきの危うさに、目が釘付けになります。取り返しがつかないことになると分かっている、それでも独りになりたくない / させたくないから、一緒にいることを止められない。よしきと「光」の幼気で切実だけれどおぞましい関係性の果てがどうなるのか、見届けなければ、という気持ちにさせるマンガです。

株式会社アニメイト / 岡部 真矢

- 一巻のインパクトがダントツでした。表紙の鮮やかで爽やかな印象をいい具合に裏切ってくれる内容が堪らなかった。絵もとても良い。表紙で感じたBLの空気も、あからさまでなくBLが苦手な方でも入り込めるのではないのでしょうか。最後までこの感じで描ききられることを祈ってます！

bar 図書室店主 / 岡部愛

- ある日突然、日常が非日常になる。不穏な空気が流れだす。恐ろしいことが起こり始めているのに、なにも変わらない町。静かなホラー、好きです。

八重洲ブックセンター宇都宮パセオ店 / 山本さとみ

- キャラクターや背景がとにかくリアルで綺麗で、それがかえって異質な生命体を際立たせている。光の表情も無邪気で豊かだったり、平和な毎日のようで違和感が画面から伝わり、何かがつきまとっている感じが、ザワザワさせられて、知らず知らずと怖いもの見たさのように作品に引きずり込まれていく。

コミック担当 / 実松由夏

- 読むものをぐいぐい作品世界に引き込む描写力！

ロングランプランニング / 小森和博

- この新しいホラーを見てほしい。ホラーというジャンルには「怖さ」が重要で、ホラーコメディなどはあったけれど、基本的にバリエーションは少ないと思っていた。映画では最近ファッション×ホラー×音楽、という新感覚で「ラストナイトインソーホー」に衝撃を受けたが、それと同じようにこの作品にも衝撃があった。まず、BLかのようなエロさ、エロみがある。それも、いわゆるドロドロしたかんじというより、むしろさわやかな青春のエロみだ。そして、同時に表現の独特さ。明朝体で描かれた擬音、これがなんだか「日本の夏」を思わせる。まさにタイトルの「夏」を感じさせてくる。そして奇妙な存在のミステリアスさ。得体のしれない存在だが愛すべきところもある、まさに絶妙な「怪異」が日常に入り込んでくる。私はこの漫画をいろいろな人にすでに勧めたが、ぜひたくさんの人に読んでもらって感想を聞きたい。考察したい。

クラスター株式会社 広報 / 西尾美里

- 地方集落における人外怪異譚は古今に名作が多いが、主人公の関係性にBL要素を入れた切り口が新鮮。「好き」という感情とは何なのか？を性別や種別を超えて突き詰める視点は斬新だ。傑作になる予感がする。

コミティア実行委員会会長 / 中村公彦

- 最初の4ページ、5ページ、6ページと読み進めたところで心を持っていかれました。陰影、光の描き方、日本の田舎の夏の空気の描き方、書き文字の効果的な使い方が見事。続きを楽しみに待っています。

会社員 / 津田圭

- 最初にタイトルを見たとき、主人公が友人の死を精神的に乗り越える過程を描いたような作品かな？と勝手に想像していたのですが、全く違いました。開けてびっくり。自分の大切な人の姿をした得体のしれないものがすぐそばにいる恐ろしさ。まだ正体が全くわからない分、続きがとても気になります。

会社員 / 林礼春

マンガ大賞 1次選考作品

全作品名・選考員コメント掲載

「あかり」小日向まるこ

- 『良いマンガ』の基準はそれぞれ違うと思いますが、この作品は読んだ人の多くが「ああ、良いマンガを読んだ」という感想を持つのではないのでしょうか。小日向まるこさんの絵の、人になにかを伝える力の強さよ。作中に使われている言葉もていねいに選ばれている美しさを感じますが、もしかしたらセリフが無くて絵だけでお話が伝わるのではと思えるくらい、絵がすごい。カバーを広げた一枚絵も、このまま飾りたいくらい好きです。

伊吉書院 類家店 / 中村深雪

「あことバンビ」HERO

- 新人作家「小鹿かのこ」の自宅に突然、女子高生の幽霊「アコ」が現れる。生きていた時の記憶がなく、行くあてがないという幽霊との不思議な共同生活が始まった。そんなある日、小鹿にこんなファンレターが届く。「そちらに亜子がお邪魔していませんか？」考えたこともなかった発想と不思議な感覚。2人が可愛くて愛おしいのだけど、危うい関係に複雑な気持ちになる。ホラーではないです。(私はホラー苦手)完結していて、ニコニコ漫画などのアプリやwebで全話読めますし、縦読みなのでブラウザの方が読みやすいかなと思いますが、最初から最後まで素晴らしかったので、単行本もほしくなると思います。そして単行本には描き下ろしが載っています！読み出したら先が気になって止まらない。アコは何者なのか、どんな結末を迎えるのか、ぜひ読んで確かめてみてください。

声優 / 富岡美沙子

「あした死ぬには、」雁須磨子

- 堂々完結。ずっと主人公を応援しながら読んできて、最後のページの顔を見て「本当によかったなあ」と思った。ここまでよい時間を過ごしてきたんだね、さわこ、と思ったし、私も…きっとほかの読者のみなさまもここまで過ごしてきた自分と、自分の変化に思いを馳せてしまうんじゃないかなと思った。これまでも十分凄い作家だと思っていたが、円熟味がましたというかまだまだ凄いことをするのか…！（これからもきっと）という驚きもあった。歴代雁作品の中でナンバーワンの名作だと思う。

ライター / 門倉紫麻

- 全4巻完結であります。ラスト感動しました。感想がいきなり感動しましたっていうのもずいぶんあれですが、雁先生のコマの運びのリズムは終始心地よく、なにげないように最後まで流れていくんですが、ことさらにドラマティックな演出とういのもないんですが、とても素敵なラストでした。映画宣伝会社に勤務する42歳の本奈さん。若かりし頃からの自分の好きと可能性を追求し、趣味を仕事にしてがんばってきた感じです。が、そろそろ人生の折り返し地点に差し掛かろうというところ。わたしもそろそろアラフィフなので、10代の部活動とか恋愛とかケンカには身が持たない今日この頃、40代を主人公にしたこんなマンガが読めるのも人生の褒めかなと思いました。

教員 / 戸田穂

「味のプロレス オールスター編」アカツキ

- 毎回毎回、よくこんなにエピソードがあるなと驚きながら読んでいるプロレス4コマです。天龍源一郎さんや長州力さんをただの面白いおじさんと思っている世間の人たちに読んで知ってもらいたい。面白いけど、それ以上にスゴイ人たちなんだよ、と。

Books アイ蒲生エキナカ店 / 野口忠義

「明日の敵と今日の握手を」フクダイクミ、カルロ・ゼン

- 外交現場ってこんなに面白いんだなあ。貴族オブ貴族な主人公(?)の、ナチュラルにぶっ飛んだ立ち振舞いに振り回されるのがたまらない。

往来堂書店 / 往来堂書店・三木雄太

「あそこではたらくムスブさん」モリタイシ

■ 湘南ゴム工業株式会社の営業として働く砂上吾郎と、吾郎が想いを寄せる総合開発部のムスブさんとの恋愛模様を描く。ヒロインのムスブさんの研究対象が避妊具であるという他作にはあまり見られない設定が最初は目を引くかもしれないが、中身は真っ直ぐに仕事に向き合う姿やプラトニックな恋愛模様を描いており対比が面白い。セリフのない視線や表情等だけの表現にもきちんとコマを割り、登場人物がしっかりと演技している点はさすが。毎話引きが上手く、概ね1か月に1話のペースで連載されていることも相俟って、ほんの少しずつ進む2人の恋愛模様には読者も毎回やきもきさせられ、ムスブさんの可愛さをこれでもかと思ひ知らされる。いつも次話が楽しみな作品である。

弁護士 / 三村 量一

「与えられたスキルを使って稼いで異世界美女達とイチャイチャしたい」阿見阿弥、レンキしゅん

■ すべてのおっぱい好きとわかちあいたい。いや、わかちあえるはず！デドアラビーチバレーで言うところ、高性能なやわらかエンジンが実装された、美乳もとい、媚乳ハーレム漫画！

COMIC ZIN 商業誌担当 / 塚本浩司

「新しいきみへ」三都慎司

■ 新型コロナウイルス禍に突入して以降、疫病系のマンガはたくさん登場したが、この「新しいきみへ」は世界の終わり系パンデミックアクションの形をとりながら、主人公が記憶を引き継ぎつつ再生を繰り返し、再スタートするタイムリープ要素をぶっ込んだ。リアルな都市（破壊）描写は戦乱や天災など現実社会の動きとも同期していて実に今日的ながら、世界を救う宿命を背負った謎めいて魅力的なJKが冴えない男性教師にからむところはヤンジャンらしい(?)王道的な展開。相手を信じ、協力して、状況を読み、判断し、運命に必死にあらがいつつも、やはりかなしい別れからは逃れがたく……。おのれの無力感に苛まれそうになりながらもまた前を向き、イチからやり直し、今度はもっとうまくやる——というところまでが既刊3巻なのだが、これからマンガ作法としてタイムリープをどう描き、どう回収し、物語をどう進めるのが楽しみ。すでに種はまかれているので。作品名のいわれが明かされる3巻最後のやり取りは切なくもエモい。破綻せずに納得の結末に着地できるのか、固唾を呑んで見守りたい。

日本経済新聞記者 / 天野賢一

「アトランティス会館」朝倉世界一

■ 相変わらず可愛い過ぎる！絵本のように、ちゃんと大人向け。オンボロビルに変な発明品、懐かない犬すら可愛く見えるこの絶妙なゆるふわ感が、息抜きの一冊としても最高です。

元書店員 / 井出 麻悠美

「アフターゴッド」江野朱美

■ 神と人間の関係性が複雑に絡み合う、妖しい世界観が素晴らしい作品です。

会社員 / 竹本 慧

「Artiste」さもえど太郎

■ パリの街や人の空気をリアルに描きながら、さまざまな事情を抱えて生きる人たちが、それぞれの居場所を見つけていく物語。レストランの仲間も大好きですが、主人公の住まうアパルトマンの住人たちもみんなイカして、そのへんで適当に手に入れたワインでも持って、「Ca va ?」と遊びに行きたくなること請け合いです。

Tokyo Otaku Mode / モリサワタケン

■ パリの片隅で、不器用で心優しい青年が、自分の居場所を見つけていく物語です。不器用な主人公は最初なかなかいい関係を作れないのですが、不器用なりにあきらめず人を信じて地道にコミュニケーションを積み上げていくことで、周りの人との良い関係を作っていきます。職場ではレストランの厨房でリーダー的な役割なのですが、そん

な彼の姿勢が曲者揃いのメンバーをすこしずつまとめあげてゆきます。チームが機能してゆく過程は痛快というよりは、どこか穏やかな気持ちにさせてくれます。また、主人公の暮らすアパートに集う個性的な面々との交流もコミカルでとても暖かい。読むと穏やかな気持ちになれます。このマンガを読んだ後いつも思うのです。めんどくさいこともあるけど、人と交わることで素晴らしいなと。人を信じて交流することの大切さを教えてくれるマンガです。人付き合いに疲れてしまった人に。

会社員 / 廣瀬 公将

■ じんわりと暖かく面白い人たち。旅がしたくなります。

ヴァイオリニスト / 佐藤帆乃佳

■ 一般にレストランは、おいしいものをお腹いっぱい食べて、心地よく酔い、友人たちと語らう。そういう場だし、そうあるべきだ。しかしサーブされた料理やワイングラスの向こうには、それぞれ立場の違うたくさんの職業人がいる。その一人ひとりに家族があり、友人がいて、無数の人生がある。このマンガはジルベールという内気なシェフを通して、皿の向こうにどれだけの数のカラフルな人生があるかを想起させてくれる。テーブルの上や厨房で起きていることなどの表層的な部分だけの物語ではない。その皿を客に供するため、誰が何についてどう貢献したのか、その周囲では何が起きて、どんな人間模様が繰り広げられているのか。そんな人の営みが描かれている。私たちに見えているものの向こう側にはどれほどの世界が広がっているのかを示唆し、向こう側に暮らす一人ひとりも、また「私たち」であることを教えてくれる。既刊 8 巻以下続刊。

ライター／編集者（馬場企画） / 松浦達也

■ 主人公もさることながら、キャラクターひとりひとりが凄まじくチャーミングな作品。人間関係ひとつとっても、ひとすじ縄ではいかない。シンプルには片づかない。でも、共存共生する道はあり、違う者同士だからこそ、最高の一皿が生まれたりもする。「多様性」「ダイバーシティ」に興味があってもなくても、ぜひ一読したい作品です

一般社団法人マリーゴールド / 鳥影真奈美

「アンダーニンジャ」花沢健吾

■ 絵もキャラクターもストーリーも全てハイレベルで素直に面白いと思える作品だと思います。

PENICILLIN / HAKUEI

「異郷の爪塗り見習い」まるかわ

■ 異世界モノは数あれど、その中でも惹かれるのは、異世界の世界感や設定の大切さ。一步間違えるとご都合主義になりかねないから。久しぶりにみつけたしっかりした世界観の異世界もの。なぜ爪を塗るのか？という設定をしっかりと組みつつ美しい世界が広がってる。作者の過去作調べたら、好きだった異星人の子を授かった漫画の人。あのときも異世界設定すごいな！と思ったのよね。今作も楽しませていただきます。

鳥取県高等学校教諭 / 佐川由加理

「異世界ありがとう」ジアナズ、荒井小豆

■ 下手にずば抜けた能力を持っていないおっさん 2 人のスタートだからか、駆け出しの冒険感が絶妙です。

教師 / 持丸宏司

「異世界おじさん」殆ど死んでいる

■ おじさんによるおじさんのためのおじさん福祉とでもいうべき内容…ではあるけれども、往年のセガファンの内輪ウケ要素を差し引いても面白い。

マンガ読み / サイトウマサトク

「一級建築士矩子の設計思考」鬼ノ仁

- 一級建築士・一級建築施工管理技士の失格を持つ著者のお仕事まんが。作画は大変丁寧できれいな仕上がりである。諸処に建築の専門知識が紹介されているが、今後の展開で建築士のお仕事の日常に踏み込んでいけるか？イチケイのカラス、ハコヅメのレベルの専門性と娯楽性を期待したい。

弁護士 / 三村 量一

- 建築、って文字で表現するのは本質的には無理だと思う。それが卓越に卓越を極めたマンガ家さんであり、実際の建築士さんの手による画だったらどうなのか…！！ 圧倒的なリアリティとディティール、それを表現出来るマンガガ！ 建築、という文化の凄み・深みを、この作品を通して初めて理解した感がある。その魅力を味あわせてくれたのは、主人公矩子の酒豪とか建築士あるあるとかの目に入りやすい言動もあるんだけど、無意識に魅了されているシルエットの美しさ！！ 楽しんでるだけなのに、なぜいつの間にか建築のことが面白くなっているんだらう！ 知識を伝えてくれるマンガの最上級品！

ニッポン放送アナウンサー / 吉田尚記

- 遂にこれを描いたか！と読む前からそのテーマに震えました。ホンモノの一級建築士でも作者が、まさにプロの目、経験と知識を活かして描いた一級建築士漫画。濃い内容に対して、主人公がキレーなお姉さんなのもまたヨシ！

COMIC ZIN 商業誌担当 / 塚本浩司

「犬とサンドバッグ」尾崎かおり

- 故郷の島に戻った主人公の日子に島の青年チマキが一目惚れする。それぞれにワケありで、ひとは明るくみえても過ちを抱えていたり暗い面ももって生きてる。明るいだけではないお話ですが、一生懸命生きてるふたりの恋愛模様と人生がどうなるのか見守りたい作品です。

主婦 / 紺野 泉

- 映画になりそうな話。ミステリアスな展開ももちろん忍ばせて、恋も始まる。島という環境に現れた謎の美女という設定は確かによくあるかもしれないが、やはり好きだ。そして思ったより生々しい年齢である。26才と21才の恋愛じゃない。そんなの普通にありえる話。でもこの漫画の主人公は34才なのだ。どんなに美しくても、登場人物のJKには「おばさんじゃん」と言われてしまっている存在。そしてしかも不倫をしていた「女性」なのだ。リアルさとファンタジーさとがあわさってどんどん読み進めてしまうのが魅力だ。

クラスター株式会社 広報 / 西尾美里

「犬のかがやき日記」犬のかがやき

- カコとなかよく

1616屋 / 杉本 善徳

「イマジナリー」幾花にいろ

- この作品を読んでいるとずっとにこにこしてしまう。メインの二人は同い年の幼なじみ。恋仲ではないが、全く何もないわけではなく……といった微妙な距離感の二人と、その友人たちとのわちゃわちゃした日々を描いている。その中にタイトル通り空想も織り交ぜられた会話も加わり、ありきたりな日常が描かれているはずなのに読んでいて飽きないのだ。そういえば学生時代の仲のいい友人たちとの会話ってこんなだったかもなあなんて考えたり、男どもの葛藤に心の中で首が取れるほど顔く部分があたり……個人的にはかなりおすすめ作品。登場人物皆魅力的だが、会話が方言で描かれているのも素晴らしい。

会社員 / 杉 佳尚

「イリオス」円城寺真己

- 暴力団の抗争漫画で、ひたすら殺し合いをしているだけなのに、運命に抗う気高き青年が神と戦う神話のような不思議な美しさのある漫画。

丸善ジュンク堂書店 営業本部 / 小磯洋

- 去年始まった連載の中でも何故か気になってしまう一作でした。ギリシャ神話とヤクザものが絡んで、シュールなバイオレンスギャグ漫画と言ったところでしょうか？読み口が今までのどの漫画とも少し違って、くだらなさとも真剣さにクスクス笑いながら読んでしまいました。

OKAMOTO'S(SMA) / オカモトショウ

「ウィッチウォッチ」篠原健太

- 面白くて、可愛い。それに尽きる。最近ギャグマンガ的なものを読んでいなかった。まず目に留まるものが少なかったし、テンション的にもなんだか読めていなかったのかもしれない。しかし、ちょうどいい。このカジュアルさとテンポがやみつきになる。そして、ふと手に取っている。そこが魅力なのである。

クラスター株式会社 広報 / 西尾美里

- こんなに健康的なマンガあるだろうか！！ 明るく楽しく笑えてキャラがかわいくて、毎回鮮やかなオチがあって、現代的なモチーフも全部時代を外しておらず、時折図抜けてクレイジーな回（4巻のニューホライズン回など）が存在する…！ そのなかでも圧倒的にすごいのは、説教臭さがみじんもないこと。 あ！そうか！ この鮮やかな面白さは、藤子・F・不二雄！！ 8頭身キャラが登場する藤子・F的なギャグと言うよりスラップスティックな世界、この後ストーリーがいい意味で進む気配も見えないので、延々続けて欲しい！！

ニッポン放送アナウンサー / 吉田尚記

「うちの弟どもがすみません」オザキアキラ

- 義姉弟モノなんて、もうやり尽くされたネタだろうと思うことなかれです！突然4人の弟ができた主人公は、とにかくしっかした姉でいたい！と張り切りますが、これまで家族を支えてきた長男と、お互いに家族を思う気持ちがぶつかり一悶着。少しずつ2人が打ち解けていく様子に微笑まずにはいられません。そして何といても紛うことなき王道少女漫画ですので、4人の弟達がとにかくかっこいい！かわいい！家族のこと以外には無頓着で不器用なちょっと口の悪い長男、何もかもお見通しで達観している次男、ひきこもり気味だけど素直で真っ直ぐな三男、天真爛漫で兄と姉が大好きな四男。推し弟が見つかること間違いなしです。恋の行方も気になりますが、それぞれの変化や成長も見所。節々で見せる新しい表情がとても魅力的なので、じっくり堪能して欲しいです。

会社員 / 堀尾素子

「うちのちいさな女中さん」長田佳奈

- 女性作家と縁あってやってきた14歳の小さな女中さんが織りなす日常をほっこりとした気分で覗き見る作品。昭和初期の生活、空気感を丁寧に描かれ、体験したことはないのにどこか懐かしい気持ちにさせてくれる。

デザイナー / 高永貞光

「海が走るエンドロール」たらちねジョン

- わたしもうみ子さんのように生きてみたいなと思いながら読んでいます。はじめるのには歳はないと思えます。

ブックエース上荒川店コミック担当 / 倉本かおり

- いくつ歳を重ねても、夢を見続けていいんだと勇気もらった。

会社員 / 八重田幸子

昨年に引き続き推させていただけます。初期は踏み出すワクワク、新しい環境への戸惑いが描かれていましたが、そこから大きく成長してどんどん創作へ意識を向けていく過程に感心してしまいました。最新刊ではついにお互いを撮りあう約束をしましたね。尊。間違いなくその2つの映画こそ二人にとってターニングポイントになり得るはずで、ますます目が離せない。一度漕ぎ出したら止まらない船達の行く末まだまだ見守りたく思います。

フリーランスデザイナー / 金輪英恵

「うみべのストーブ 大白小蟹短編集」 大白小蟹

■ なんて繊細で心の深いところに訴えかけてくる作品なのだろうと感心してしまいました。読み終わった後には少し心が軽くなって前向きになれるような素敵な短編集。この本がデビュー作ということにも驚くばかりで、今後の作品がとても楽しみで仕方ありません。

会社員 / 小野塚博之

■ まずは装丁とタイトルが気に入り、手に取った。日常の一ページを切り取ったようで、そうではない。じんわりと心に響く。

コミック担当 / 実松由夏

■ 日常、何となくやり過ぎてしまう小さな切なさや悲しみが、ファンタジーを交えて丁寧に描かれています。普段過ぎていてふと感じる寂しさのようなもの。あまり深く突き詰めないでいたけれど、それはこういうことだったんじゃないか……ということに気づかせてくれるような短編集でした。とくに、『海の底から』にはどきっとしました。

主婦 / 堀江千秋

■ この著者のレンズを通してでなければ描けないであろう幻想的で澄んだ空気感や、言葉の置き方が読んでいてとにかく心地よい。見開きをはじめ、ページやコマの使い方のセンスが良すぎ。こんなにも綺麗な雪と、冬のエピソードを沖縄出身の方が描くのかと驚きもした。22年発売の短編集の中でピカイチのお薦め。

会社員 / 伊東敬祐

「裏バイト：逃亡禁止」 田口翔太郎

■ オカルト系、怪談系をテーマに扱った作品。怖さの切り口が多種多様だが、怖さだけではなく、ストーリーの面白さが際立つ。各話の結末で明かされる情報や内容を得たうえで読み直して気づかされる、「なるほど。そういうことね。」を味わいたくて周回してしまう作品。

会社員 / もちづき かずよし

「瓜を破る」 板倉梓

■ 人との関わりと恋愛を丁寧に描いた作品。出てくるキャラクター皆に共感してしまいます。

ブックファースト新宿店 / 渋谷 孝

「叡智なビデオは好きですか？」 玖珂ツニヤ、後藤羽矢子

■ プレゼン漫画、趣味を語る漫画は少なくないと思いますが、これほどディープなものがあったらどうか！まさに新たな叡智を手にしてしまった……と言える作品です

COMIC ZIN 商業誌担当 / 塚本浩司

「扇島歳時記」 高浜寛

■ 物凄く、切なかったです。ここからあのお話が続くんだな…と感じました。この話について、物凄く語りたいたいですけれど、ネタバレしちゃうから、話しません。

書店員 / 桶谷佳代

「推しの肌が荒れた～もぐこん作品集～」 もぐこん

■ 手間のかかる物体表面の質感の表現はマンガの弱点のひとつですが、陰影が濃い独自の絵柄を追求してきた作家が、その質感をテーマとして正面から向き合った作品。

マンガ研究 / ライター / 会田洋

「おたがね ♪ ～オタがため カネはなる～」小野寺浩二

- 44 歳おじさんに 18 歳姪がお金の人生計画をアドバイスするという、萌え実用書的な感じの一冊。とはいえそこはあの小野寺浩二先生、いつものように激しい方向で萌え表現前回です。「趣味人（オタク）のための幸せ人生計画」と銘打ったファイナンシャルプランナーのコラムもあってなかなか本格的。44 歳独身趣味全開おじさんという設定も大変身につまされまして、推したい一冊です。

めがねっ娘教団 大司教 / 田中海渡

「おとなになっても」志村貴子

- いい年したっていういやな言い方ですけど、まあ、でも、いい年した女性二人の恋愛物語、とはいえ 30 代なかばくらいの女性の漂う心理を描いています。主人公は、なんだか淡々としているようにみえるんですが、思春期の頃に気づけなかった感情の火に気づき、また再燃して、静かにその火を守っている。素知らぬ顔で教壇にたち、日常を送っている。わたしたちひとりひとは社会の中で見かけ上は統一した人格っていうことになっているけれど、ひとりの存在のなかには複数のいろいろな流れがあって、そのうちのどんな流れがそのときわたしを通じてあらわれてくるか、溢れてくるかはわからない。生きていくことの確信とゆらぎについて考えさせてくれます。

教員 / 戸田穠

「踊れ獅子堂賢」常喜寝太郎

- 父親の大病をきっかけに下着メーカーの社長になった 40 歳の男性が主人公です。学生時代はボクシングに明け暮れた彼が、社交ダンスに出会い、徐々に自分が動き出す感覚を思い出す。出会いは突然、現状を打破するきっかけは、意外と思ってもみない方向にあたりする。そんなちょっと運命的でドラマチックな展開を描きながらも、社長として会社や仕事に真摯に向き合っていく姿も丁寧に描かれています。年齢に関係なく、新たな環境に飛び込む勇気をくれるような、ちょっと頑張ろうかなと思わせてくれるような、そんな漫画です。

会社員 / 堀尾素子

「女の子がいる場所は」やまじえびね

- 中東、インド、そして日本。さまざまな文化の、決して女性の地位が高いとは言えない環境。そのなかで悩みながら前向きに生きる女の子たちの物語が、やまじえびね先生ならではの繊細なタッチで描かれ、圧倒されました。

ブログ「マンガ食堂」管理人 / 梅本ゆうこ

「音盤紀行」毛塚了一郎

- レコードというアナログな媒体をテーマに、アナログならではのタッチで細部まで描き込まれたページからは音や色、匂いが滲み出てくるようで、決して突飛ではないながらも味わいのある物語をオムニバス形式で楽しめる。各話の最後に、舞台となった建物の設定が描かれていることも、余韻に浸れる良いアクセント。願わくば、紙本で楽しんでもらいたい一冊。

会社員 / 伊東敬祐

- レコードのコミックは初でしょうか？ 独特の世界観があり読んだ後にレコードプレーヤーを回したくなります。

ブックエース上荒川店コミック担当 / 倉本かおり

レコードはミステリー。祖父が遺したドーナツ盤には見たことのない文字が書かれていて、プレイヤーにかけるとやっぱり分からない言葉で音楽が流れ出す。麻耶奈はレコード店の女性店員といっしょにレコードの出所を探し、そして麻耶奈がすっかり忘れていた場所へと導いていく。レコードはサスペンス。ロックが禁止された国で少女は海上の船から送られてくる海賊放送を聞いて世界的に人気のバンドが奏でるロックミュージックに触れ、感銘を受けていつかそのレコードを聴きたいと願う。危険をくぐり抜けてレコードを手に入れた少女は、やがて自分も同じように音楽を欲しい人のために届ける役目を担うようになる。レコードはコミュニケーション。遠くの暑い国へと出かけて足止めを食らった世界的に人気のバンドがホテルを抜け出し、街に遊びにでかけて耳にとめた少女が必

死に奏でるギターサウンドが自分たちの曲だと知り、そして少女から挑戦を受けて競い合ううちに打ち解け合っ
てしばしの休息を楽しく過ごす。突然に音楽を途絶えさせた海賊放送線が陥っていた危機を乗り越えて、海賊放送
船から飛んでくる電波を捕まえて、レコードから再生される音楽を聴いて新しい生活に馴染んでいく女性がいる。
街にずっとあるダイナーに置かれた古いジュークボックスで奏でられる、その街で生まれ育った若者達が作った自
主制作レコードを聴き続けて、音楽にだんだんと馴染んでいく存在がいる。レコードがあったからこそ繋がった絆
があり、強くなれた気持ちがあり、動き始めた感情があった。レコードといものが持つそんな役割を、綴ってくれ
た連作短編が収録された手塚了一郎の『音盤紀行1』（KADOKAWA）を読むと、どこかから引っ張り出して
きたレコードをプレイヤーに載せてトーンアームを上げ、針をレコードの溝へと落とすようになる。そして、ザリッ
としたノイズが流れてそして奏でられ始める音楽とともに『音盤紀行』を読み返して思うのだ。この素晴らしい文
化を絶やしてはいけないと。その魅力を伝え続けるためにも、この『音盤紀行』という漫画を伝え広めるのだと。
そんな漫画だ。

書評家/ライター/タニグチリウイチ

「会社帰りのパ・ド・ドゥ」瀬田ハルヒ

- 35歳の会社員(男)がバレエの楽しさに目覚める大人バレエ漫画。作者さんは10年以上のバレエ経験があるそう。
そのためバレエの姿勢やポジションの解説がとてもわかりやすいです。自然な流れでバレエに惹かれていく小日向
くんを思わず応援したくなります。自分も桜木さんと少しだけ境遇が似ていて、40歳でバレエ未経験だった会社
員男性と一緒にレッスンしているため親近感がありました。「トンベ・バドブレ」をい〜い感じの一本道でやりた
くなるあるあるは好感度爆上がり！バレエ用語にフランス語訳がついていることで動きのイメージを伝わりやすく
する工夫が細やかです。

出版社営業 / 佐々木つむぎ

「怪獣8号」松本直也

- 怪獣を倒すというシンプルでわかりやすい設定でありながらも、少年心をくすぐる技や胸に来るストーリーで、つ
いついこの作品の世界に没入してしまいます。

広告会社 プランナー / 平沼良章

「薫る花は凜と咲く」三香見サカ

- 出てくるキャラクターたちがみんな良い子で、ずっと優しい目で見守ってしまう漫画。

丸善ジュンク堂書店 営業本部 / 小磯洋

「ガクサン」佐原実波

- 参考書製作の職業漫画ではあるが単なる職業漫画では無い所が面白いです

tetote 代表 / 力丸 真

- 学生やお母さんをはじめ、受験勉強を一回でもしたことがある人にはぜひオススメしたい作品。今まで勉強してき
たアレコレが走馬灯のように蘇ります。とはいえ、普通に漫画のとして骨になるストーリーもとても素晴らしい。
主人公の悩みも、きちんと自分と向き合いところも、すごく共感できました。知名度まだまだな気がするので、ぜ
ひもっと読まれてほしいです。

ヘリックス・クリエイティブ(株) WEB デザイナー / 河本智芳

「片田舎のおっさん、剣聖になる〜ただの田舎の剣術師範だったのに、大成した弟子たちが俺を放ってくれない件〜」乍藤和樹、佐賀崎しげる、鍋島テツヒロ

- 原作未読ですがテンポがいいお話だろうと思わせるコミカライズになっています。セリフの間や、コマの流れ、ア
クションシーンの説得力と、思わず何度も読み返してしまう作品でした。次巻以降もとても楽しみです。

めがねっ娘教団 大司教 / 田中海渡

「ガチアクタ」裏那圭、晏童秀吉

- ゴミ拾いで生活、濡れ衣で「奈落」行き、底辺で生きてきたルドが、生きるために立ち向かう、王道少年漫画！作画も少年漫画らしく、アクション描写も迫力ある。

コミック担当 / 実松由夏

「(泣) -かっこ なき-」西炯子

- 簡単には表に出ない涙についてのオムニバスなのだが、おじいちゃんの推しの話が、妙にツボでした。推しは生きる力だね…

ヴァイオリニスト / 佐藤帆乃佳

「カナカナ」西森博之

- 佳奈佳がマサと一緒にいることでだんだんと楽しく幸せになっていくのがうれしい。

会社員 / 林礼春

「河畔の街のセリーヌ」日之下あかめ

- 19世紀のパリを舞台に、田舎から出てきた少し不思議ちゃんのセリーヌが様々な職業の人と出会うお話。当時のパリにどんな仕事があって、どんな人たちが働いていたかがきちんと描かれていて、オシゴト物としても楽しめますし、セリーヌが色んな人と触れ合って少しずつ成長していくのも面白いです。緻密に描かれた街並みや風俗描写もとにかく素晴らしい。

会社員 / 畑中 瀨路奈

「株式会社マジルミエ」青木祐、岩田雪花

- 魔法少女、ベンチャー企業、努力、チームワーク……ひとつひとつの設定やキーワードは、比較的よく見かけるものながら、丁寧な掛け算で、気持ちよく & 分かりやすく話が進み、ぐいぐいとその世界に引き込まれてしまった。主人公のみならず、脇を固めるキャラクターたちも魅力があふれており、それぞれの共感と応援の気持ちを抱けるのは素晴らしい。幅広い世代が楽しく読める作品だと思います。

会社員 / もちづき かずよし

- 魔法少女×企業の異色のタグ！？と思いきや、企業ごとに在り方が違う社会人としての魔法少女 & 社員たちの姿に胸が熱くなります。

会社員 / 竹本 慧

- 魔法少女を職業としている設定が新しい。システム構築、ツールの活用、効率化・・・など、読むと魔法少女漫画ではあるけれどお仕事漫画でもありとても楽しめる。絶妙にマッチした魔法少女×お仕事漫画なこの作品を推します！

三省堂書店海老名店・コミック担当 / 近西良昌

- 魔法少女ものなのに、はたらくお仕事漫画という新しい切り口が面白い。魔法なのにやたらシステムチックだったり、リアルと非リアルが絶妙に共存していて、共感しやすいです。働くって大変だけど、こんな会社っていいな。

図案家 / 橋本寛子

「「神様」のいる家で育ちました ～宗教2世な私たち～」菊池真理子

- 本書の「あとがき」にあるように、連載当時、ある宗教団体からの抗議を受けて公開停止となったことも物議をかもしたマンガでした。その後、昨年夏の安倍元総理銃殺事件の背景に宗教2世問題があったとされたことから、大変注目された作品です。なぜ注目されたのか、是非読んでみてください。これらはいずれも一人称の断片的な物語かもしれませんが、どう苦しみ、葛藤し、逃れようとして、あるいは…という思いを垣間見ることができます。

弁護士 / 三葛 敦志

「カモのネギには毒がある 加茂教授の人間経済学講義」甲斐谷忍、夏原武

■ どちらかと言ったら、自分はカモられる側だと自覚しているので、読んでためになることが多くて、とても参考になります。お礼を言いたいくらいです。

Books アイ蒲生エキナカ店 / 野口忠義

「百木田家の古書暮らし」冬目景

■ 冬目先生の描く日常の暮らしがとても好き。

カメラマン / 平沼久奈

■ 冬目景のマンガに出てくる登場人物には、いつも惹き込まれる要素が沢山有る気がします。古書店のある町と三姉妹のストーリーが心地良く流れていきます。三人とからむ梓沢によってどんな話が進んでいくか、読んでいて心地よいです。

デザイナー / 平沼寛史

■ 冬目景独特の柔らかいタッチで、三姉妹の人間ドラマが丁寧に綴られています。キャラと物語のバランスが心地よい塩梅。三姉妹恋愛事情も三者三様で可愛らしいです。古書業界の経営の仕組みも学べてお得感。また冬目景ファンにとってはお馴染み！伝説の特撮映画「ナマゴラス VS ヒトデラン南海大決戦」が作中何度も登場するのでニヤニヤが止まりませんでした。

出版社営業 / 佐々木つむぎ

「ギターショップ・ロージー」高橋ツトム

■ ギターショップを営む二人の兄弟が出会った一人の女と心暖まるギターショップの物語。様々な相談や思いを持った客と、兄弟のゆずれない思いによって紡がれる良いストーリーに惹き込まれます。

デザイナー / 平沼寛史

「綺譚花物語」星期一回収日、楊双子

■ 台湾の漫画賞「金漫獎 2021 年度漫画獎」受賞作品。帯には「台湾発 史上の百合漫画」と紹介されていますが、昭和初期の日本統治時代と現代の台湾を舞台に、風習や家制度に抗いながら、あの世とこの世が曖昧な少女たちの花物語が描かれています。百合描写はマイルドです。

出版社営業 / 佐々木つむぎ

「きつねとたぬきといいなずけ」トキワセイイチ

■ 超「今」と民話っぽさの絶妙過ぎるブレンド。ずっとかわいいのにずっと不穩。平和であればあるほど「いつ壊れてしまうんだろう」と不安に思う、というあの感情が増していく。と共に、どんどんおもしろくなっている。無垢なる者に無垢なままでいてほしいと思っているのか…という身勝手な自分の願望にも気づかされる。でも、それを成長と呼ぶのだよ、と言われてる気もするし、この子たち（きつねとたぬき）なら大丈夫だろうという力強さも感じる。

ライター / 門倉紫麻

「きみは謎解きのマシェリ」糸なつみ

■ 昭和初期の職業婦人として探偵業をしている星野さん。お洒落でポップなイラストで描かれる謎は、今の時代とも通ずる人たちの悩みから生まれたもので、どんどん引き込まれちゃいます。きっとこの作品に出会うことで救われる人がたくさんいるはずです。

女優 / 齋藤明里

「きよく、やましく、もどかしく。」アリハラナオ

■ ヤンキーっぽいけどピュアなギャルに、ぐいぐい来る変態風紀委員長。変態×風紀。すごい発明だ。主人公の親友の堀越さんが本当にひどい人で大好き。

朝日新聞記者 / 小原篤

「キラキラとギラギラ」嵐田佐和子

■ 絵のインパクトに惹かれて読みはじめたら、画風の違うキャラが同じ世界にいる不思議な世界にもう目が離せなくなりました。北斗の拳を思わせるシリアスな画風と昭和を感じる設定や小道具も絶妙に笑えます。少女まんがなヒロインが周囲の画圧に負けずにがんばる姿は素直に応援したくなっちゃいます！

主婦 / 紺野 泉

■ ためしにやってみた……のアイデアだが、手間を掛けないと成立しないわけで。「いい仕事」だと思います。

コメディアン / インコさん

「霧尾ファンクラブ」地球のお魚ぽんちゃん

■ タイトルに一目惚れして購入したら、大当たり！の作品でした。自分も霧尾ファンクラブに入りたい！仲良し女子二人のこじらせ偏愛コメディです。

うすいまりこ鍼灸院 / 碓氷麻里子

「金曜日はアトリエで」浜田咲良

■ 楽しく読んでいました。恵美子さんが、巻が進むにつれて、本当に可愛らしくなっていった、(元々綺麗なお人なのですが) こちらも嬉しくなりました。ハッピーな気持ちになりました。

書店員 / 桶谷佳代

「九龍ジェネリックロマンス」眉月じゅん

■ 今一番結末が気になるマンガです。だんだんこの世界やヒロインの正体に近づいているはずなのに、一方で謎も増えていくので次巻が待ち遠しい作品です。

会社員 / 林礼春

■ 九龍城、あるいはあらかじめ失われたものたちをめぐる代替可能なラブロマンス。8巻にもなってまだまだ謎が深まるというか、タイトルの意味がさらに深化してきた！そう、九龍で、代替可能で、だからこそ生まれたロマンスだった。なんとまあ切なく甘いことよ。一気に読むなら今が一番面白いと思う。

ソフトウェアエンジニア / 第貳齋藤

「クジマ歌えば家ほろろ」紺野アキラ

■ ロシアから渡ってきたという、謎のしゃべる鳥「クジマ」と思春期の主人公の交流。「異形の者」が家族になるという定番の物語も、令和らしい家族像が加わると新鮮で楽しい。癖が強いけど憎めないクジマと純粋な主人公、という組み合わせもよいです。

ブログ「マンガ食堂」管理人 / 梅本ゆうこ

■ ロシアから来た謎の生き物、クジマ。そんな非日常的存在が、驚くほど自然に溶け込んでしまった家族とともに、何気ない日常を過ごしていく。ただその様を見ているだけで、何とも言えぬ温かさや、愛おしさが溢れてくる。「可愛い」ともちょっと違う、クジマの不思議な魅力を、そっと薦めていきたい。

会社員 / 伊東敬祐

■ こういうノリのマンガ待ちました！！謎の知的生命体との共同生活…と聞くと、ドラえもんの国に生まれ育った私達にとってはDNAレベルでおなじみの(だよね?)設定かと思いますが、今作品はまた順応していくところからしっかり描かれていて、そこも丁寧なのにきっちりコミカル。コメディだしクジマはわりとキレキャラだしありえないことだらけなのに、クジマのキモかわいい造形もよいのですが、だいたいの登場人物が物腰がやわらかいからかシュールなのに癒やされます。あれやこれやでなにかと窮屈な昨今の心のコリをほぐしてくれるような作品です。

公務員 / 宇田川結衣子

「九条の大罪」真鍋昌平

- 弁護士：九条の生き様を通じて、社会のどす黒さや、人間模様を知る。普段何気なく過ごしている裏側にこんな闇があると思うと、身の毛がよだつ。闇の中に光が射すこともあれば、より深い闇に落ちていくこともある。悪にも正義があり、正義にも悪があり、人間は本当に複雑な生き物だと感じてしまう。眉を寄せ顔をしかめながらも、続きが気になって仕方ない。

デザイナー／シンガーソングライター / 平松新

- 「闇金ウシジマくん」の闇を弁護士側から覗いている感覚になります。現代社会の闇を本当にうまく描いていると思います。絶対当事者になりたくない知らない世界を知ることができます。

フリーランス / 玉澤綾子

「くまのむちゃうま日記」ナガノ

- くまの表情がまじ好き。全ページカラーで素晴らしい。えらい。癒しマンガ。

金海堂イオン隼人国分店コミック担当 / 園田美智子

「グリーンフィンガーズの箱庭」穂坂きなみ

- 草薙先生は透明人間の植物学者。大学生アルバイトの旭くんの少し不思議な物語。不確かなものを解いていく様は小説を読んでいるような読了感を得られます。

会社員 / 伊藤千恵

「GLITCH」シマ・シンヤ

- ページをくるたびにまるで映画を見ているように物語に誘われていく。桃迦町へ引っ越してきた兄弟は街中で見かける幽霊のような存在が気になり、その謎を解き明かすために調査を始める。独特かつ個性的な作風に加え、登場人物たちの個性や物語の独特の“間”がとても魅力的だ。SFが好きな方はもちろん、表紙に少しでもビビッと来た方。ぜひ読むことをお勧めしたい。

会社員 / 杉 佳尚

「クレイジーフードトラック」大柿ロクロウ

- 美味しそうな料理あり！アクションあり！お色気あり！？そういった見出しで紹介したくなるほど明快な物語。食材を探し求めて、イケてるおっちゃんと訳あり少女の二人旅。美味しそうに料理を食べる描写は見てのこちらも幸せになる。また一つの映画を見終わったかのような爽快な読後感であったこともお伝えしたい。いろんな人にお勧めしたいが、この推薦文の中の要素の一つでもピンとくるものがあつた方。ぜひすぐに読んでほしい。後悔しません。

会社員 / 杉 佳尚

「黒博物館 三日月よ、怪物と踊れ」藤田和日郎

- この世界観非常に面白いですね。フランケンシュタインを元にしたことから生まれたキャラクター。いつものゆるい感じと緊迫するシーンと藤田 和日郎が好きなら安心して読めます！

デザイナー / 平沼寛史

- 不気味な怪物の登場する黒漫画。世間を敵視する不気味な雰囲気は、初期の鬼太郎もの（墓場の鬼太郎）やベルセルクの使徒を彷彿とさせる。今後の発展が期待される作品である。

弁護士 / 三村 量一

- 暗殺者の身体に村娘の首。自分が何者か知らぬ怪物、エルシィ。自らの内に怪物が棲むという小説家、メアリー・シェリー。さながらフランケンシュタインと〈怪物〉のような二人が紡ぐ、ビクトリア朝が舞台の伝奇アクション或いはゴシックホラー。ヒロインはポニテで可愛いよ！

八重洲ブックセンター宇都宮バセオ店 / 山本さとみ

■ 藤田和日郎先生最新刊と言われたら手に取らない理由がない。ましてや黒博物館シリーズ待望の新シリーズとなったらもう期待しかないのです。先生の描く女性はいつだって強かった。一見おしとやかそうに見えても皆必ず揺るぎない芯がある。私は藤田和日郎先生の女性の描き方が昔から大好きでした。本作は「女性」が主人公であり作品の大きなテーマでもあると思っていて、不確かで曖昧で、不安になることばかりのこの現代で、毅然と苦境に立ち向かっていく女性の様を見るのはなんと勇気が貰えるものなのだろうと思いました。やっぱり藤田和日郎先生はすごい。すごいです。

フリーランスデザイナー / 金輪英恵

「ゲーミングお嬢様」吉緒もこもこ丸まさお、大 @nani

■ どうにも自分は星辰が正しい位置にないと描けないマンガに弱いらしく、今年はこれがそれだ。『ゲーミングお嬢様』のタイトルを生み出し、世に出した時点で大概もういいだろこのマンガ、と思ってたらちゃんと時流を読み取り、生み出し、渦中にありながら、渦や流れそのものでもあった、つつう稀有なバランス感覚のもとに在りえたマンガであった。たぶん褒めすぎだが。お美事。いや、お美事でございますわ〜 というべきか。e スポーツ (スポーツだと?) という美辞麗句のもとで格ゲーと格ゲーをやる奴らが美化されがちな流れのなかでやっぱり格ゲーって、捻じ曲がった根性と、狂った情熱と、クソみたいな攻撃性をもった、ドブみたいな人格の人間たちが行う、最低最悪の行為っすよね (だから俺たちは、どんな形であれそれに関わり、楽しもうとしてしまうんすよね) つつう、えぐみを、甘さを、率直に描いてくれたことには感謝の拍手を送りたい。

ソフトウェアエンジニア / 第式齋藤

「結婚するって、本当ですか」若木民喜

■ マンガや読書、映画やゲームなど自分の世界に没頭するのが好きだった人はたぶん知っているだろう。人見知りの心地よさを、必要以上に人と関わらないことの快適さを。しかし社会に出れば、それが許されない場所もある。会社などはその典型だ。この物語は旅行代理店に勤める、ともに人見知りの男女の同僚がシベリア転勤の危機、を逃れるため、偽装結婚という共闘を始める。それぞれ違う趣味を持つ人見知り、少しずつ自己開示しながら徐々に関係性を深めていく。傍から見るとじれったいほどにじるように少しずつ詰まらない二人の距離。しかしそのゆっくりした速度こそが物語にリアリティを与えている。聞けば作者自身、過去に引きこもりだったことがあるという。人見知りだったことがあるすべての人へ。既刊9巻 (9巻は2023年1月発売) 以下続刊。

ライター/編集者 (馬場企画) / 松浦達也

「結末の国のアトー」土藤山夜

■ 可愛い絵柄とキャラクターに騙される残酷なお伽噺。物語のキーとなるのは、滅びた独裁国家が世界にばらまいた非人道的大量破壊兵器「特殊呪力惨禍召喚物 (通称=特召物)」と、それを己の身体を削って解体無力化する主人公の少年アトー。2022年、戦時下にある今この世界だからこそ読んで欲しいダークファンタジー。

コミティア実行委員会会長 / 中村公彦

「煙と蜜」長蔵ヒロコ

■ 大人の男性の力強いカッコ良さや仕草の色気がたまらない作品。大正時代の生活風景が丁寧に描かれているのもとても良いんです。そしてとにかく姫子ちゃんの可愛さにはきゅんとしっぱなし。成長していく女の子は目が離せない可愛さがあります。

主婦 / 紺野 泉

「獣上司に実は認められていた話」しろいぬ

■ 主人公の沖さんが可愛くてかっこよくて好きです。スーパーロングヘアが綺麗。ストーリーは「胸熱」というより「胸あったか」で泣けます。これまでたくさん傷ついてきた沖さんとアトラスが、互いの存在に救われ、支え合い、共に戦っていく、最強バディになりそうな予感を2巻ラストで感じたので、次巻が楽しみです。

金海堂イオン隼人国分店コミック担当 / 園田美智子

「ケモ夫人」藤想

■ Twitter に投稿された 1 エピソードから発達していった異形のマンガです。おっとりとした性格の獣人である、通称「ケモ夫人(本名不明)」の巨人討伐の旅と、その道中で出会う様々な事件を描く物語です。独特の筆致ながら、現代のマンガシーンにおいて誰も追いつけないセンスから生み出される、異次元の愛らしさをもつキャラクターの数々、根源的な恐怖を煽るクリーチャーデザインが目をつまみます。話が進むにつれ、眩暈がするほどに奥行きを増していく世界観とスリリングな物語と、映画のような壮大でセンチメンタルなカメラワークで作られる美しい画面もあって、唯一無二のマンガ体験を得ることができます。人を選ぶ作品ですが、バイブスが合ったときには、一生逃れられないような魔力に満ちたマンガです。

株式会社アニメイト / 岡部 真矢

「ケンシロウによろしく」ジャスミン・ギユ

■ 破天荒マッサージコメディ！！面白い

tetote 代表 / 力丸 真

「こういうのがいい」双龍

■ いいな?(感嘆)、いいな?(羨望)、いいな?(納得)、いいな?(共感)「人と人との関係性なんて本人たち次第」ってというのがやっと分かる歳になったんだと思った。話題が噛み合って食の好みも合って欲求も見たせあってる…いやーほんとただただ尊い…。2人ともいいやつや。いいやつなんやでほんま…。男女間に友情は成立するか?の一つの答えな気もする。しないけど、こういうのもいいよね。主人公たちが決して短絡的ではなくて、「付き合った瞬間にお互いに期待が大きくなるのが嫌」「恋は欲求」って分析が本当にそれ。確かに契約といえば契約なんだよなあ。いやでも現実的にはまず無理だな、理性とかバイオリズムとか周囲の環境が劇的に変わるリアル世界では成立無理じゃ。幕間の二人の一言コメントがすごい好き。

会社員 / 布施直人

■ こういうのでいいんだよ、わかるわかる(願望)。わかる人にはわかる、たいへん「夢」のある作品。

株式会社プロプラス商品部 / 池本美和

「ゴクシンカ」ピエール手塚

■ ハ○ター×ハ○ター休載中はこれで飢えをしのげ！ といいたくなる現代異能バトルの南極。

ときどきライター / 縣丈弘

「極楽街」佐乃夕斗

■ 煌びやかだけど危険な街「極楽街」で、トラブルシューター「解決屋」の二人が人助けや怪物退治に奔走するお話。佐乃先生の圧倒的な画力で描かれるビジュアルがとにかく強いです。中華風でアウトローな極楽街の街並みの描写は、熱気や匂いまで感じられるほど。加えて、「丸グラサンを掛けてタバコ吸いながら拳銃をぶっ放す、超美人でスタイルも極まった強い女」である夕乃さんをはじめ、最高なキャラクターデザインの登場人物たちが生き生きと動き回る様はネクストブレイクの雰囲気たっぷりです。ジャンプ S.Q 発の次代のエース間違いなし、キャラの立ったアクションものが好きな方は必読の作品です。

株式会社アニメイト / 岡部 真矢

「ゴダイゴダイゴ」コウノスケ

■ 巨大化したおじさんがヒーローの物語。イケオジでもなければ、スマートな武器ももっていない、派手な必殺技も当然ない。しかし中身ががとにかっこいい！。ビジュアル度外視のおっさんが活躍することで、人間味の際立つ今までにない異色な作品です。おじさんならではの立ち回りで知識と経験で駆使して周囲に魅せる戦いは、今までのヒーローには無かった新しい重みを感じます。

会社員 / 佐藤優

「定額制夫のこづかい万歳 月額2万千円の金欠ライフ」吉本浩二

- 21世紀によみがえった「大東京ピンボー生活マニュアル」感がある。卑近で身につまされる内容で、これはこれで現代に必要なものなのだとも思う。

マンガ読み / サイトウマサトク

「言葉の獣」鯨庭

- 言葉というものがどういう意味を持っているのか、相手に伝わってどう変化するのか。今まで読んできた詩を読み返したくなるし、自分が簡単に口にしていた言葉について考えさせられました。最高でした。

オフィスオーガスタマネージャー / オフィスオーガスタ樋口健

- なんだかよくわからないけど凄い、が最初読んだ感想。私もこの先どんな獣が出てくるのかを楽しみにしたくなる発想と造形で、まだ1巻とはいえ無視できない作品。現実とファンタジーを行き来する塩梅がとっても好きです。

ヘリックス・クリエイティブ(株)WEBデザイナー / 河本智芳

「ことり文書」天野実樹

- 闊達なお嬢様と堅物執事の微笑ましい日常コメディ。他愛のない話だからこそ、人物像やエピソードの雰囲気の良い感じが印象的。この空気感を醸すセンスはすこぶる貴重だ。

書評家 / 福井健太

「この世界は不完全すぎる」左藤真通

- なぜ、この世界は不完全すぎるのか、第1話のネタバレをしますと、それはデバッグ中のゲーム世界だから。ゲームの世界に入る作品はいろいろあると思いますが、デバッグ中のゲーム世界に閉じ込められる作品は珍しいのではないのでしょうか。第1話で明かされるそのギミックに驚き心を掴まれますが、その驚きや面白さが8巻になった今も続いています。バグを使った戦い方、デバッガーそれぞれのこの世界での生き方、NPCとの関わり方、この世界から脱出するには...先の読めない展開が続いています。1巻が出た年に投票していたのですが、8巻が出た今回再度投票したい。こんなに面白いのだからもっとたくさんの人に読んでほしい！

声優 / 富岡美沙子

「後ハッピーマニア」安野モヨコ

- ハッピーを追い求め暴走列車のような20代を過ごした主人公・カヨコ(旧・シゲカヨ)。自分に溺愛ぞっこんな真面目男子と結婚し、にフツの幸せを手にしたかと思いきや、45歳のある日、離婚を突き付けられる。マジでー！全然若くないし、後もないけど、シゲカヨは今日も元気でタフ。次々に起きる修羅場も愁嘆場も、ひと皮むけばみんなコメディ(ときどきホラー)と教えてくれる一冊。

一般社団法人マリーゴールド / 島影真奈美

「ゴリラーマン40」ハロルド作石

- 最高でした。思いっきり笑えるのに目頭が熱くなりました。

PENICILLIN / HAKUEI

「転がる姉弟」森つぶみ

- 出てくるキャラクターが皆良いです。読んだ後に凄くほっこりします。

ブックファースト新宿店 / 渋谷 孝

- みんなが好きすぎて、笑うところでも、気付くと泣いてます。もしかしたら笑うところじゃないのかな。

オフィスオーガスタマネージャー / オフィスオーガスタ樋口健

「婚約者は溺愛のふり」仲野えみこ

- アラブ風の世界観でセリフが令和なのがおもしろくて好きです。開始2ページ目で「クレーム処理」という単語が出てきます。そのほか「ハート強」「うざ絡み」「エンカウト」「顔良…」等。おもしろいです。

金海堂イオン隼人国分店コミック担当 / 園田美智子

「サターンリターン」鳥飼茜

- 前半戦のモヤモヤとした展開から一転、ものすごい勢いで生き生きと動くキャラクター達にやられました！凄まじい展開力とまとめ力に脱帽！これは読むべき！！素晴らしかったです。

OKAMOTO'S(SMA) / オカモトショウ

「雑用付与術師が自分の最強に気付くまで」アラカワシン、戸倉儂

- 理不尽にパーティから追い出された付与術師が、才能を見出されて大活躍する話。これまでに幾多も描かれた設定のようでありながら、主人公の自信の無さと、とてつもない能力のギャップが魅力的で面白い。不遇な環境にいた彼が、認めてくれる仲間たちと出会い、少しずつ自分を表現できるようになる姿に心を打たれます。

デザイナー/シンガーソングライター / 平松新

「さみしさの音がする」シギサワカヤ

- シギサワ女史の作品は昔から大好きなんですけど、本作は一卷完結ながら繊細なバランスが揺れながらも短い時間に凝縮されていて、まさに珠玉の一品になっているのではないかと思います。シギサワさんの描く裸ってエロいわけではないけどなんかこう不思議な色気と感情が乗っているような感じもいいですね（唐突）ところで、替え玉のある二郎系ってどこだろうとどうでもいいことが気になりましたが、お互いニンニクの香りのするキスはそれぞれで青春だなぁと思いました。

めがねっ娘教団 大司教 / 田中海渡

「去る者は日々に疎し」葉月京

- 死の匂いを感じ取れる仏壇屋の主人公と、死を感じて生きる AV 女優が出会う話。出会わなかったはずの2人の物語がとても哀しくて、でも温かくて胸に響きます。いつか平穩が訪れて幸せになってほしい。

デザイナー/シンガーソングライター / 平松新

「SANDA」板垣巴留

- BEASTERS に続いて作品作りの観点が天才的

会社員 / 齋藤隼

「サンダー 3」池田祐輝

- 扉絵と内容が違いすぎるものの、良い意味で想像もつかない展開が待っている漫画です。ちょっと古めなテイストのギャグ漫画かと思いき、軽い気持ちで読んでみたらしっかり騙されました。物語の初めはなんとも言えない雰囲気ですが、第一話の最後の方から世界観というか、漫画が変わり、バトルなのかギャグなのか、他の何なのか、カテゴリーがさっぱりわかりませんが、いちおうハード SF なのかなあ。違和感が常に付き纏う内容なのですが、それが気持ち悪さではなく面白さになっていて展開が気になる内容になっています。

会社員 / 佐藤優

- 可愛い絵のタッチが全てフリになっている漫画じゃないと表現できないこれぞ新しい漫画だ！と衝撃を受けた作品。まだ2巻ながら今後の展開がとても楽しみ。

ヘアメイク / 北原由梨

「三拍子の娘」町田メロメ

■ 三姉妹の日々の暮らしを描いたマンガです。各々がマイペースにお互いを尊重して日々をすごしてゆく姿は、いろいろなことを深刻に考えることをやめて、目の前の日々の暮らしに目を向けて生きることの大切さを教えてくれます。母がなくなり、父親がいなくなっている家庭なのですが、深刻にはとらえておらず、そんなもんだよねってフラットに受け入れて楽しく生きています。大変なことがあっても、日々の暮らしを大切に生きていればどんなことでも乗り越えられそうに思えてきます。人生ってそんな大げさに考えずにもっと方の力を抜いても大丈夫だよって教えてくれてるかのようです。将来への不安にとらわれすぎている人、日常の幸せを底上げしたい人におすすめのマンガです。

会社員 / 廣瀬 公将

■ 日常の着眼点によって世界は本当に面白い。2巻も出だし、まずは入賞して欲しい、...

オフィスオーガスタマネージャー / オフィスオーガスタ樋口健

「しあわせは食べて寝て待て」水風トリ

■ 家の中でのんびりと、好きな飲み物を片手に1人の時間を楽しみながら読みたいストーリー展開が好きです。これまで勝手に、身体に悪そうなものこそ美味しいものであるもと思っていたが、身体の事を思いながら美味しいものに拘る生活がステキです。

(株) エフ・ジェイエンターテインメントワークス / 阿部 大介

■ 昨年に続いて。巻数が進むに連れて生じる「物語としての都合良さ」と闘っている姿もいい。

コメディアン / インコさん

■ 引き続き、さとこさんの頑張らないスローライフを応援しています。そして、自分もそんな暮らしにしていきたいなと思います。3巻にあった、「優しさにも体力がいるね」「私は冷たい女になりました」「私はやっと自分を大切にできるようになったんだと思う」というさとこさんの言葉に、なんだか救われるような気がします。

主婦 / 堀江千秋

「ジーンブライド」高野ひと深

■ 女であることが生きづらく日々絶望していた主人公が、超個性的な同級生の男との再会を転機に、様々なことに抗いながら強く生きていく……みたいなお仕事ストーリー的な感じだと思って読んでいた、1巻の最後の辺りまでは。台詞や表情の緩急、各話の引きなど漫画的な上手さと、まだその一部が顔を覗かせただけの大きな物語に一気に引き込まれる。広がる謎、ジーンブライドとは何なのか、続きが気になりすぎる一作。

会社員 / 伊東敬祐

■ これからもっと面白くなりそうな予感。まだまだ謎がいっぱいです。

ヴァイオリニスト / 佐藤帆乃佳

「死に戻りの魔法学校生活を、元恋人とプロローグから（※ただし好感度はゼロ）」白川 蟻ん、六つ花 えいこ、秋鹿 ユギリ

■ 死に戻り系だと、復讐するか、失敗を修正して無難に生き延びようとする話が多い中で、ひたすら相手の為に行動する主人公が健気！ミステリー要素もあって、流行りの設定の人生やり直し系でしょ？と軽視していると勿体ないです。

元書店員 / 井出 麻悠美

「白山と三田さん」くさかべゆうへい

- こんなにもお似合いなカップルいるだろうか。と思うぐらいお似合いです。決してカッコいいわけでも可愛い美人さんというわけでもないけれど、この二人の関係を応援したくなっちゃいます。そして笑えます。今流行のラブコメにちょっと物足りなさを感じたら、このカップルは如何でしょうか？おすすめです。

三省堂書店海老名店・コミック担当 / 近西良昌

- 「高校生カップルの日常」という設定を文字で見た時のイメージとは明らかに異なる2人が主人公。地味だけど、自分の好きなものを大切にしている2人が出会い、信頼と愛情を育てていく物語。「付き合ってから初めての夏休みに2人で東京旅行」という陽キャイベントのトップに君臨するようなエピソードをまさか、こんな風に描くんだ！というのが序盤の最大の見どころ。2巻を読み終わる頃にはこの2人のことが大好きになっているはずです。

伊吉書院 類家店 / 中村深雪

- 2人のやり取りに、なんだろう、キュンとするのではなく、ジワジワ来ます。

教師 / 持丸宏司

- 最新話が更新されるのがめちゃくちゃ楽しみな漫画の一つです。ラブコメなんですが、センスのいい笑いが散りばめられ、一冊に1話ぐらいの頻度で訪れる感動回が涙腺を崩壊させます。冴えない二人に見えるんですが、何をやらせてもハイセンスな三田さん、実際冴えないんですが、たまにめっちゃカッコいい白山くん、表紙からも感じられるどこかシティポップのようなオシャレさもあります。恋愛ものなのに、1話目でいきなり付き合っちゃうところ、最後のシーンっぽいところも1話目でいきなり出てきます。二人がどうやってそこに行き着くのか、、、受け流せません。

吉本興業 / ムーディ勝山

- コメディとして描いているので、可笑しいのは当たり前なのだが、極端なようでいて、文系系高校生あるあるな日常はリアルで、懐かしさも感じる不思議な漫画。

丸善ジュンク堂書店 営業本部 / 小磯洋

「島さん」川野ようぶんどう

- コンビニ従業員の日常人情話。時にビビッと緊張感が走る！

本と文具ツモリ 西部店 / 津守晋祐

- 深夜のコンビニでバイトする、島さんというおじいさんのお話です。漫画というのは迫力のあるものや、伏線を張り巡らせ緊張感のあるものなど様々ですが、肩の力を入れず、実家にいるぐらいリラックスして読める漫画というのも大好きなんです。最近ではそれがこの「島さん」です。1話完結なのと、身近な“コンビニ”というテーマで繰り広げられるほっこりさせるエピソードが、読んでも人のHPとMPを5ずつ回復してくれます。作者の川野ようぶんどう先生は実際に深夜のコンビニバイト25年やっていたそうで、シフトには入らないものの、一応まだ在籍はしているそうです。(笑)連載が始まった頃はまだガッツリシフトに入っていたらしく、漫画アクションの連載作家を招待した忘年会にはバイトで忙しく参加できなかったそうです。(笑)常連さんが倒れて来なくなるというエピソードがあるんですが、それは川野さんが実際に、倒れた常連さんがまたお店に来てくれた事が基になっているそうです。この漫画も、受け流せません。

吉本興業 / ムーディ勝山

「15分の少女たち - アイドルのつくりかた -」かっぴー、戸井理恵

- アイドルの物語ではなくてアイドルを作る人たちの物語。とにかくリアルです。ここまで晒して大丈夫？というレベルで。今、アイドルのオーディション番組が流行ってますが、制作サイドの考えや、本人の心情など、気づきも多いです。世のアイドル、作り手、ファン、関わる方全員に読んでもらいたいと思うぐらいのステキな作品です！

TEAM SHACHI / 秋本帆華

「殉国のアルファ」嶋木あこ

- オメガバースの世界観でフランス革命を描いた異色なファンタジー。国王ルイ、マリーアントワネット、そしてフェルゼンとロベスピエール。役者が揃ってヒロインのフランをめぐってどうなるのかドキドキします！オメガバースは設定が特殊ですが、フランス革命が好きな方に読んでほしい。新しい世界が見えるはず。

主婦 / 紺野 泉

「将棋の渡辺くん」伊奈めぐみ

- 中学生でプロ棋士になったのは、今までで5名。そのうちの一人、渡辺明さんがゆるキャラのような渡辺くんとして登場するエッセイマンガ。敬意を込めて渡辺さんと呼びたいんだけど、ここではマンガのキャラなので渡辺くんにしたほうがいいかな……。そんなことを考えてしまうくらいほのぼのしてる。将棋を指している時とはまるで別人みたいだ。なんでこんなことが可能かといえば、作者が妻だから。ただ、今まではほのぼの一辺倒だったのが、藤井聡太さんが出てきてからだいぶ変わってくる。渡辺くんが引退を考えることが多くなってきたのだ。将棋という限られた分野といえど、天才といって差し支えない頭脳をもった人が能力の限界を感じて引退を考え始める。絵柄はかわいらしいけど、その心中はいかばかりか。

鳥取県立図書館 / 野間勤

「しょせん他人事ですから ～とある弁護士の本音の仕事～」左藤真通、富士屋カツヒト

- 弁護士マンガってたくさんありますが、ここまでストレートなタイトルはむしろ好感（笑）。インターネットをめぐる誹謗中傷に、「所詮は他人事（ひとごと）ですから」と臨み、しかし他人事だからこそ、徹底的に戦う主人公保田弁護士の姿は頼もしいです。弁護士で国内随一の専門家である清水陽平先生が監修されているので、実務でも参考になります。インターネットに書き込みをしたことのある人の誰しもが巻き込まれる問題だからこそ、多くの方に読んでもらいたいマンガです。

弁護士 / 三葛 敦志

「ジラソウル - ゴッホの遙かなる道 -」沼野あおい

- 37歳のゴッホと8歳のピカソが会う話し。勿論、実際の歴史上では会ってはいないのですが、会ったからピカソはこういう絵を描くようになったのか～と思いこんでしまうようなお話しです。歴史的にゴッホが37歳だったときに、ピカソは8歳だったのは本当のお話しなので、その背景と俄かにゴッホの一生を知っていると37歳がどんな時か、今までの作家との関わり合い、ゴーギャンとの関わり合い、そして唯一？の理解者である弟のテオとの交流などが描かれていて、歴史に触れた感じがしてわくわくします。そして、ゴッホの狂気もぞくぞくします。ピカソと正反対のゴッホには、共通する絵を描くことへの怪物（勝手に名付けてしまってすみません。。ブルーロックの蜂楽くんが言っている「怪物」のイメージ）が面白いです。

アニメイト / 鈴木寛子

- ただのヨーロッパの芸術家の知識系マンガと思いきや、若干の空想を織り交ぜて、現実にはいた芸術家たちの苦悩や喜びをよりわかりやすくエンタメにしてくれている珍しい書物です。もちろん知識系としても楽しめて、アートに触れ合うための予備知識をいっぱい与えてくれるのでありがたいです。読み終わったら高確率で、美術館に行きたくなります。

バーテンダー / 村井真也

「信じていた仲間達にダンジョン奥地で殺されかけたがギフト『無限ガチャ』でレベル9999の仲間達を手に入れて元パーティーメンバーと世界に復讐＆『ざまあ』します！」大前貴史、明鏡シスイ、tef

- ストーリーについては、よくある展開と言われればその通りなのですが、雑な所が無く丁寧に描かれており、とても分かりやすいです。タイトルや絵柄からファンタジー系のハーレムものかなあと思いきや、しっかり少年誌になっていますし、登場人物が多いにも関わらず、しっかりキャラ立ちしてるので、ぐいぐい引き込まれます。

会社員 / 佐藤優

「数字であそぼ。」絹田村子

■ 読めば抱腹絶倒の学生生活を楽しめる。同時に数学の奥深い世界にも触れられる。そんなマンガだと去年も紹介した絹田村子の『数字であそぼ。』（小学館）を今年も推す。変わり者ばかりの出てくるキャラクターたちは最新の第8巻でも健在だ。暗記が得意でその能力で京大がモデルの吉田大学に入学してしまった主人公の横辺建己は、入学早々に数学の講義で訳が分からず引きこもりになって、2年間を無駄に過ごしてしまうが、そんな彼ですら普通に思えるくらい、ヘンなキャラクターたちが登場しては、大学生活を送りながら直面するさまざまな現象に数学で立ち向かう展開を楽しめる。横辺の引きこもりを決定づけたくらい天才的な数学センスの持ち主ながら、住んでいる部屋はゴミで埋まり、合コンではイケメン男子に微積分の議論をふっかける夏目まふゆは最新刊ではどちらかといえば脇役。その友人で神社の娘で巫女をしていて見かけはとてつもなく美女の平坂世見子が、第8巻では割とフィーチャーされて登場する。縁結びに押し寄せてくる参拝客の女性が使っていると聞いた世見子が、マッチングアプリを試すエピソードで、どれくらいの人と会えば良縁を得られるのかを何と数学で検討してのける。100人が面接に来る秘書の採用試験で、落としたり絶対採用せず、採用が決まったら後は面接をしないという条件の場合、どこまで落とし続ければベストな結果が得られるのかという問題を敷衍して、30人くらいは会い続けるという結果が出た。だったら従った世見子に訪れたピンチに、仲間たちがかけつけるところは実に青春。その意味では立派に青春コミックだとも言えるし、実際によく行くインド料理屋の交換ノートで数式のやりとりをするようなエピソードも、青春なら夢が感じられる。もっともその相手が誰か判明した段階で絶望の縁へと叩き込まれるが。リボ払いがもたらす恐怖や、手持ちの資金をただ貯めておくだけでは無意味だといった示唆もあって、お金の使い方も学べる経済コミックとも言えそう。商売をしている店が、数字に厳密な客を相手にどのような態度をとればいいかも教えてくれるけれど、その通りで果たして大丈夫なのか。通用するのは数学者だけではないのか。ちょっと試してみたくなった。とりあえず世見子に幸せを。

書評家/ライター/タニグチリウイチ

「スキップとローファー」高松美咲

■ 今年がラストチャンス！ということで推薦致します。アニメ化も決まって、読者は増えていますがまだまだ足りない！懐かしき思春期を思い出しながら、今思春期真っ只中の学生にも読んで欲しい。不器用だけどもっすぐで、青春していて、でもなんだか憎めないし応援したくなっちゃう主人公の成長と、周りも主人公に影響されて良い意味でみんな成長していく学園ストーリー。心優しくなれる、落ち着く漫画です。

三省堂書店海老名店・コミック担当/近西良昌

「Stand by me 描クえもん」佐藤秀峰

■ 漫画家が描く漫画家マンガは数あれど、リアリティ&絶望をテーマにかなりシビアな内容で、胸が苦しくなる場面の多い漫画です。好きなことと仕事の分別を飛び越えた先、そこに落ちた深淵がとんでもなく深くて面白い。ファンタジー要素もすこしあり、リアルホラーな部分とエンターテインメントが織り交ぜているため、特段気分が悪くなるとかではなく読めます。

会社員/佐藤優

「刷ったもんだ！」染谷みのる

■ 印刷業界でのお仕事あるあるをベースにしたコメディ&人間ドラマな作品。まず、知っているようで意外と知らない業界の仕組みや裏側が覗けるのは純粋に楽しい。職種は変われど、仕事に就いた人であれば経験しているであろうエピソードも多く、こんな同僚や先輩がいたらいいなとちょっぴり羨ましい気持ちになってしまった。

会社員/もちづきかずよし

■ 印刷会社を舞台にしたお仕事物ですが、コミケのことやグッズ制作のことなども描かれていて、なるほど〜あれはこうやって作られてたのか！となるエピソードばかりです。元ヤン主人公をはじめ、登場人物たちもアクのあるキャラクターばかりで、彼らの関係性が変わっていくのも面白い。

会社員/畑中 瀬路奈

「スノウボールアース」辻次夕日郎

- ロボットに乗り込み地球の救世主として怪獣と戦う主人公の少年。彼は完璧な英雄像とは異なりいわゆるコミュ障に近い。この時点で親しみが湧く。戦うことに存在意義を見出していた少年が“友達を作る”ために奮闘する姿に、胸が、目頭が熱くなる。舞台は氷漬けの地球とめっちゃくちゃ寒いのが、物語はめっちゃくちゃ熱い！ロボ物、バディ物が好きな方はぜひ。好きじゃなくてもぜひ読んでほしい作品。

会社員 / 杉佳尚

「スペシャル」平方イコルスン

- 2020年に一次選考で投票しました。3巻まで読んでいた段階で「不穏な空気がある」と自分はコメントしていました。が！！こんなラストを誰が予想していたでしょうか。はじめは言葉の掛け合いと世界観、キャラクターが大好きで楽しく読んでいましたが話が進むにつれて不気味な展開と衝撃の結末にひっくり返りました。描き下ろし数ページの余韻もすごい。お互いのことを強く想いあう伊賀とハノサヨの関係こそ「スペシャル」だったのだなあと思うと切ないです。次回作にも大いに期待！

出版社営業 / 佐々木つむぎ

- 高校生の日常を描いた漫画は数あれど、この作品は一味も二味も違います。キャラのクセの強さ、独特なセリフ回しとシュールなギャグセンス、ストーリーの意外性、どれをとってもブツ刺さりまくりで最高でした。4巻完結したこのタイミングでぜひ読んでみてほしいです。

会社員 / 小野塚博之

「住みにごり」たかたけし

- サスペンスなのか？ギャグなのか？1話目から不穏な調子で話が進むのに、今の所決定的な事は何も起きていない漫画なのですが、読者にずっと緊張感を強いる空気感を出し続けるのが凄い作品です。一見普通そうな人でも「濁り」は必ずある、と言わんばかりの描写。また、登場人物にヤバいのが2人いるのですが、よくもまああんなに濁った目を描けるなと思います。作者の前作「契れないひと」はギャグ漫画でしたが、今作を読んでその才能の振幅に驚きました。今年一番気になる漫画です。

会社員 / ターシ

- 常に不穏な空気が漂っていて絶対良くないことが起きるのはわかっているのになかなか決定的なことが起きない展開にハラハラします。早く続きが読みたいのに決定的なことが起きたら終わってしまうかと思うともう少しこの雰囲気に関わりたい気持ちにもなります。

フリーランス / 玉澤綾子

- 血がつながっているから「家族」。嫌なのに読んで、読んだあとに嫌な気持ちになり、結局また読んでいる。ずっと不協和音。未読の方にもぜひぜひお裾分けです。

㈱リプロプラス商品部 / 池本美和

- 読みながら、なんかこの絵柄に見覚えがあると思いつつ、作者検索することもなく、思い出すのにまかせていたら、途中で『契れない人』のあの犬が脳内に出てきた。そう、あの強烈な印象を残すマンガの作者だ。そんな人が家庭内のゴタゴタを描くとすれば、これは期待せざるを得ない。死体の損壊具合と関係の親密さは比例すると聞いたことがある。つまり、めった刺しなどは親子間で起きることが多いらしい。1巻の時点でこのマンガはやばいことが起きるんじゃないかと思ってたけど、2巻までそんなこともなく済んでしまった。いつ起きるのかと思いつつ読み進めてしまう。もう作者の術中にどっぷり浸かってます。

鳥取県立図書館 / 野間勤

「生活保護特区を出よ」まどめクレテック

- 装丁に惹かれて読んでみたところ衝撃でした。この日常生活を送るなかで、基本的に見ないことにしている心のあ
る部分、感じないことにしている気持ちに、そっと触れてくるような作品。それはたぶん、いま私たちが、この社
会のなかで生きていかなければならないことへの哀しみと怒りなのでしょう。

会社員 / 末永龍介

「税金で買った本」ずいの、系山岡

- ちょっとやんちゃなアルバイト男子高校生からみた、図書館の舞台裏マンガです。図書館にちょっと関わった者か
らしても、とてもリアル。そして現場の不満や葛藤も丁寧に描かれています。専門家なのに非正規雇用なのは「み
んな図書館の仕事だ好きだからです」とか、ドキッとします。これって、やりがい搾 (ry 本好きで図書館好きな人
は多いはず。ぜひその舞台裏を覗いてみてください！

弁護士 / 三葛 敦志

- 巻を重ねるごとにレベルが上がっているヤンキーくんの図書館お仕事漫画。自分は非正規図書館勤務経験者ですが、
あるあるのリアルな日常や非正規職員の待遇など、現在の図書館について真摯に向き合っていて、図書館愛をひし
ひしと感ずります。ヤンキーである石平少年の純粋な知的好奇心で物語が動いていくのもポイント。好奇心旺盛でワ
クワクと楽しそうに調べ事をする石平少年がお茶目で、読後はハッピーな気持ちになれます。個人的に白井さんが
とても好き。

出版社営業 / 佐々木つむぎ

- 書店と図書館。客や利用者にとっては「読みたい本に巡り会える」という意味では大差ない。違いと言えば「(所
有するために) 買う」と「(純粋に読むためだけに) 借りる」ことくらい……と思ったら運営側は大違い。民間の
営利企業の現場である書店で働くのも大変だけど、「税金」で買った本を貸し出す図書館の職員はさらなる制約に
さらされる。公金で買った市民の財産を管理・運用する細かな労苦といったら僕のような民間人 (特にフリーラン
サー) には想像もつかない。このマンガにはそうした図書館員の日常が描かれている。未知なる図書館の仕組みや
制度を覗き見するような楽しみもあるが、何よりこのマンガに登場する人物の根底にある本への愛情や知識欲に触
れると心が満ちる。それは僕ら自身がいい本に触れたときの喜びに似ている。既刊 5 巻以下続刊。

ライター／編集者 (馬場企画) / 松浦達也

- 市立図書館の蘊蓄と内情を扱う「お仕事漫画」だが、素材の訴求力にキャラクターの味が加わって魅力が増した。
改めて推したいタイトルの一つ。

書評家 / 福井健太

- ある出来事をきっかけに図書館で働くことになったヤンキー君の目線を通して、どんな人がどんな思いで来館して
いるのかや、図書館にはどんな仕事があるのかを学べる作品です。ただ単にこんな仕事があります、と説明するの
ではなく来館者たちの人生ドラマも上手く絡めてあり、読み応えあります。話には聞いていましたが、図書館で働
くって大変なんですね…。

会社員 / 畑中 瀬路奈

「セクシー田中さん」芦原妃名子

- 芦原先生は、砂時計の頃からずっと変わらず、人間の少し薄暗いマイナスな部分をそっと汲み取って、少しずつ少
しずつ昇華させて下さります。主人公の朱里 (あかり) が田中さんと出会って、ファンになり奔走する姿は、なか
なかの強火担ぶりで見ている感じが良いです。キャラクター一人ひとりが良い人であり、嫌な人でもあり、不器
用で欠けていて、とても人間らしい。皆誰かを羨ましいと思って、自分の嫌いな部分があって、それでも自分は自
分だから、抱えて生きていけないといけない。ふとした瞬間に、自分なんてとってしまうことがある人に読んで
欲しいです。ほんの少しだけ強くなれる漫画です。

会社員 / 堀尾素子

「セシルの女王」こざき亜衣

■ 昨年えらくツポにはまった歴史劇。英女王エリザベス1世の宰相ウィリアム・セシルが主人公だが、目下のヒロインはエリザベスでなく、彼女の母アン・ブーリン。夫ヘンリー8世が前王妃を離縁するきっかけとなり、王宮にドロドロの嵐を起こすアンが実は可憐な女性で、ただ一人のナイトがセシル少年という設定に燃える。自分の死を悟ったアンが幼いエリザベスに「ウィリアム・セシルを待つよ」と言い聞かせるシーンには泣ける。英国国教会ができたのは、ヘンリー8世の離婚をローマ・カトリック教会が認めなかったから。つまり「男の世継ぎ」が生まれないことが根本理由だった。そんな単純だけ？と思ったが、本当にそうらしい。これが巡りめぐって後にアメリカ独立に至ったことを思えば、アン・ブーリンこそ世界史を動かしたヒロインと言えないこともない。このように、複雑な西洋史をわかりやすく解きほぐしてくれることも魅力。よしながふみの「大奥」にハマった人はぜひ。女王となったエリザベスは生涯独身で、ウィリアムを「私の精霊」と呼んだという。そのシーンをこざき亜衣のペンで読みたい。

読売新聞文化部編集委員 / 石田 汗太

「戦奏教室」空もずく、十森ひごろ

■ 音で兵団を指揮する異能のラッパ手の物語。空中に光で描かれる音の表現が斬新！ユニークな世界設定、アクの強い仲間たち、謎の多いストーリーと楽しみな要素が盛りだくさん。演奏家として生きたいという主人公の願いも叶ってほしい反面、異能を活かした彼の活躍にはワクワクが止まりません。

Tokyo Otaku Mode / モリサワタケシ

■ 1巻のどんでん返しにやられ、2巻で集まった面々の能力を活用するアイデアに膝を打った！スケールの大きな物語を感じさせてくれるワクワク。

往来堂書店 / 往来堂書店・三木雄太

「1978年のまんが虫」細野不二彦

■ 一言でいえば、細野不二彦先生の自伝マンガ。同じような時代を扱った自伝マンガといえば、アオイホノオもある。2つの作品は少し時代がズレるけど、一緒に読むとこの時代がより立体的になる。奥行きが豊かになり、解像度が増す。アオイホノオのギャグっぽさとはちがいで、父親に反発しつつ、何者にもなれない自分の不甲斐なさを痛感しているこちらの主人公は悲壮感が漂う。この時代を知れば知るほど高橋留美子先生の存在の大きさを思い知らされる。高橋留美子先生には、マンガとはいわないまでも、口述筆記でもいいので、ぜひ回顧録を出していただきたい。そうすることでこの時代の大きなピースがはまる気がする。

鳥取県立図書館 / 野間勤

■ 巨匠のデビュー当時を綴ったノンフィクション。慶応大学のSFサークルやスタジオぬえの人物史は、島本和彦『アオイホノオ』(大阪芸大と後のガイナックス)に繋がる「関東バージョン」ともいえる。悩める青年のドキュメンタリーにして、サブカルチャーの史料としても意義深い一冊だ。

書評家 / 福井健太

■ 細野不二彦先生のデビューまでの道のり。前半は青春譚である。慶應義塾高等学校、慶應義塾大学卒といういわゆるピカピカの内部生の中で、趣味にすべてを投じた男子たちの青春と、そして決して順調ではなかった道のりが描かれている。78年の作品だが、いまの大学生のある一部層にも、こういったひとたちは確実に存在する。SF全盛期だった、「ぬえ」で働く当時の若者たちの思いや熱意も世代じゃなくても面白い。なぜ日本でガンダムが生まれ、そしていまでもSF作品が愛されているのか。その源泉のようなものを感じる。

クラスター株式会社 広報 / 西尾美里

「戦争は女の顔をしていない」小梅けいと、スヴェトラナ・アレクシエーヴィチ

■ 戦車兵、衛生兵、食事係など、ソ連の対独戦に従軍した女性たちの物語。雪と泥、血が入り混じった地面を、年輪もいかぬ女の子が傷病兵のために這いずり回った結果、1日が終わるとそのズボンに固まって自立するほどだったというエピソードのように、断片的ながら強烈なリアリティをもっている。現代の日常モノのような優しい作画と相まって、戦場の女性たちの日常として(しかし現代の我々からすればとんでもないもの)、切り取ることに成功している。

弁護士 / 三村 量一

■ ノーベル文学賞作家スヴェトラナ・アレクシエーヴィッチによる、戦争の悲惨さ・それが日常となるむごさを、独ソ戦へ従軍した女性への丹念な取材から描き上げた同名の書籍のマンガ化です。今年の、ソ連の後継であるロシアによるウクライナ侵攻という驚天動地に、真っ先にこのマンガが浮かびました。進軍中に生理の血が固まって肌を傷つけるとか、井戸に放り込まれる子どもの子供の叫び声とか、勇ましい戦記物にはありえない生々しい描写は、その悲惨さを知っているはずなのに戦争を繰り返す人類の愚かさにも強く警鐘を鳴らします。とにかく多くの方に読んでいただきたい作品です。

弁護士 / 三葛 敦志

「センチメンタル無反応 真造圭伍短編集」真造圭伍

■ 八つの話が収録されている。たぶん、最初は「悪性リンパ腫で入院した時のこと」が話題になって、それに目がいったけど、ウクライナ戦争を考えているときは「居酒屋内戦争」がどうしても気になってしまう。東京ヒゴロを読めば、「松本大洋になりたかったよ」を思い出すし、それぞれの話に感情の違った部分を刺激される。どれも違ってどれもいいなんてとても陳腐な言い回しだけど、なかなかそういう短編集ってないと思うんだ。

鳥取県立図書館 / 野間勤

「先輩はおとこのこ」ぼむ

■ 咲ちゃんが初めて好きになった人は女の子の先輩でした。でも実は先輩は男の娘でした！？こんな1話で心掴まれる。そこに、先輩の幼馴染りゅーじが登場し、りゅーじの生徒手帳には先輩の写真が！？可愛い恋の行方にきゃっきゃしていたら、明るく前向きな咲ちゃんにも、男の娘の先輩まことにも、優しいりゅーじにもそれぞれ抱えているものがあり…。3人がもう本当に本当に愛おしく、幸せを願いながら読んでいました。全100話で完結していて、LINEマンガで全話読めます。さらに単行本は今現在4巻まで出ています。個人的には縦読みマンガですし、その縦読みの構図や表現が素晴らしいので、アプリで単話読みをおすすめします。単行本は表紙が超絶可愛いですし、描き下ろしもあるから読み終わるとほしくなると思うのでそちらもぜひ！男の娘っていいですよね！！

声優 / 富岡美沙子

「双生遊戯」岡田淳司

■ こういうぶっとんだヤクザ漫画が読みたかったんだ～～！と思わず心の中で叫んでしまった。美麗なタッチのイラストと、クセの強い変態キャラたちのギャップも楽しい。数巻で終わってしまったのが残念。もうちょっと読みたかったです。

ブログ「マンガ食堂」管理人 / 梅本ゆうこ

「宙に参る」肋骨凹介

■ 宇宙旅行が一般的なものになり、AIが人間のパートナーとして、幸福で人間性に満ちた世界を人間と一緒に作っている世界。現実の世界の情報から描きだされる未来は悲観的なものになりがちですが、このマンガで描かれているのは技術が幸福をもたらした理想的な世界の一つの形です。未来はイメージしたことから作られるので、その人の嘘っぱちだとか、論理的に成り立たないといった考えはいったん置いておいて（このマンガでは結構そういう設定もちゃんと考えられてたりします。）、たとえ空想でも、技術が描く理想的世界を見せるのは幸せな未来を創るためにとても大切なことだと思います。このマンガは未来を創るための夢見る力を与えてくれるように思います。若い人、未来を作る技を持った人、幸せな未来を描きたい人におすすめのマンガです。

会社員 / 廣瀬 公将

『大蛇に嫁いだ娘』フクアシクモ

■ 村を守る山の主である大蛇に、供物として捧げられたミヨ。その恐ろしい容姿とは裏腹な大蛇様のスパダリぶりに、次第に心惹かれていく。異種間ではあるが、お互いの過去を乗り越え、徐々に夫婦として形を成していく。途中までラブコメだと思って読んでいたんだけど、これはどの方向に向かっていくのだろう。楽しみ。それにしても、大蛇様の解決の仕方、パワープレイすぎる。擬人化美男子異種恋愛ものを想像して読むと、少し驚いてしまうかも知れない。

主婦 / 赤坂真実

「太陽と月の鋼」松浦だるま

■ 侍が巻き込まれる陰陽師漫画で一人の男と二人の女。過去、現在、未来が交錯する、面白いです

tetote 代表 / 力丸 真

「太陽よりも眩しい星」河原和音

■ 現在、絶賛連載中の本作は、きらめく初恋物語ですが、恋のエピソードにことごとくフードが絡む傑作フードストーリーでもあります。

菓子研究家 / 福田里香

「タヌキツネのゴン」メガサワラ

■ 「優しい世界」とは言うけれど、世界はそんなに優しいわけではない。それでも傷つかずにいられるのは、(守ってくれる) 優しい (人がいる) 世界だからなんだなと思う。ちょっぴりヌケてるけれど、家族に愛されて育ったとわかる可愛さです。

八重洲ブックセンター宇都宮パセオ店 / 山本さとみ

「多聞くん今どっち!？」師走ゆき

■ アイドル作品が多い中、この作品はシンデレラストーリーでも嫌いだったあの人が実はいい人で。とかでもなく、ただただ神と崇めていた人が、めっちゃネガティブな人として現れネガティブな人に「私の神はこうだから」と滔々と語ったり、強制したり、推しているからわかる良さを説明してヤル気を出させたり、押して推して兎に角グイグイいく作品です。その中で、メンバーがいるアイドルだからこそ訪れるセンターをかけたの闘争の最後に、漫画内の多聞くんファンとハイタッチしたいくらい多聞くんファンになってしまいます。他のメンバーも良くて、最高に楽しく読める作品です。

アニメイト / 鈴木寛子

■ 推しは推せるときに推せとはよく言ったもので・・・推しと出会ってしまったら・・・しかも普段とは真逆の陰キャラ?! ジメ原さんがとにかく愛おしい。

コミック担当 / 実松由夏

「ダンダダン」龍幸伸

■ 週刊ペースの更新で、毎話、このとてつもないクオリティで描きつづけるの? と作者を心配になってしまうほどの熱量。恋愛、ギャグ、バトル、オカルト、SF とてんこ盛りで読者にその先を予測させないストーリー展開も絵だけではない構成力を感じる。

デザイナー / 高永貞光

■ 都市伝説の怪異、UFO、宇宙人、怪獣、巨大ロボ…次は何が起こるのか、なにが出てくるのかワクワクします。モモちゃんとオカルンのラブも気になるし、仲間もふえるし、アクションも凄いし続きが楽しみ!

主婦 / 紺野 泉

■ 恋もオカルトもギャグもバトルも全部盛り。特盛。これだけの要素をこの画力で毎週描ききる作者様は超人です。ホラーなんでしょ? オカルトなんですよ? 怖いのは・・・という先入観がある人ほどすっかりハマりそうな作品。登場キャラクターが決して登場限りの使い捨てではないのが作品への愛とこだわりを感じます。

図案家 / 橋本寛子

■ ある時は格闘漫画。またある時はオカルト漫画。そうかと思えば、甘酸っぱい恋愛モノに……。「どうしたら読者が面白いと感じてくれるか」に全力な作品だと思います。絵のタッチと構図も素晴らしく、読みやすさと迫力が作品の魅力の後押ししているのも◎!

会社員 / もちづき かずよし

■ オカルトバトル漫画。ギャグとシリアスの割合が自分好み。話の元ネタというかアイデアが意外なところにあるのか、微妙に自分の予想を+な方向に外してくれて楽しいです。

MIGIMIMI SLEEP TIGHT / 涼平

■ 前回は推したが、やっぱりこのマンガはすごい。ジャンプの3種の流儀をきちんと踏まえつつ、この圧倒的なインテリジェンス。子供がオカルトに惹かれるのは、人間に疎まれたり虐げられたりする霊や怪異の存在が自身の哀しさ（＝大人に抑圧される、力のない存在であること）に通じる、と子供たちが無意識に感じているからだと思っている者ですが、ダンダダンというマンガからはそんな哀しみをいつも忘れずに作劇しているんだろうなあということが伝わってくる。だからギャグに爆笑しながらも読んでいてどこか胸がぎゅっと切ない。一方で分断、格差といった現実世界のトホホのホな状況を戯画的に笑いのめす視点も併せ持つ。敵の雑魚キャラを「ギグワーカー」と名付けて嗤わせる批評性……。徹底して現実主義（＝いましかない）な人種であるギャルと、オカルト好きで現実逃避的なオタクという主人公2人の組み合わせは、物語を強烈にドライブする推進力。掛け合いも含めておもしろくならないわけがない。

日本経済新聞記者 / 天野賢一

「ダンプ・ザ・ヒール」原秀則、ダンプ松本、平塚 雅人

■ 必死で見て、興奮したあの時代の舞台裏。青春漫画の巨匠原秀則先生だからこそ描ける緩急ある「熱血」。

本と文具ツモリ 西部店 / 津守晋祐

「チ。—地球の運動について—」魚豊

■ ジョジョが正義や勇気の側面の人間讃歌なら、このマンガは知恵の側面からの人間讃歌だと思います。作中で、「?」と、感じること”、” 知が人や社会の役に立たなければいけないなんて発想はクソだ” というセリフがでてくるのですが、このマンガのすべてがそこにすべて詰まっていると思います。「?」と思うことは人間であることのはじまりだと思います。それを面白がり探求する姿勢が受け継いでいくことは人間だけができることです。理屈ではなく好奇心に従って行動する姿こそ人間らしいし、最もその人らしい姿だと思います。このマンガを読んで、自分が純粹に「?」と思うことを忘れることは自分らしさを失うことと同義だと思いました。情報の渦に飲み込まれて自分の「?」を見失ってしまっている人におすすめのマンガです。

会社員 / 廣瀬 公将

「ちいかわ」ナガノ

■ 1巻の冒頭は、ちいかわのイラストに添えて「こういう風になってくらしたい」と題したイラストポエムから始まります。15ページから「ちいかわの日々」と題したコママンガが始まりますが、最初はピザまんやかためのプリン、くりまんじゅう、ホットケーキなどの誰もが知る食べ物をただ食べるだけのほのぼのの展開が続くので、癒やし系料理マンガと思いきや、しかし29ページの「キメラ」と題したマンガではちいかわと同族の外見に鋭い爪とトカゲの尾を持った動物に唐突に襲われ徐々に怖い世界観が立ち現れる。タバスコなど現実の商品名が唐突に登場するのもフード的にかわいくて恐い。

菓子研究者 / 福田里香

「超人X」石田スイ

■ 相変わらずぐちゃぐちゃしてて好きです。描写の技巧もたまらないですが、異能バトルがすきな私にはたまらない作品です。

広告会社 プランナー / 平沼良章

「追放された重騎士はゲーム知識で無双する」猫子、武六甲理衣、じゃいあん

■ いわゆるなるう系というやつで、原作は”小説家になろう”というサイトに挙げられているものです。転生ものに明るくないんですが、”チートな能力を身につけて無双する”そんなイメージが少しありました。ただこの漫画は主人公が生前やり込んだゲームの世界に転生するんですが、やりこんだ奴にしか分からないゲームの知識で攻略していくところが、ブラボーに面白いです。戦って得たポイントをどのスキルに振り込んでいくのか?など、最近のオンラインゲームっぽい描写がとても細かく描かれている所も、読んでいてブラボーに面白いです。転生ものってこんなに面白いんだと気付かせてくれた作品で、これおかげで他の転生ものも読み出しました。この作品、受け流せません。

吉本興業 / ムーディ勝山

「作りたい女と食べたい女」ゆざきさかおみ

■ グルメ漫画が好きなのもので、その類は見かけるとつい手にとって読んでしまいます。この漫画も最初はそんな感じで購入しました。主人公は料理を作るのが好きな野本さん。SNS 映えする料理を作っては投稿して満足しているが、実は本当に作りたいのは“デカ盛りグルメ”！！そんな欲を満たしてくれるのが同じマンションの隣の隣に住む春日さん。ひよんな事から仲良くなり、野本さんが作りたかったどんなデカ盛りもペロリと平らげてくれる春日さん。この需要と供給コンビが織りなす、料理を作る、料理を食べる、この行程が見てて超気持ちいい。単純なグルメ作品としても良作なんですけど、この漫画はそこに GL という要素が入ってくるのです。このさじ加減が、とても絶妙なんです。僕は一巻を読んだ時はその要素に気付かず、2巻でその要素が少しずつ入ってきて、そこで初めて気付きました。BL に比べると今まであまり描かれてこなかった GL。そこにチャレンジしている事がまず素晴らしいので、GL に対しての知識があまりない読者に対して凄く優しいスピードで教えてくれているんです。そこに感動すら覚えます。最近発売された 3 巻はよりそこについて掘り下げるシーンがあります。繊細なテーマを扱う際にはその物語の最初に「今回のお話には以下の表現が含まれます」と、読む前に優しく教えてくれます。作者と編集がこの作品を大切に大事にしているのが伝わってくるようで、本当に良い作品に出会えたと思えます。この作品は、、受け流せません！

吉本興業 / ムーティ勝山

■ 「きのう何食べた？」女性版と思っていたが、きのう～は初めからカップルになっているのに対し、こちらは「私は女性が好きかも」と気づくところからスタート。2 人の関係性だけでなく、現代日本社会の女性に対する抑圧を浮かび上がらせ、それでも彼女たちが自分の意志のもとに生きようと決意し、方法を模索する姿を描く。めっちゃパンクな、戦いの物語と思います。

角川文庫編集部部長 / 関口靖彦

■ 去年推薦文を書いた時には「恋愛感情抜きに」と記したのだけれど恋も出てくる物語でした。必ずしも恋愛でなくてもいいのかなと思うけれど、周りにある「普通」という型に馴染めない自分や、自分を否定する周りの環境ありきでのそれぞれの自己再生、自己肯定なんだなど。他の登場人物も増えてきてまたそれぞれに人生があって、食べること、生きることが描かれている作品。

元書店員 / 内野智未

■ 人生でどこか窮屈に生きている女性二人が一緒に過ごしていく上で優しく穏やかに生きやすくなっていく様子に、読者も読んでいて救われる優しい物語。

ヘアメイク / 北原由梨

■ よくある女の子と女の子が楽しく料理をしておいしいものを食べる漫画かと思って読み始めたので、とても沢山のことに注意を払って描かれた漫画であることに驚きました。作中に出てくる、彼女たちを取り巻く煩わしく無神経な言葉たちの多くは残念ながらかなり私自身も経験したことがあるもので、読みながら何度も「わかる～！！」と頷いてしまいました。だからこそ純粋に、「なりたい形」「いたい場所」を選び取る彼女たちの姿に惹かれる、そんな作品でした。

会社員 / 津田 圭

■ 食欲を刺激される作品。性別がどうこうというより、人間の根本的な欲求を底に、人間関係などが折り重なって表現されている。間口は広く底も深い。

MIGIMIMI SLEEP TIGHT / 涼平

「DYS CASCADE」中川海二

■ 前作の ROUTE END と同様に先が気になる度がとても高い

会社員 / 齋藤隼

「This コミュニケーション」六内円栄

- このところ特に異常に面白い。条件が複雑化してきた分、尚更スカッとする瞬間があるようになった。主人公デルウハの揺るがない鬼畜っぷりが類を見ない個性になっていると思う。

1616屋 / 杉本 善徳

「出禁のモグラ」江口夏実

- 不気味さと笑いとが交互に押し寄せてくる。「幽霊より怖いのは生きている人間」なオチはよくあるけれど、人間と幽霊、どちらも怖いし、どちらもたちが悪い。なんなら、タチの悪い人間だった奴の幽霊が一番タチが悪いわ。

八重洲ブックセンター宇都宮パセオ店 / 山本さとみ

「天狗の台所」田中相

- 東京のど真ん中での、自給自足生活のお話し。きっと昭和時代は、ご近所さん総出で〇〇さんちの稲刈りいこう。みたいな感じだったのだろうなあと懐かしさも含んだお話しです。 私も大人になってから友人のお誘いで、東京の郊外でご近所さんが集まり朝からもち米から蒸して、石臼で挽いて搗いて餅をつくり、出来立てほくほくを餡子や黄な粉、大根おろしを付けて食べつつ、手伝った1所帯用に丸餅、四角い餅、切らずにドカット。などして分けて夕方解散する。という経験が思い出されました。幸せな一日でした。まもなく2巻が発売されるので、また郷愁をそそられるのかと思うと大変楽しみです。

アニメイト / 鈴木寛子

「東京ヒゴロ」松本大洋

- 松本大洋さんの漫画はかねてより大好きでずっと追ってきました。その中でも最新作「東京ヒゴロ」は個人的に最高傑作と思っています。「作品」を巡る数々の感情、覚悟、哲学、人生、人間。そう、あまりにも心の真ん中に迫る勢いで、人間が描かれています。僕はただただ胸が熱くなり、涙を流すに至りました。数々の名作を書き上げてこられた松本大洋さんが、ここに来て描くは「漫画の漫画」。

音楽家 閃き堂店主 / 谷澤智文

- 松本大洋がこんなふつうの漫画を描いてくれるというぜいたく。

ときどきライター / 縣丈弘

- 漫画愛について考えさせられる作品です。

本と文具ツモリ 西部店 / 津守晋祐

- マンガ家、編集者、マンガにまつわる人間模様がぜんぶ描かれてある。マンガ家も人間であり、人間は弱さを抱えながら進んでいくものだなと思ひ知らされる。

マンガ読み / サイトウマサトク

- ここにきて松本大洋さんの最高傑作が描かれている気がします。愛が詰まっていて、それぞれのキャラクターのエピソードが泣けてしまう…

bar 図書室店主 / 岡部愛

- 擦り切れながら、失いながら、それでも決して消えない何かを見つけようと生きる人たちの、祈りのようなマンガ。

Tokyo Otaku Mode / モリサワタケシ

「図書館の大魔術師」泉光

- 緻密な描写でしっかり描かれた世界設定で、主人公やその周りのひたむきさに素直に共感させてくれる、ファンタジー大作。年一回の刊行ペースで現在6巻と、がっつり楽しめつつ手に取りやすいのでぜひ多くの人に読んでほしい作品です。こんなに面白くてよくできてる作品なのに、まだ未読な人も多い印象なので、ぜひノミネートしてほしい…！！

ヘリックス・クリエイティブ(株) WEBデザイナー / 河本智芳

■ 話しの内容的に老若男女問わない作品美しい絵、そして精緻な設定。評価されるべき作品

tetote 代表 / カ丸 真

「DOG SIGNAL」みやうち沙矢

■ いつも楽しく読んでいます。多くの人が犬を飼っている世の中で多種多様な犬に合わせた悩みを丁寧に見ていく様は作者さんの「犬愛」に溢れています。これからも推していきます！

フリーランス / 玉澤綾子

「トマトイプーのリコピン」大石浩二

■ 現代のギャグマンガでトップだと個人的に思っています。シュールから王道ド直球から社会風刺に至るまでギャグと言われる全てのジャンルを網羅し、破壊し構築するチャレンジ精神たるや凄い一言です。たまに自分の常識を考え直す機会を与えてくれるような、金言が飛び出すのもこの漫画の良いところ。ここまで褒めちぎっていますが、内容はしょうもないです。ギャグですから。

バーテンダー / 村井真也

「虎鷓 とらつぐみ -TSUGUMI PROJECT-」ippatu

■ すっかり荒廃し、人が踏み入ることができなくなってしまった旧日本を舞台とした SF 物語。荒廃後、独自の生態系が生まれた世界などを緻密に描いている。未だ全容の見えぬストーリー展開でとにかく先が気になります。主人公の片翼である、鳥足のつぐみちゃんがとにかくかわいい。

デザイナー / 高永貞光

「虎は龍をまだ喰べない。」一七八ハチ

■ 虎と竜というテーマがまず気になるが、美人と美少年（でも年齢は重ねている）というペアが刺さる。私には刺さった。しかも竜は何らかのトラウマか孤独を感じている。虎は美しくて強くて、でも単純な生き物のように描かれていて、そのまったくことなるふたつの心が織りなすこれもまた独特な感性を感じ取れる作品。虎の愛らしさと「いつか食べるかもしれない」危うさ。一緒にいる理由がなくても一緒にいるふたつの存在。エモいなあ。どことなくもののけ姫の洞窟で、アシタカとサンが目覚めたときのあの夜明けのような感覚を、少ししめっぽいようなあの感覚を全編通して受け取ることが出来た。

クラスター株式会社 広報 / 西尾美里

「トリリオンゲーム」池上遼一、稲垣理一郎

■ 読んでいて爽快な作品

会社員 / 齋藤隼

■ 素晴らしいレジェンドタグによる成り上がりストーリー！本当に楽しく読める漫画です！毎回面白く美しく読みやすいのは抜きん出ている。流石としか良いようがないです。

主婦 / 岸本しのぶ

「鍋に弾丸を受けながら」森山慎、青木潤太郎

■ テレビで高級〇〇料理を食べる番組って結構あるけども、正直ココロのどこかで情性で見てません？私はそうです。だって自分が食べるわけじゃないもん。芸能人が美味しそうに食べる高い美味しい飯って遠い世界の話よね。でも、この漫画に出てくる飯は距離的には遠いけど、無性に食べたくそそられる。どんなにヤバい環境でもテレビの中の高い飯より地続きで共感できる美味そうな飯がここにあります。これ見てエルビスサンドを友達と作って食べた思い出

鳥取県高等学校教諭 / 佐川由加理

- グルメというよりコアな海外旅行マンガになっていて、旅先で出会ったひととの会話から計画も予想もしなかった出来事が始まっていくノリにワクワク感がとまりません。バックパッカー旅行が好きな（好きだった）ひとにはたまらないでしょう。原作者の人柄というか個性というか、旅先でのひととの関わり方というのか、そこがこのマンガの魅力の核だと感じます。カワイイけど眠つきがやばそうに見える美少女たちの作画も内容にマッチしすぎていました。

会社員 / 末永龍介

- ファクトと創作とストーリーのためのキャラクターという記号を絶妙な火加減で煮込むことで、本当に存在するのかわからないがしかしもう実在してなくてもかまわないと思えるほど魅力的な「味」が読者の前に現われるすごい作品。「味集中システム」で自席の周囲が全く見えないラーメン店「一蘭」のように、さまざまなことがうまく伏せられることで、われわれは目の前のドンブリに集中できているのではないだろうか…

会社員 / やのこうじ

「2年1組 うちのクラスの女子がヤバイ」 衿沢世衣子

- 思春期限定の「無用な超能力」を持つ少女たちの青春群像劇。ナンセンスな異能を日常的な心情に絡める巧さがこの著者らしい。シリーズ前作を合本にした『1年1組うちのクラスの女子がヤバイ』もお薦めだ。

書評家 / 福井健太

「ニューノーマル」 相原瑛人

- パッと見ると「そりゃこういう作品がバンバン生まれてくるだろうな?」と思ってしまう感じが漂いまくっているけれど、読んでいるうちに、たった1つのファクターで唇というものが特別なものに見えてきて驚いた。

1616屋 / 杉本 善徳

「の、ような。」 麻生海

- ハートフルな家族物語といえばそれまでなのだけど、急に両親を亡くした兄妹と、彼らを引き取って、少しずつ互いに歩み寄って成長していくお話が、とても心優しく暖かく、時に切なくて、おすすめです。

女優・ジェネラリスト / 大倉照結

「ハイパーインフレーション」 住吉九

- タイトルのとおり、物語が進むにつれてひたすらインフレーションしていく展開が奇跡的に成立していて、これほどひたすらにアクセルを踏み続けていてどうしてなお面白さのテンションを保っていられるのかが理解しがたい異形の傑作。癖のあり過ぎる登場人物たちもたいへんに魅力的で、ギャグの水準はマンガ史に刻まれるレベル。エンターテインメントとはこういうものだ、を地でやっています。

会社員 / 末永龍介

- 読んでいくうちに贗札を軸にスリリングな経済バトルに夢中になって、これはスゴイ漫画だな、と。経済力と政治力と正義と道徳観が入り混じっているため、一筋縄ではいかなく、何度か読み返してしまいます。それだけ奥が深い作品です。

Books アイ蒲生エキナカ店 / 野口忠義

「ハガネとわかば」 キザキ、渡辺こよ

- サイボーグ・義体化技術が普及した世界で暮らす夫婦の日常を描いた作品。今までサイバーパンク的な世界は攻殻機動隊からの流れでディストピア・暴力・電子ドラッグ!的な殺伐としたアクションがメインの潮流で、稀に「サイバネ飯」のような変化球もあるにはあるが、どうしても陰惨な話に偏りがち。そんなサイバネ社会の中で穏やかに暮らすラブラブな新婚夫婦にフォーカスするという作品は非常に目新しいのではなかろうかと。それなりに物騒な世界であることも提示されているもののサイバーパンクは末期衰れが状態化してるジャンル内で一服の清涼剤たりえる作品。

住職・ライター / 蟬丸 P

「裸一貫！つづ井さん」つづ井

- 爆笑に次ぐ爆笑！！ いわゆる腐女子の生活を、やってみなくちゃわからない現実感をもって描写している作品なのだが、知らないうちに我々が守ろうとしているものに、どんな意味があるのだろうか、そんなもの、イヤなことがあった時に、床で暴れまわって単に駄駄をこねる成人女性の自由さの前には、一ミリの価値もない！ と感じさせられる説得力が半端ない。読者の私は、「ごひいきは出来たの？」と訊く老婦人に「覚悟なさいね」と聞かれたシーンに、ふはははは、と笑っているだけなのだが、笑いの後に「あれ、これって…！」となんらかの深淵をのぞき込まされていたことに気がつく。

ニッポン放送アナウンサー / 吉田尚記

- みんなに面白さを布教して回りたいのに腐女子すぐ擬態するし徹底してるから周りに腐女子見当たらないから誰とも分かち合えない。面白いんだよオオオ！！月並みなセリフで恐縮だがさすがつづ井さん！おれたちにできない事を平然とやってのけるッそこにシビれる！あこがれるウ！というのが感想。自分の楽しいと思える報告に舵を切って楽しみ切るって最高の生き方だと思う。私もこう生きたい。きっとみんなが素敵だなと思うから支持されてるし、読んでる人みんな元気を貰ってると思う。まじで何し出すか分からないからな…ダンダダンかよ。情報が少なすぎる推しの架空の設定を語るとか更に架空設定を加えた夢小説書くとか本当にいったいどういうことなの…。

会社員 / 布施直人

「BADDUCKS」武田登竜門

- 全4巻、総900Pに及ぶ本作は作者のほぼ処女作のオリジナル長編。当初の同人誌版で読んだ時の衝撃は忘れられない。天才とは何処かに居るものだ、とあらためて実感したのである。

コミティア実行委員会会長 / 中村公彦

「花四段といっしょ」増村十七

- このコミックに記載されてる「"非"本格将棋コメディ！」。いや、どんなマンガだよ！！とツッコミたくなりながら読むと…まさしく、言い得て妙とはこの事です。ベースは将棋なんですが、強烈なキャラクターの描写が面白すぎるのです。

(株)エフ・ジェイエンターテインメントワークス / 阿部 大介

- 主人公の若手棋士、花つみれ四段が、クールでドライな見た目に反してとってもキュートで愛されキャラなのが可愛くてたまりません。天才肌を思わせつつ、雑念の内容がすごく凡人っぽいところに共感の嵐。花四段を取り巻く棋士や将棋会館の人たちも面白く、「茄子リカルド吾一」「踊（おどる）朝顔」など、登場人物の名前も個性的で楽しいです。

主婦 / 堀江千秋

- 内容はほんわかしてずっと読んでいられる棋士男子日常漫画です。自分が今まで読んだ将棋漫画は基本的にヒリヒリするような描写の多い漫画だったので新鮮でした。とにかく主人公の花四段のキャラいいのでずっと読みたい作品ですね。なんとというか、寝る前に読みたい、めぐりズムみたいな漫画だなと思います。

会社員 / ターシ

「はなものがたり」schwinn

- 長年連れ添った夫（モラハラ気味）を亡くしたばかりの主人公がある日、化粧品専門店を営む女性に出会い、惹かれ合う。友情なのか、恋心なのかよく分からない、でもそこには胸がキュッとする思いとときめきと華やきがある。のびのびと自由に生きていくことをそっと後押ししてくれる、励まされる一冊。

一般社団法人マリーゴールド / 島影真奈美

「ババンババンバンパイア」奥嶋ひろまさ

- 命を助けてくれた少年の家が銭湯で、そこで働くことになった吸血鬼・森蘭丸のお話です。ピュアな少年・李仁（りひと）に心を奪われ、血が一番美味しくなる18歳になるまで純血を保てるよう見守る日常が描かれています。初

恋に落ちる李仁、絶対に阻止したい森さん、家族や同級生、先輩、先生、さまざまなキャラクターを交えながら繰り広げられるテンポの良いお話が、自然と笑えてとても気持ち良いです。そして時折、私は一体何を見せられているんだろう…？というシーンが繰り広げられ、さらに笑います。BLという見方もありますが、個人的にはドタバタラブコメの方がじっくりきます。奥嶋先生の青年漫画的な絵柄のおかげで、誰にでもおすすめできる漫画です！

会社員 / 堀尾素子

「貼りまわれ！こいぬ」うかうか

■ 脱力系漫画。シールを貼る事でちょっとしたことが起こってなんやかんやあって皆ちょっと幸せになる。果てしなくゆるいアメリカを見てる気分。毎週の癒やしです。

鳥取県高等学校教諭 / 佐川由加理

「はるかりセット」野上武志

■ 売れっ子小説家の春河童先生が文筆仕事の合間にリフレッシュを兼ねて、散歩・銭湯・水族館・小旅行・館詰めなど自身を再起動するための息抜きを描いていく「小休止のススメ」的な作品。住職などをやっていると檀家さんを始めとしてネットを離れた界限の人達と接しますが、世の中のマジョリティたる「休みにになると持て余しちゃって…さりとて本を読むでも趣味があるでも無い」という人の多さに驚くことがあり、そういった人達にこそ進めたい作品。

住職・ライター / 蟬丸P

「パンがなければ焼けばいい」大井昌和

■ 素敵なおとぎ話。幸せな読後感に包まれる一冊です。90分で終わる映画のように、ちょっとした時間で読める単巻なのがまたいい！

COMIC ZIN 商業誌担当 / 塚本浩司

「東の森の魔女の庭」越田うめ

■ また見守りたい家族が出来てしまった。

オフィスオーガスタマネージャー / オフィスオーガスタ樋口健

「光と影」ひおん、RYU

■ 下女から身代わりで領主の妻になったエドナとその領主が互いに愛し合うようになる物語を軸に、実は二人はとも因縁のある関係だったという、何代にも渡る、ヒストリカルストーリー。伏線が伏線を呼び、途中で相関図が必要になりそうだけど、キャラクターが魅力的で一気に読んでいけるのでオススメ！

女優・ジェネラリスト / 大倉照結

「光の箱」衿沢世衣子

■ 現在2巻まで刊行中。生死を彷徨う人間が訪れるコンビニを舞台に様々な人間模様が描かれています。設定上毎回のっぴきならない状態の人間が来店するけど、さらっとした絵柄やセリフで読みごこちは重くなりすぎず絶妙な塩梅です。あとヤミネコが可愛い。

会社員 / 小野塚博之

「ひかるイン・ザ・ライト！」松田舞

■ 「才能」と「努力」と「開き直り」が、めっちゃくちゃビシッと決まったとき、人はアイドルになります。最初からラストまで一喜一憂しながら楽しませていただきました。これほんとに最高の「アイドルオーディション」漫画なので、みんな気づいてくれ～～～とずっと思っています。

株式会社プロプラス商品部 / 池本美和

「ビジャの女王」森秀樹

■ 墨攻の森秀樹先生が描く渾身の一作。迫力満点！大人の漫画読みにこそオススメ！

本と文具ツモリ 西部店 / 津守晋祐

「ヒソカニアサレ」きむ てみょん、古町

■ 去年始まったアワビ密猟の話です。まだまだ話は序盤なのですが、日本が抱える暗い闇についてをあまり漫画にされていない密猟という角度から描きだしてとても面白いです。希望を持たない若者、夢のない田舎、その根本に存在する社会としくみに絡め取られた弱者がどうやって生き残るのか。原作者の古町さんが以前書いていた「レモンエロウ」という漫画もとても面白かったので（尻切れ蜻蛉で終わってしまって残念でしたが）今回の作品で彼のホンイキを見せてもらいたいです！

OKAMOTO'S(SMA) / オカモトショウ

「ひとりでしにたい」カレー沢薫

■ 憧れていた独身貴族の伯母さんの「孤独死」をきっかけに、自分の老後がきになりはじめた主人公山口鳴海。35歳、ミドル・サーティー真っ盛り。そうミドサー。まだ若さを捨てきれないアラサーと、もう大人だっている諦念入りじまったアラフォーとのあいだに漂う世代。ここが分かれ目。弱り目たたり目、結婚するのかもしれないのか、子供もつのかもたないのか、自分のキャリアはこれでいいのか。言葉は辛辣だがなんだかいろいろ教えてくれる生意気な会社の後輩。すでに介護経験もある頼もしい同僚。熟年クライシスに直面しつつある両親。保険屋の元カレなどごく限られた登場人物なんだけど、濃ゆい応酬が展開されます。ちょいちょい恋愛要素はいつてくるので初心が紛れそうになったりして、ほんとにひとりで死ねるのか山口？！

教員 / 戸田穂

「日に流れて橋に行く」日高ショーコ

■ 日本橋の呉服屋から百貨店へ移行していく、時代の流れをとて華やかに、そしてそこで働く人たちを時に泥臭く描いている作品です。

女優・ジェネラリスト / 大倉照結

「ピノ：PINO」村上たかし

■ 「AIが心を手に入れるとどうなるか。」SFにはありふれたテーマかもしれませんが、その答えはどこにもありません。でも、これが答えであって欲しいと願ってしまう、そんな作品です。AI「ピノ」の健気な姿に落涙必至。心や愛情という、目に見えない曖昧なものについて改めて問われる作品です。

伊吉書院 類家店 / 中村深雪

「秘密のお姉さん養成ノート」トフ子

■ 前作「さわらせてっ！あみかさん」に続き、なぜにここまで俺の性癖をわかっているんだ！と思える、共感の嵐が鳴り響く、どフェチ漫画。これを読んでみんなもっと素直になればいいと思う（いくないw）

COMIC ZIN 商業誌担当 / 塚本浩司

■ カッコイイお姉さんになりたい主人公のやや歪んだ性癖が良いです。四コマの新作で注目しております。

ブックファースト新宿店 / 渋谷 孝

「ひらばのひと」久世番子

■ 自分が知らなかった世界を描いていて先が気になる作品です。

ブックファースト新宿店 / 渋谷 孝

「ひらやすみ」真造圭伍

- 新刊を手に入れると何度も読み返してしまいます。ヒロトくんには共感し、なつみちゃんの青春は眩しく。まったくゆるやかでありながら、ヒロトくんにもなつみちゃんにもそれぞれ微妙な恋の三角関係が発生して、しっかり気になります。また、巻が進んでもたびたび回想で出てくるばーちゃんの可愛さにきゅんとします。

主婦 / 堀江千秋

- 巻を重ねても、変わらぬ読み心地の良さ。身近にいそうなキャラクターたちが作り出す自然体の空気感。あちらこちらで少しずつ距離を縮めていく関係性にむずむず、ドキドキ。「みんな好きだなあ。全員幸せになって欲しいなあ。」と思いながら読むマンガ。

伊古書院 類家店 / 中村深雪

- ひらやすみは、読むと心が整うタイプのいい漫画です。所謂日常系の中でもクオリティが高く、キャラクター達の心の動きに無理のないリアルさがあるのが好きです。おばあちゃんがなによりキュート。

OKAMOTO'S(SMA) / オカモトショウ

- 阿佐ヶ谷という街を知っているだけに作品の雰囲気や登場人物に共感がもてる。

会社員 / 八重田幸子

- 疲れた自分へのご褒美！読めば癒されること間違いなし。そして、今年こそは

あゆみ BOOKS 仙台一番町店 店長 / 土屋修一

「ファッション!!」はるな檸檬

- いま一番怖いマンガ。去年も推したが、当初思っていたのと怖さの種類が変わってきているようで、そこにも凄みを感じる。人間の「それ」という怖さと狂気を、著者がたぶんものすごく冷静に計算して提示している。

ライター / 門倉紫麻

「ふあんちゃん」横山キムチ

- 鍵を何度も確認してしまう行為をはじめ、自分が「強迫性障害」かと考えてしまういろんな不安を笑いとユーモアで楽しませてくれる横山キムチワールド、もうたまりません。最高です！

Books アイ蒲生エキナカ店 / 野口忠義

「ブスなんて言わないで」とあるアラ子

- 見た目の呪いにもがき苦しむ女たちのアンチルッキズム×シスターフッドの物語。男女関係なくまさに今読んでもらいたい漫画。最後までどう描ききるかも見届けたい。

bar 図書室店主 / 岡部愛

- いわゆるルッキズムについて色々なご意見の多い今、こういう作品をぶっ込んでくることをまず称賛したい。そしてその主張がもつブレやダブルスタンダードなところや理解のすれ違いを、絶妙なテンポ感で描いてマンガとしてしっかりおもしろい。主人公も見た目だけでなく、ある意味で心の美しきさも、真面目すぎる性格ゆえ一周回って素直に笑えるので愛せてしまう。またブスに対する美人側も思いがあっての行動や葛藤が多く共感してしまう。とにかくキャラ設定が本当にうまい。コンプレックスが多い身としては胸を締め付けられるシーンもあるのだけど、まずはタイトルにビビらずエンタメとして読んでもらいたい。

公務員 / 宇田川結衣子

「ふつつかな悪女ではございますが ~雛宮蝶鼠とりかえ伝~」尾羊英、中村颯希、ゆき哉

- 病弱だった帝寵愛の女の子が、策略で城内で皆から嫌われている女の子と入れ替わります。大変嫌われている女の子なので、いきなり窮地に追い込まれますが、健康な体を手に入れた主人公は大変前向きに目の前の窮地に取り組んでいきます！努力型の気質の主人公が、「なるほど～」と思える方法で窮地を脱していく方法に、大変気持ち

いいのとミステリーも絡み、考えながら読み進めていけて大変楽しいです。

アニメイト / 鈴木寛子

「ぷにるはかわいいスライム」まえだくん

■ ぷにるはスライムだけど本当にかわいいです。かわいいは正義。

マンガ研究 / ライター / 会田洋

■ 「コロコロコミック」の名を冠した媒体に連載されながら、「美少女に変形できるスライムと、それにちょっとドギマギする思春期前後の男の子」というあまりに罪深い大発明をしてしまった作品です。スライムであるぷにるは、その時々に応じてお姉さんっぽい姿や、ギャルっぽい姿に変身していくわけですが、その「完全にわかってやってる」あざとさに反して、マンガそのものの読み口はハイテンポ&ハイテンション。まさに「コロコロコミック」流ギャグマンガの正統後継者と言える作風です。ギリギリな「邪」感と、誰もがクソガキに戻って笑えるギャグマンガとの奇跡のような配合バランスで成立したマンガです。

株式会社アニメイト / 岡部 真矢

■ コロコロコミックで子供向けなのは十分に分かってます。十分にわかってるのですが、こんなにもツボをつかれてしまったらもう好きにならざるを得ないんです……！ぷにる可愛いよ！

女優 / 齋藤明里

「ブラックナイトパレード」中村光

■ 久しぶりに中村光先生の作品を読んだらやはり面白かったー！合間に入ってくるおふざけに心癒されながら読みました！

カメラマン / 平沼久奈

「ブランクスペース」熊倉猷

■ とにかく不思議なお話で、熊倉先生のオリジナリティ溢れる才能に感動すら覚えます。最終巻ではいよいよドラマチックな展開にはなるものの、絵柄としてはかなり異質なものになっていてとても面白いです。そんな中でも登場人物の成長や友情がとても丁寧に描かれていて素晴らしい！

会社員 / 小野塚博之

■ 人間の思考が、物理的には存在しないものを作り出す。そしてその「存在しないもの」が、ひとの人生を揺り動かす。これって「物語」そのものではないか。人間が生きるために必要な想像力／創造力を、象徴的にマンガ化した傑作。

角川文庫編集部部長 / 関口靖彦

■ 藤子不二雄先生ではありませんが、例えるなら SF（すこし不思議）です。ありそうでなさそうな話なのに現実離れし過ぎていないところが、また次のページを読み進めたくなる魅力の1つなんです。

(株) エフ・ジェイエンターテインメントワークス / 阿部 大介

■ 2巻でヒヤヒヤしたけどきっちり終わって大満足。枠をうまくつかった"空白"の表現が好きです。余白ではなくあくまでも"空白"。漫画は余白を一番ステキに演出できるフォーマットだと思っているので、その転換にはしびれました。

ヘリックス・クリエイティブ(株) WEB デザイナー / 河本智芳

「ブランチライン」池辺葵

■ 4人の娘と母、5人の女性を日常を中心に描いた物語です。家族のお話であると共に、一人ひとりの独立した生活や仕事も描かれています。同じ家で育ったはずなのに、性格も考えもそれぞれ違う。普段は全く別の生活をしているのに、時々集まると不思議と慣れ親しんだ家族に戻る。自分自身も3姉妹ということもあり、読んでいて居心地の良さを感じました。池辺先生の繊細な絵と、優しい言葉選びが、物語全体の穏やかな空気を作っていて、静かな場所で一人でゆっくり読みたい漫画です。

会社員 / 堀尾素子

- branch line。鉄道の支線、分岐線という意味のタイトル。現在は離れて暮らす四姉妹。家族という系統樹から、枝分かれしていき、それぞれの人生を送りながら、母と息子＝甥っ子とを軸に、あらためて集う八淨寺家の姉妹たち。父は不在で、四姉妹も年齢によって父との距離感は大きく異なり、家族に対するイメージもそれぞれにあり、ときにぶつかることもあるけれども、それでも穏やかにお互いを思いやる。父の不在、母子の関係、そしてシスターフッドは、女性のマンガの大きなテーマになってきたけれど、またすばらしいマンガがそこに加わったなとしみじみと思えます。

教員 / 戸田穠

「プリンタニア・ニッポン」迷子

- 生体プリンターの出力ミスで生み出されたもっちりとした不思議な生命体『プリンタニア・ニッポン』との日常。やわらかもちもちのプリンタニアたちに全てのコマ毎ページ癒されます。序盤はゆるいSF日常譚だったが、徐々にその背景にあるディストピアの世界観も明らかになってきてSFとしても面白い作品です。とにかくプリンタニアたちがかわいいのでずっと見てたいです。

会社員 / 津田 圭

「ベイビーブルーパー」はるにわかえる

- 何も考えずにサクサク読めて、手数の多さがツボに入りました。おもしろい！

教師 / 持丸宏司

「平和の国の島崎へ」瀬下猛、濱田轟天

- 平和な国日本で、見た目はごく普通の男に見える島崎。しかし彼の過去は壮絶なものだった。それまでののほほんとした姿から一転、初めて見せた鋭い眼光に引き込まれました。

コミック担当 / 実松由夏

- テロリストに拉致され戦闘員として使役されていた彼が日本へ戻ってきた。こう書くのは簡単だが、日本へ馴染みゆく日常と垣間見える戦闘スキルを、鮮やかかつ自然に描いてしまう手腕が素晴らしい。不気味なカウントダウンとともに続きを楽しみにさせてくれる怪作。

めがねっ娘教団 大司教 / 田中海渡

- 「戦闘工作員」として育てられた男がやっとこ日本に帰ってきて平和に過ごしたい、というなかなか壮絶な設定ですが、なぜかスッと入ってくる。要所要所で光る、工作員の「本物っぽさ」の賜物か。島崎～、幸せになってくれ頼む～～～（懇願）。

株式会社プロプラス商品部 / 池本美和

- 9歳で国際テロ組織に拉致され、戦闘工作員となった島崎は、30年を経て脱出し、日本に戻る。しかし組織の追手が……。第1話にして「島崎真悟が戦場に戻るのは340日後」と宣言されるタイムリミット・サスペンス。島崎を只者ではないと見抜いたヤクザや公安にも監視される中、必死で「日常」を取り戻そうとする哀切な姿と、裏腹にキレキレのアクションから目が離せない。

角川文庫編集部部長 / 関口靖彦

- 一見ファブルっぽい設定ですが、似て非なる作品です。コメディ色が薄く、その分、人の悲哀を多めに描かれています。ジャンルとしてもリアルファンタジーなのかリアルなのか…平和と正義、すぐ近くにあるものがものすごく遠くに感じるのが良いです。あと島崎さん、カッコいい。

バーテンダー / 村井真也

- なんとなくファブル臭がするが、そこはモーニング！ヤンチャな部分を抑えた大人な作品になっている。まだ一巻（2022年中）ということもあり、期待も込めて

あゆみ BOOKS 仙台一番町店 店長 / 土屋修一

「へんなものみっけ！」早良朋

- 博物館で働く人たちの物語。このマンガに出てくる様々な分野の専門家たちの働く姿や、想いに触れると、子供の頃の好奇心を呼び覚まされるような気がします。自分が何かを好きだったこと、好きになるきっかけを与えてくれた人たちのことといった、自分を形作る原点のようなものが思い出されてきて、自分を見直すきっかけを与えてくれます。日々を追われて見逃している美しい世界を、改めて見直すきっかけを与えてくれるマンガです。

会社員 / 廣瀬 公将

「吼えろペン RRR」島本和彦

- 燃える漫画家！炎尾燃が帰って来た！特に読んで欲しい一話目！書店、書店に関わる方々、ファンへの島本先生の想いがこもった話になっていて、グッときます！

主婦 / 岸本しのぶ

- 長引くコロナ禍にあって、ただでさえ如何ともし難いのに、さらに様々な困難に立ち向かわなければならないときに背中を押してくれる一冊。

医師 / 岸本 倫太郎

「北欧貴族と猛禽妻の雪国狩り暮らし」白樺鹿夜、江本マシメサ

- 2022 私の癒やし漫画筆頭。いじらしい夫婦を見守りながら優しい気持ちになれます。北欧民族の暮らしを丁寧に描きつつ、そっと隣にいてくれるような作品です。全・現代に忙しい人たちにオススメしたい。

ヘリックス・クリエイティブ(株) WEB デザイナー / 河本智芳

- 友人に勧められて読みましたが、二人の間に邪魔者がはいらない着実な愛情を見られて最高に幸せな気持ちになりました…。北欧の辺境の地を治めている伯爵がパーティーで元軍人に一目惚れし、北欧にて一年間の仮結婚を始めるというストーリー。厳しい冬のある北欧での、手足を動かし知恵を使い暮らすことの豊かさも楽しいです。食べ物も美味しそう。暮らしなので人の間の葛藤もありますが、基本的に皆いい人なのでつらくありません。何よりもメインの二人のやりとりが純粋で、ただただあったかくて読んでてついつい笑顔になってしまいます。心が汚れてても洗いながしてくれるような…もはや神々しい…！！現在8巻まで出ていてその間に二人の関係にも大きな変化があるのですが、それはぜひ読んでいただいて一緒にニヤニヤしましょう。とにかく幸せ。あー幸せ。

公務員 / 宇田川結衣子

「僕の心のヤバイやつ」桜井のりお

- 京太郎は連載開始当初からするとずいぶん「まとも」になって自信も付いてきたけど、しっかり「キモイ」。そこがいい。

朝日新聞記者 / 小原篤

「北北西に曇と往け」入江亜季

- リアルな生活の中にほんの一握り摩訶不思議な出来事が織り交ぜられ、独特の雰囲気を持つ漫画。作者から紡がれる美しい世界観に引き込まれる。時折ラブストーリー、時折オカルティックサスペンス。

デザイナー / 高永貞光

- 本を開くたび、アイスランドの荒涼としつつも美しく描かれる自然が目の前に広がり、ツンと鼻に抜ける冷たく清々しい空気を感じて、背筋がビッと伸びるような気分になる、だいたいアイスランドにつながる、どこでもドアのようなマンガ。

Tokyo Otaku Mode / モリサワタケシ

- まさかの急展開に戸惑いつつ、今年も推す！アイスランドから日本へ舞台は移ったが、自然への描写力は変わることなく美しい。日本ってこんなに美しい国だったんだと改めて思った。

あゆみ BOOKS 仙台一番町店 店長 / 土屋修一

「星旅少年」坂月さかな

- 描き方のバランス感覚が秀逸すぎる SF 漫画。ゆるく始まって徐々にシリアス路線…みたいな SF 漫画はたくさんありますが、「星旅少年」はそことは一線を画しています。あくまでゆるさは保ったまま、でも決して軽くはなく、かといって重くもしない。1 巻も 2 巻も、その作品としての真ん中がブレることなく描かれています。作者の坂月さかなさんは、きっとバランス感覚に優れた方なんだろうと想像します。同じ世界観で描かれている「プラネタリウム・ゴースト・トラベル」もおすすめ。

音楽家 閃き堂店主 / 谷澤智文

- なんて落ち着く世界観！夜寝る前にゆっくり読むと気持ちがあったかいブルーになっていくようです。

ブックエース上荒川店コミック担当 / 倉本かおり

- 人類の終末が近づく宇宙を舞台として、謎めいた少年の旅と交流を優しく描くファンタジック SF。姉妹篇『坂月さかな作品集 プラネタリウム・ゴースト・トラベル』との併読が妥当だろう。

書評家 / 福井健太

- いい SF は読んでいたらいつのまにか作品世界の中にいる、というのが持論なのですが、本作品はまさにそうでした。我々の世で言うところの死に等しい「覚めない眠り」につく人々、そんな世界の中に僅かに残る人の営みを集めて記録していく主人公。どこまでも静かで美しく、マンガだけど詩を読むような空気感がありますが、少しずつ物語の秘密に近づいていく展開がたまりません。無機質なようでいて有機的な世界と、眠ってしまった人々の美しいけれどもめくもりなき形とまだ眠っていない人々の体温と。相反する事象を抱え込んでなお優しい、なんとも言えない読み心地。今季一番出会えてよかった作品。先が気になります。

公務員 / 宇田川結衣子

「星をつくる兵器と満天の星 ～中村朝 連作集～」中村朝

- 作者が 10 年近くかけて同人誌で発表した SF 連作に、新編を描き足して一冊にまとめたもの。初めての「足長イイの帰還」を読んだ時も衝撃だったが、その後にバラバラに発表された作品の関連に気づかず、1 冊にまとまってはじめて同じ世界線上の時間軸に起きた出来事だったと気づきあらためて震えた。人と生命兵器。善悪の倫理観の歪み。高高度の空間に響く「故郷」の歌。人もクローンも死ぬと星になるのだろうか？ 作者の生み出した壮大な世界観と生命賛歌に心からの拍手を贈りたい。

コミティア実行委員会会長 / 中村公彦

「ポッケの旅支度」イシデ電

- ネコを飼い始めてネコが身近に感じられるようになった。それにともなってネコマンガとの距離感も変化したように思う。飼う前はネコがいかにかわいいかが重要だったが、飼った後は、飼い主がどう考えているかに目が行くようになった。余命いくばくもないネコをどのように看取るか。看取った後にどのように飼い主は振る舞うのか。そんな点にばかり目が行くようになった。このマンガはそんな自分の変化を気づかせてくれた貴重な一冊。

鳥取県立図書館 / 野間勤

- イシデ電先生の愛猫ポッケとの出会いに少し触れ、彼の老いと闘病、旅立ちとお見送りを描いた作品。家族と別れるまでの気持ちが丁寧に描かれていました。何よりも、老いて衰えるまでの愛猫ポッケのすべての絵がどれだけ彼が愛されていたのかを伝えるに十分な力がこもっていて心をうたれました。

会社員 / 津田 圭

「ホテル・メツァペウラへようこそ」福田星良

- 凄く寒いんだろうな…とか、季節を感じられたり、青年・ジュンさんの青年らしいまっすぐさとか、雰囲気が好きです。ワクワクしながら、ページが進みます。

書店員 / 桶谷佳代

■ ジャケ買い作品。訳ありな登場人物たちが魅力。ずっと読み続けたい。

会社員 / 八重田幸子

■ フィンランドのホテルを舞台に、訳ありの少年が年嵩の支配人とシェフに温かく見守られつつ自分を取り戻していく、というだけでもう好きな雰囲気なのですが、この三人がそれぞれ違うタイプのキャラクターで、自然と、互いを補い合う関係になっていくのがすごく素敵です。ホテルに来るお客さんも含め、人を思いやる気持ちが溢れているお話で、読んでいて本当に、ああ、いいなあと思います。

主婦 / 堀江千秋

■ フィンランド、ラップランド地方。雪とオーロラの国のとあるホテルで繰り広げられる、心温まるヒューマンドラマです。吹雪と共にやってきた、謎の青年"ジュン"。大きな事件はないけど、"ジュン"を受け入れた老紳士二人はまるで彼を導いてくれる優しい灯台のような存在です。

会社員 / 伊藤千恵

「本の虫ミミズくん」カラシユニコ

■ 恥ずかしながらわたしは書店員の中では読書体験がかなり乏しい方で、小学生のミミズくんが読んでいる本のほとんどをまだ読んだことがありません。それなのに、ミミズくんが読んでいるその本の中の世界に、ミミズくんと一緒に案内されたような感覚になります。読書体験が人の心をいかに豊かにするかということにあらためて気づける素敵な作品です。

伊吉書院 類家店 / 中村深雪

「まじめな会社員」冬野梅子

■ あの子と私はそんなに違わないはずなのに、どうして私だけ上手くいかないんだろう。どうしてあの子は選ばれるのに私は選ばれないんだろう。そんな風に考えたことがある人はきっと多いんじゃないでしょうか。この漫画の主人公「あみ子」もそんな一人。キラキラしたクリエイターコミュニティにあこがれて、近づこうとして、でもその輪に入ることはできなくて…。何かをなそうと死ぬほど努力するわけでもないし、打ち込むわけでもない。それでも「何か」になれるんじゃないかと期待したり落ち込んだりするあみ子の姿にとても共感を覚えました。コロナ禍になった直後から連載が始まりましたが、コロナ初期のピリ付いた空気感も作品に落とし込んであり、色々と胸に刺さる作品です。

会社員 / 畑中 瀬路奈

■ 子どもの頃から少女漫画を読んできた者が無意識に期待する「定石」を、ことごとく裏切る展開がむしろ気持ちいい。地味で性格のひねくれたサブカルモブ女子として、主人公には暗い共感しかありません。シビアだけど、どこか爽やかなラストも必見です。

ブログ「マンガ食堂」管理人 / 梅本ゆうこ

「魔女と騎士は生きのこる」新川権兵衛、近本大

■ 画に惚れ込んでしまい購入。内容は中世に近いファンタジー漫画。コミカルな部分とシリアスな部分両方あり、飽きさせない展開が好みます。まだまだ物語は序盤なのだろうと思いますが、どう結末に持っていくのか、ワクワクがとまりません。

三省堂書店海老名店・コミック担当 / 近西良昌

「マタギガンナー」藤本正二、Juan Albarran

■ 職人技はネットゲームをも超越する！

本と文具ツモリ 西部店 / 津守晋祐

「マダムたちのルームシェア」Seko Koseko

- かの人は言った。一生幸せでいたければ正直者でいることだ。これって心理の1つだと思うんですね。わたしは死ぬときに、これを思って死ねたら幸せってのが3つあって、1、自分は自分に正直に生きた2、自分は一人ではなかった。3、思い出して楽しい思い出があった。を守れたらきっと死ぬとき幸せ＝ハッピーエンドだと思ってます。でも、これを全部満たすのって結構大変よねー。いたよ！漫画の中に！日常に楽しさを見出し、いつでも正直に生きてるマダムたちが！こんなマダムたちになりたーい！って思える良い漫画です。

鳥取県高等学校教諭 / 佐川由加理

- タイプが違うけれど互いを尊重し合っている素敵なマダムたちの日常漫画。年を重ねることに不安を抱く昨今、この作品は前向きな気持ちと元気をもらえる作品です。

会社員 / 伊藤千恵

「魔導具師ダリヤはうつむかない～ Dahliya Wilts No More ～」住川 恵、甘岸久弥

- 異世界転生もの…なんだけど何が良いかと言うと能力チートではなく、前世の現代日本の記憶を持つ主人公が魔導具を作る職人でその職人としての生き方やそれを開発するまで、開発して売り込む場面がかなりリアリティを持って描かれているところがおすすめです。なんやかんやあって上手いこと出来上がりました？！じゃなく、現代日本の知識を元にちゃんとこの異世界に合うように改良する過程が描かれてると、じゃあそれをどう売り込むのか、販路を安定させるのかなどなどが面白い。そしてとにかくご飯が美味しそう！

元書店員 / 内野智未

「真夏のグレイザー」井上智徳

- この世界の終わり感のあるストーリー好きです。その中で戦う女子高生たち。パニック物はこの後どうなるのかと期待してしまいます。

デザイナー / 平沼寛史

- パルプ・フィクション的かつレオンの（雑誌ではなくて、映画の方の）な無国籍ロリ活劇「CANDY & CIGARETTES」を足かけ5年、全11巻で2021年に完結させた作者が、こんどは田んぼ広がるつくば市郊外を舞台に世界終末SFアクションを連載開始。荒唐無稽をリアルにみせるお手の物の大風呂敷、そしてかわいい女の子たちは健在。今回は「話せばわかる」が通用せず、倫理的葛藤もまるでない無機質なナノマシン（暴走AIみたい）が相手ということで、緩急の「緩」なき息もつかせぬアクションまたアクションが最高速度で爆走する。動画配信、サブゲー、大臣ご令嬢、スポーツといったキャラを割り振られたJKたちが、それぞれの能力を駆使して縦横無尽、疲れもみせず弱音も吐かず、機転を利かせてピンチを脱するハラハラ展開はやっぱりお見事。既刊3巻。どこまで盛り上げてくれるのが楽しみ。

日本経済新聞記者 / 天野賢一

「まめきちまめこニートの日常 こまちとタビ」まめきちまめこ

- 作中にこまちとタビの何が描かれているかといえば、餌やりの時に起こるトラブルのアレコレ。作者が意外と高価な犬用おやつにビビってみたり、餌を貰ったら呼んでも見向きもしない猫の気まぐれに翻弄されたり。犬猫を飼ったことのないひとには新鮮で、飼ってるひとにはアルアルなエピソードが満載で、最初から最後までずっと笑み続けてしまいます。

菓子研究家 / 福田里香

「マリッジトキシシン」静脈、依田瑞稀

- 言動といい、振る舞いといい、要所要所で「ぶっ飛んでるなー」と感じる違和感(?)にドハマリしました。

教師 / 持丸宏司

- 婚活バトルマンガという稀有なジャンルを見事に切り開いてきた名作だだと思います。ジャンプらしい軽快なテンポと熱い展開、そして圧倒的な作画と描写力が凄い！

会社員 / 三浦佑樹

- とある理由で早急に結婚しなければならなくなった、最強の殺し屋の一角「毒使い」の下呂くんが、どこからどう見ても美少女の性悪結婚詐欺師（♂）にアドバイスをもらいながら波乱万丈の婚活をする、ハイスピード婚活バトルアクションです。出自が出自なだけに、強いけれど浮世離れしすぎてポンコツ気味の下呂くんと、エピソードごと交代していく婚活相手のヒロイン、ボンドガールならぬ「下呂ガール」たちとの距離の詰まっていきかたがほほえましくも、殺し屋同志のバトルは大迫力かつスリリング。徐々に女性慣れしていったイケメンさが極まりつつある下呂くんはじめどのキャラクターも素晴らしい画力で魅力的に描かれていて、個人的にはジャンププラスのなかでもひとときわ光る作品です。

株式会社アニメイト / 岡部 真矢

「マロニエ王国の七人の騎士」岩本ナオ

- あえて下世話なことを垂れ流すが「このマンガがすごい！」史上初2作連続1位取ったんだし『金の国 水の国』もアニメ化されんだしもういいから賞やろうぜ！ という感じ。とぼけた顔しながらド骨太ファンタジーでこのまま完結すればたぶん（「幻想小説」と対になる意味での）ファンタジーマンガとしてはベスト級の幻想譚。いいから賞やろう！ な！？

ソフトウェアエンジニア / 第貳齋藤

「ミウラさんの友達」益田ミリ

- この作者が「ロボットマンガ」を描いたというのがまず驚きだが、そのたくまざる獨創性に二度驚いた。「機械に心は宿るか否か」という（おなじみの）問いが、本作には一切ない。人間そっくりのロボットはただの無機物で、登録できるのは5つの簡単な言葉だけ。それでいて、このロボットが「生きている」かのようにいとおしく感じさせるのだから、益田マジックというしかない。大げさでなく、「鉄腕アトム」以後のロボットマンガ史に残したい逸品。

読売新聞文化部編集委員 / 石田 汗太

「見える子ちゃん」泉朝樹

- （もうアニメ化までしてるから充分メジャーだろ）と思っていましたが、僕の周りのオタクじゃない人たちでただのホラーマンガと思っている人が多すぎたので投票します。（8巻ギリギリだし）この作品はホラーと可愛い女の子を使った、ヒューマンドラマだと個人的には思っています。伏線の貼り方も絶妙で、最後まで誰が良い人（幽霊）で誰が悪い人（幽霊）かわからないのに、ちゃんと納得のできるラストが用意されています。凄い。怖い苦手な人はとりあえずその物語の最後まで頑張って読み切れれば勝ちです。怖くなくなります。（多分）、

バーテンダー / 村井真也

「緑の歌 - 収集群風 -」高妍

- 青春と成長と音楽を絡めた文学的作品、と一言で言ってしまうとありふれたテーマなのに、どの世代にも刺さりそうな魅力に溢れた良作。コテコテに感じないのは、著者が台湾の方だからなのかも？ 日本文化を通じて新しい世界と出会う少女の物語が、逆に読者に新しい世界を見せてくれます。

元書店員 / 井出 麻悠美

- こんなに奥ゆかしくて、繊細で丁寧な漫画は久しぶりに読みました。久しぶりに会った友達と喫茶店で向かいあってその子の話をうんうんと聞いているような、紙面から目を離してふと顔を上げたらその友達と本当に目が合っているような、そんな不思議なリアリティー。そして現実的な時間軸を描いているのにどこか普遍的な懐かしさを感じる高研先生の絵。台北の少し肌が汗ばむような、生暖かい匂いまで感じ取れる気がする作品の雰囲気心地よく、本編で描かれているテーマ以上にそんな「体験」が出来たことにこの作品の素晴らしさを感じました。完全に表紙買いでしたが大大大正解でした。私の今年の一押し作品はこの作品です。

フリーランスデザイナー / 金輪英恵

- このなんとも言えない含羞はなんだろうか…！ 相対化、他者からの目、相互評価のゲームにスレきってしまった感じがどこかに存在している日本文化に対して、この台湾からもたらされた作品は、我々が無意識に囚われている乾いた自意識がまったくなく、どこまでもウエットでロマンティック。細野晴臣とライブハウスに魅せられた、ということがはっきりわかる、写真家なら一瞬でとらえるであろうシーンを、丁寧に丁寧に描いた画で見せてくれる。無かったはずの思い出が、もしかしたら自分のものかと思わせてくれる。ほとんど魔法ではないだろうか。

ニッポン放送アナウンサー / 吉田尚記

- 「はっぴいえんど」「ゆらゆら帝国」など作中に出てくる音楽を聴きながら、休日にゆったり読む。きっとこれがベストな読み方。

あゆみ BOOKS 仙台一番町店 店長 / 土屋修一

- 昨年とはにかく台湾マンガに読み応えがあった。「用九商店」や「台湾の少年」もよかったが、1作挙げるならこれでしょう。この作家の「感情表現」や「間」のうまさには、日本の描き手を超えるものがあると思う。イラストレーターとしても活躍する人だが、マンガを描き続けて！とお願いしたい。

読売新聞文化部編集委員 / 石田 汗太

「みやこまちクロニクル」ちほちほ

- 岩手県宮古市に暮らす作者の日々の生活を淡々と描く。淡々を絵に描いた？ような抑えた筆致なのだが、その日常は苛烈だ。東日本大震災で我が町を襲う津波の衝撃、自身の病気、肉親の介護、商業 WEB 誌での初連載…。その波に翻弄されながらも、作者は目の前の現実から目をそらすことは無い。ここまで来たら、作者自身の今際の際まで描き続けて欲しい。そういう作家として名を残すのではないか、と思う。

コミティア実行委員会会長 / 中村公彦

- 「リアル」なことだけ描いている。何の飾りも演出も施さず。それゆえに、とても怖い。それなのに、とても怖い。現在の自分にとっての「リアル」とは、こういうことなんだと思わされた。

朝日新聞記者 / 小原篤

「ミワさんなりすます」青木 U 平

- 毎巻、ドキドキするところで終わって、次まで震えて待つことになります。絶対、ハッピーエンドを期待する作品です。もし、映像化されることになったら、八海様役は、上川隆也さんを希望します。

書店員 / 桶谷佳代

- 推し活が一般となった今、やはり『推しは尊い』ことをあらためて認識できる良作。読み進めていくうちに国民的俳優・八海崇の言動を心待ちにしている自分に気付く。ミワさんのピンチに小気味よく繰り出される八海崇のスマートな対応、映画マニアとしてスイッチが切り替わるミワ、未だ明らかにならない美羽さくらの狙い。テンポよく進む話コミカルさと若干の不安がスパイスとして効いており、今後のストーリー展開が楽しみな作品である。

弁護士 / 三村 量一

「武蔵野」齋藤潤一郎

- デヴィットリンチの世界を関東紀行マンガで味わえる作品です

コメディアン / インコさん

「無能の鷹」はんざき朝未

- 初めて読んだ時、にやにやが止まらず声を出して笑ってしまいました。鷹野がツボです。他では見たことないキャラクターのヒロイン。とにかく笑いたい時はこの漫画を読みます。オフィスマンガでは新境地だと思います。

TEAM SHACHI / 秋本帆華

「ムラサキ」巖男子

- 面白いとか絵が上手いとか、そういうのもあるのだけれど、マンガという独創的な世界を描くことができるフィールドを存分に活かしていることに秀逸さを感じる。完結してしまったのが残念で仕方がない。

1616 屋 / 杉本 善徳

「メイドさんは食べるだけ」前屋進

■ 推しは誰かって？スズメちゃんとリコッタちゃんとおばあさまだよ！！無限に癒しを供給し続けてほしいです。急にメイドスイッチはいっちゃうのたまらん。効果音がすごい好き。落ち込んだ時の「しょみ」とか、ぶどう剥く時の「しる」とか特に。ほっこのんびりな日常系なんだけど、主人公（スズメ）の着眼点が「あっ、そういえばそれ知らない！」みたいなことが多くて勉強になる。唐揚げとフライドチキンの違いとか、銀杏の名前の由来とか。知的好奇心が満たされるね！これも我が知識の喜び。総じて庶民文化というか土着の風習というか、そういうのを丁寧に描いてくれるから自分も日本人なことが嬉しい。悩めるスズメちゃんが宇宙に包まれる表現が良いもともとずっとやって欲しい。おばあさま気品ありすぎてマジ気品。所作と姿勢って大事なんだろね。それが伝わる画力ってことなのよ！！

会社員 / 布施直人

「め組の大吾 救国のオレンジ」曾田正人、富山玖呂

■ 前作「め組の大吾」での一説を引用する。「才能の輝くとき、本来は誰からも祝福してもらえない瞬間のはずなのに、おまえの輝く時は必ず人々の悲劇だ。おまえの才能の発露に祝福はない。それでもおまえは、レスキューをやるべきだ。」この作品の本質はここに圧縮されていると思っている。四半世紀前の熱狂が現代によみがえって、しかし、以前とは違った形の熱狂を見せてくれることを願ってやまない。

めがねっ娘教団 大司教 / 田中海渡

■ 若い消防士の奮闘を描いた、1990年代の名作『め組の大吾』が20年以上の時を経て帰ってきた。しかも『週刊少年サンデー』から『月刊少年マガジン』へ移籍して（※といっても富山玖呂と共作の『capeta』（2003-2013）、『Change!』（2017-2019）などは月刊少年マガジンで連載していたので、作家の「移籍」ではない）。続編とはいえ、時間が主要なキャラはすべて世代交代。前作では主人公の朝比奈大吾が消防士になるところからの時系列を追っての成長譚として描かれていた。本作も若い消防士3名の成長譚ではあるが、最初からレスキュー隊を描いた『救国のオレンジ』ではいきなりトップギア。主要キャラクターの名称や関係性、伏線などに緻密な設定がされていると思われ、物語の山場は少し先にありそう。いまのうちに追いつくべし。既刊6巻以下続刊。

ライター／編集者（馬場企画） / 松浦達也

「飯を喰らひて華と告ぐ」足立和平

■ 足立和平の『飯を喰らひて華と告ぐ1』（白泉社）に笑う。定食屋を営む男は料理の腕は良いし客の抱えていそうな悩みに心底から応えてあげる人情家だけど、その認識の悉くが勘違い。地下アイドルが客としてやって来てもう辞めたいと思っていて、その理由としてファンの男達と握手するのが嫌で臭くてもう握りたくないとかぶつぶつ言っていたところから勘違いしたその職業がどうしてそうなるんだ？ と言えそうで、なるほどそうかもしれないと思える絶妙なものだから面白い。そして垂れる説論の筋は違っても心に響く。呆れたか諭されたか少女アイドルは30歳になってもアイドルを続けていく覚悟を決めた模様。結果良ければすべて良いのだ。何より男が作ったブリ照りがとことん美味しそう。食べれば勘違いだろうとも心が癒やされそうな見た目だった。そんな料理を作る料理人も、そして描くマンガ家も素晴らしい。そんな作品だ。フラれたキャバクラ嬢が誰にも慰められない寂しさをかかえて定食屋に入った時も、男は彼女をキャバクラ嬢とは微塵も思わない。そのいかにもキャバクラ嬢といった源氏名を勘違いして彼女を大家族で弟妹をかかえた長女だと勘違いした上に、まったく予想もつかなかったアドバイスを贈って送り出す。それで沈んだキャバクラ嬢の心が癒やされるのなら、勘違いも悪いものではないのかもしれない。何よりそこでも出された鶏でとられた白湯ラーメンが実に美味しそうだった。東大卒の経理のようになぜか営業マンと勘違いされ続けながらも通ってしまうのは、勘違いによって繰り出される言葉が妙に響くことに加えて、男が作る料理がきつとしっかりと美味しいからだろう。そんな美味しさに説得力を持たせるのが、写真を加工しているのだと言われても納得してしまうくらいの圧倒的な画力から繰り出される料理の数々を、眺めるだけでも楽しめる上に、無関係の人ですら論ず説教を味わえる漫画をご堪能あれ。

書評家／ライター / タニグチリウイチ

「メダリスト」つるまいかだ

■今回はこの作品しかないと思いました。スポーツ漫画として王道ながら熱いストーリー展開、魅力的なキャラクターと、その魅力を更に伝えてくる表情の描き方の素晴らしさ、技量の表現としての説得力がある画力、全てを持っている作品です。私自身フィギュアスケートという競技が大好きで、国内外の試合を配信や現地で観戦しているのですが、とてもよく取材されているのが伝わってくる現実とファンタジーのギリギリを攻めた設定にうならされ、スポーツとしての見どころ面白さの説明の巧みに驚かされました。もっとたくさんの人にこの作品の面白さを知って欲しいと思います。個人的に一番驚かされた回は5巻『score18 私のカード』で4人の演技を同時並行で描いた回です。まさに漫画でしか出来ない描き方でとても感銘を受けました。

会社員 / 津田 圭

■作品全体のスピード感やテンションの緩急は、まさにフィギュアスケートの演技を見ているかのよう。巻を重ねるごとに増していく、主人公コンビをはじめとした登場人物たちの芯の強さ、表情、発する言葉の数々は、目と心にグッと飛び込んでくるパワーがある。コンプレックス持ちが成り上がっていく、その道のりを応援したくなる、王道的なスポ根物語としての魅力満点。競技ルール、取り巻く環境、その成長過程までフィギュアスケート界のリアルな描写も織り交ぜて、現実のフィギュアスケート観戦まで楽しくなるのも良い。

会社員 / 伊東敬祐

■先生と生徒が遅咲きながらも才能を努力で開花させていく姿に毎話ドキドキしております。これからの大会も楽しみです！

会社員 / 竹本 慧

■可愛い絵柄から想像できないような熱さがある

会社員 / 齋藤隼

「もえばな」横山左

■華道部マンガ！元気な主人公とクールな相方は王道な組み合わせですが、もえばなは少し違うのが魅力的。主人公は、とにかく明るく、アニメ「ブーケの花園」大好きオタク。相方は、クールで無口だけど、花の話をしている人がいると話に加わりたくてうずうずしちゃう。そして好きがゆえにキツイ言葉を使ってしまうこともあるが、ちゃんと「ごめん」が言える子。花のことをお花と呼ぶのも可愛い。登場人物に悪い子がいないのも好きなポイント。そしてやっぱり頑張る高校生達は見ていて応援したくなる！と同時にこの漫画を応援したくなりました。私は華道について詳しくないのですが、作中に登場する生け花は「わぁ」と声もれる美しさ。流派はオリジナルのものなのですが、たくさんの先生方が監修についていて、キャラクターや心情にぴったりの生け花を作ってくださっていて感動しました。連載アプリのジャンププラスだとカラーのコマやページがありますし、単行本だと書き下ろしがありますので両方でぜひ！

声優 / 富岡美沙子

「模型の町」panpanya

■毎作毎作、心を躍らせてくれる漫画家 panpanya さん。今作も「そんな視点があったとは」な視点で漫画が描かれています。これまでの「全作品」が、何度読み返しても面白く、新しい発見に満ちている。これは本当に、本当にすさまじいことです。しかも、年に1作品は必ず刊行されています。僕的にはもはや手を合わせて拝みたくなるような漫画家さんです。

音楽家 閃き堂店主 / 谷澤智文

■特に、夜ぼらけのお話が大好きです。あの夜空、最高です！もの凄く体感してみたい、と思いました。

書店員 / 桶谷佳代

「ヤコとポコ」水沢悦子

■ 終わってしまった。寂しい。でも全7巻は皆さん手に取りやすいかと思います。これは未来のお話。インターネットが廃止された"革命後"の世界はのんびりとした時間が流れています。そんな世界で暮らす漫画家のヤコと、アシスタント猫型ロボット(てきとうモード)のポコ。ある日、昔流行った「ゆっこペン」を見つけます。作者のゆっこさんの思い出の色のペン。「うらやましかった友達んちの猫色」「一番長生きした金魚色」「好きだった男子の家の屋根色」などなど。全部で何色あるかわからないし、書いてみるまでどんな色かもわかりません。その色が自分の思い出と同じ色だと幸せになれるとあって噂。ゆっこペンをてきとうに集めつつ紡がれる優しい物語の数々。じんわりと心に沁みて暖かい涙が流れる。SNSや仕事やプライベートに疲れたら好きな物を食べたり飲んだりしつつの？んびり読んでほしい。大好きで大切に、ずっと一緒にいてほしい漫画です。

声優 / 富岡美沙子

■ インターネットが廃止されアナログな暮らしを送る一方で意思をもった動物型ロボットと暮らす人々が描かれた、ほんの少し未来が舞台の作品。主人公は、いつでもヤコを喜ばせようと一生懸命の猫型ロボットポコと、ポコが大好きだけど上手く愛情を伝えない(伝えられない)人間の女の子ヤコ。ヤコの不器用さにハラハラしつつ、時折見せる深い愛情にホロリとさせられます。ヤコは漫画家なのですが、もう一つの軸として描かれる漫画家たちのお話も、創作したことがある人には刺さるんじゃないでしょうか。やさしくて、あたたかくて、でも少しせつなくて、胸がぎゅ〜〜となるような作品です。

会社員 / 畑中 瀬路奈

■ ネコ型ロボットのポコは、マンガ家ヤコのお手伝い役。「てきとうモード」設定なのでベタもトーンも失敗ばかり。がんばればポコ、負けるなポコ！……という藤子Fのお話ではあるが、実はハードでシビアな「マンガ家マンガ」であることにびっくり。ある売れっ子マンガ家が、悪口ファンレターをシュレッダーして自宅地下のプール槽にため、その中で「貴重なご意見ありがとうございます！」と叫びながら泳いだり、連載を打ち切られたマンガ家が、次回作がんばりましょうという編集者に、目は三日月のまま「どういう覚悟で…人の子供殺してるの？」と迫ったり、絵柄がかわいいだけに、ギャップが尋常でない。また、それだけの「プロの覚悟」に満ちた作品だと思う。一見メルヘンチックな世界だが、ある災害を機にネットが禁じられ、パソコンは過去の遺物となり(したがってマンガは全部アナログ描き)、クルマは時速20キロ以下でしか走れないなど、風刺に満ちた未来像も読みどころ。とにかく、表紙からは想像もつかない内容なので読んでみてほしい。昨夏、全7巻で完結したので、これがワンチャンス！

読売新聞文化部編集委員 / 石田 汗太

「ややこしい蜜柑たち」雁須磨子

■ ややこし?! ややこしい人間関係とどろどろの感情とで、先が読めません

ヴァイオリニスト / 佐藤帆乃佳

「勇者のクズ」ナカシマ 723、ロケット商会

■ 可愛い女の子も出てきますが、出てくるオッサンたちがとにかくカッコいいです。マンガ好きな方たちなら「勇者」とか「魔王」という単語にやや辟易としている昨今とは存じますが、この漫画ではあまり重要ではないと個人的に思ってます。(タイトルにまでなってるけど) どちらかといえば、ハードボイルド近未来裏社会ファンタジーって感じです。カウボーイビバップ好きには、なおお勧めします。

バーテンダー / 村井真也

「夢てふものは頼みそめてき Daydream Believers」灰田高鴻

■ コレが現代美大生の話だったらまた見方も違ったのですが、ハチャメチャさとゆるさと時代設定が丁度良い。前作もそうですが、著者はその時代の空気感を捉えつつ、漫画というフィクションに分かり易くデフォルメして落とし込むのが非常に上手いのだと思います。NHKの時代劇枠で実写化希望。

元書店員 / 井出 麻悠美

「ようきなやつら」岡田索雲

■ 名状しがたいおかしみ、かなしみ、いつくしみ。

ときどきライター / 縣丈弘

「吉原プラトニック」オキモト・シュウ、藤川よつ葉

■ 舞台は江戸時代の吉原の遊郭。生身の女性が苦手な浮世絵道楽のヲタク侍を見かねた父親が、浮世絵に描かれた吉原の売れっ子花魁に手ほどきをお願いしようと遊郭に放り込む。これがプロローグ。「生身の女性を克服」という軸で考えると、関係性は「花魁>ヲタク侍」となるが、ヲタク侍が振る舞った手料理に、稀代の食道楽の花魁がハマってしまい、時折立場の逆転が起きる。回を経るごとに、薄紙を重ねるように少しずつ変化していく2人の関係。江戸時代に実在してもおかしくない程度に時代考証が加えられた手料理の描写もいいが、ただのグルメマンガではなく、主人公2人の心が動く男女の物語にきっちり仕立てられているのが白眉。既刊3巻(3月発売の4巻で完結)。

ライター/編集者(馬場企画)/松浦達也

「黄泉のツガイ」荒川弘

■ 荒川弘作品!期待しかないという高い高いハードルを軽く超えていく、読者を裏切らない「黄泉のツガイ」。「1巻って…1話って序章ですよ?え?」って概念を疑うほどの引き込むストーリーの力強さ。キャラクターの魅力。傑作、覇権、という単語はあまり好きではないですがたまたま社会現象となる空気しか感じないので巻数が少ない今から皆早く読んで。一緒に続きを待って悶えたい。

図案家 / 橋本寛子

■ 色々なツガイの式神を使った能力バトル漫画で、いつもワクワクさせられる展開です作者様の作品はどれも楽しく読めます

tetote 代表 / カ丸 真

■ 期待していた以上に面白かった。バトルもちょっとしたやりとりのあとのオチも描き方が秀逸!ギャグ漫画ではないけど、そういう要素も楽しい。

会社員 / 八重田幸子

「来世は他人がいい」小西明日翔

■ こんな高校生怖すぎる。出てくる人たちが比較的感情があっさりしているように感じるところも、冷徹感がある。ついつい読んでしまったマンガです。

カメラマン / 平沼久奈

「ラストカルテ - 法獣医学者 当麻健匠の記憶 -」浅山わかび

■ 先日、運転中に対向車がイタチかハクビシンのつがいの一匹を轢いてしまい、もう一匹が死体の前でピョンピョンと飛び回っている光景を目撃しました。野生動物の死については知らないというより無関心だったことを思えば、私にとってこの作品は衝撃でした。何ができるとかではないですが、動物の轢死について関心をもつきっかけになりました。

Books アイ蒲生エキナカ店 / 野口忠義

「リバイアサン」黒井白

■ 絵の書き込みがすごい。話は宇宙で事故にあった船の中で生き残りをかけた戦いをする学生達の話。主人公のイチノセの視点で話が進みます。生き残るのは誰なのか、最後の結末が気になります。

デザイナー / 平沼寛史

■ 緻密なリアル寄りの作画で描かれるサバイバルSF。最初に作画を見た時は驚きを隠せませんでした。船内で見つかった1冊の日記の先に、どんな結末を目撃するのか・・・楽しみです。

会社員 / 伊藤千恵

「竜女戦記」都留泰作

- 描き下ろし刊行のせい、あまり話題にならないのが不思議。近年のハイ・ファンタジーとしてとんでもない傑作だと思います。東洋的世界観、魅力的なキャラクター、先の読めない展開、ワクワク度、すべてが凝りに凝って面白い。この手の物語は必ず「既視感」が伴うものですが、例えば竜や鬼が出てきても、こういうのは見たことないと思わせるのは見事。3年余で5巻とゆったりペースですが、物語がまったくダレないのもすばらしい。未読の人は一度読んでみてほしい。

読売新聞文化部編集委員 / 石田 汗太

「ルリドラゴン」眞藤雅興

- 休載が想像と妄想を加速させるッどうなるんだ？どうなるの！どうなってもいい～～！！1巻を何回読み返したか忘れられたパンの枚数状態。ま～～～おもしろい。好き。タイトルが優勝！！朝起きたら謎のツノが生えた主人公。開始5ページで半分人間じゃないという母親からのカミングアウト。展開が強いよぉ…。すごいなって思うのは、主人公の異変に対する周囲の反応がすごく説得力があるというか、現実には起きてないけどもし起きたら、もし目の前の女子高生の頭にツノが生えてたら、きっと自分もこんな反応なんだろうなって思えるところ。クラスメイトの反応もよくあるご都合展開じゃなくて、面白いがる人もいれば怖がる人、まだわからないって言う人もいる。そこがすごく自然で人間らしいというか、この作品の大きな魅力だと思う。周囲の大人のセリフも素敵で、「半分人間じゃないんだから行きたくなかったら学校休んで良いよ」とか、「普通とは違う特性をもった人がいることなんてよくあること」とか、本当にそれがそう。みんな普通に暮らしてるけど自分のことなんて自分ですら分かってない。知ってる人の誰かは記憶無くしたセルジュかもしれないし。あぁ吐いてみたいわぁ。1巻だけでこんだけ語れるなら2巻が出たらどうなるかって？会社休んで読み耽るんだよ。ファイアー！！

会社員 / 布施直人

- 突拍子もない設定でゆっくり流れる優しい世界が良い。再開を待っています。

医師 / 岸本 倫太郎

- ある朝鏡を見たら角が生えていて…から始まる母子家庭だと思っていたら父親はドラゴンで別居中というパンチの効いた出だしと、学校に遅刻しそうだから角を隠さず学校に行き、周囲もなんとなく受け入れるという描写に「時代は変わったなぁ…」との想いを強くする作品でした、これが昭和なら差別や迫害を逃れるためにアレコレ忍んだり戦ったりする所でしょうが、平成を経て令和の現在は平穏を装うために我慢をしなくても良くなったのだなど。Z世代以降のセンスや世の中の見え方の一端が垣間見えたような衝撃がありました。

住職・ライター / 蟬丸 P

「ROCA 吉川ロカ ストーリーライブ」いしいひさいち

- ファドを知らなかった。どこかで聞いたことがあったかもしれないけれど、意識して聞いたという記憶はなかった。シャンソンだったら感じは分かるしカンツォーネだったらなおのことどんな感じが思い浮かぶのに、ファドだとまるで浮かばなかったのは、それをファドだと語ってくれる人が周りにあまりいなかったからだ。これからは違う。ファドはポルトガルを発祥とする民族歌謡で、そして悲しみや慈しみといった感情が乗った歌声が響き渡って、心を振るわせてくるものだということが、いしいひさいちによる漫画『ROCA 吉川ロカ ストーリーライブ』（いしい商店）の中で大いに語られた。読み終えた人は今後、ファドというものに対して鋭敏になって耳をそばだてるだろう。そして考えるだろう。それはロカの歌声なのだろうか。ロカはもっと凄いのだろうか。どれだけの感嘆をロカはもたらしてくれるのだろうか。等々。気にしていなかったファドというジャンルに、吉川ロカという架空の歌手を通してとてつもない興味を抱かせることになる。それが『がんばれ！！タブチくん！！』であり『おじゃまんが』であり『となりの山田くん』であり『ののちゃん』といったギャグ4コマ漫画で鳴りひびく、いしいひさいちによってもたらされるものであるということに、振り返って驚かされる。いや、読んでいるうちは確かに、いしいひさいちのギャグ4コマ漫画なのだ。ひねくれていて、大げさなところがあって、しっかりと笑わされる。ストリートで唄っていた時に、聞いてくれていた老女をきっと演歌と間違えているんだと思ったら、本格的なファド好きだったといった落として持ち上げる笑いが多いのが特徴で、13人くらいしかいなかったライブをマスターか

ら異例と言われ、少なすぎるからかとドキドキさせた次のコマで、その13人が全員サイン入りのCDを買ったのが異例と言わせる持ち上げも、笑えつつ喜べる。権力者がひっくり返ったり人気者が転んだりするような笑いも描ける一方で、人情味に溢れた笑いもしっかり織り交ぜ好評価と思いきや、『ののちゃん』の中でロカのストーリーは途中で打ち切られてしまう。「まっきとどこかで唄ってるよね。」「ああ元気でやってるやろ。」。ののちゃんとお母さんが会話するその背に、デビューアルバムを発売したロカのポスターが飾られ、成功を悟らせて終わらせた『ののちゃん』でのロカのストーリー。ただ、まだまだ語りたかったことがあったのだろう。いしいひさいちはそのその先を描き継いで、自費出版によって1冊の本にとりまとめた。それが『ROCA 吉川ロカ ストーリーライブ』だ。事務所に入り、ライブをし、レコード会社からアルバムを発売するプロとして成長していくロカが描かれていて、歌声という才能で周囲を驚かせ、喜ばせてきた港街でのアマチュア時代とはまた違った苦勞であり、人情といったものがつつられていく。どこにでもいそうな女子が、ステージに上がるともの凄い咆吼のような歌声で圧倒する展開だけでも嬉しいけれど、そうしたエピソードが幾重にも積み重ねられていくうちに、耳にロカのその歌声が響いてくるような感じがするのも良い。雨の日のライブに介護者を連れてきてくれた車いすのお婆さんを見送る2本のエピソードに続けて描かれる、お婆さんの側からのエピソードから醸し出されるロカの歌声の凄さと素晴らしさ。聞いてみたいと思わせてくれる。歌ってもしかしたら凄い力を持っているのかとも感じさせてくれる。ストーリー4コマ漫画であり、萌え4コマ漫画からは人気の作品が多く生まれ、アニメ化もされている。あるいは『ROCA 吉川ロカ ストーリーライブ』も同じような展開を迎えることがあるの。あの咆吼のような歌声を再現できるファドの歌い手はいるのか。そうした興味も浮かんでしまうが、そうなるにあのどこか哀愁を漂わせたラストの解釈が気になって来る。高校生の頃からロカを支えてきた柴島美乃との関係を、文字通りに精算したかのようなラストの裏側に何があったのか？ 消え入るような儚さを漂わせていたロカの今は？ 通販で取り寄せた『ROCA 吉川ロカ ストーリーライブ』に添えられた納品書Rタイプに掲載された1コマにヒントがあるのかもしれないけれど、それも含めて想像させる道をいしいひさいちが選んだのなら、あとは受け取る方で考えるしかない。信じるしかない。ロカは今もファドを唄っている。港街で。コンサートホールで。世界で。圧倒的な歌声で。

書評家/ライター/タニグチリウイチ

- Twitterで評判が聞こえてきて、みんな絶賛していたんですね。ほんとうでした。ポルトガルの国民歌謡ファドの歌手をめざす地方出身の女の子の話です。いしいひさいち先生なので4コマです。ももとは朝日新聞の4コマ「ののちゃん」の中で描かれていた作品内作品だそうです。いしいひさいち先生も岡山県玉野市の出身だそうです。この物語の舞台も、それとおぼしき地方の港のある町です。たまたま日本の、たまたまある地方にうまれた少女が(しかしたまたま意外にこの世に生まれてくることがあるでしょうか)、たまたまたまらない才能を持って生まれてきてしまったがために、故郷から離れ、それまで少女をとりまいていた人々から離れ、都会へと旅立つ。そうしたお話です。たくさんの「歌姫」の物語、そのひとつ。昔からよくある話、かもしれません。けれど主人公だけでなく、彼女をあたたく見守ってきた人たちひとりひとりの個性が、しっかりと描き出されていて、ある地方のある時代の歴史の記録にもなっています。

教員/戸田穠

- 聴いたことない音楽のはずなのに絵から歌が聴こえてきて声の圧を感じるような不思議な感覚。主役ふたりの強い繋がりに救われる。

医師/岸本 倫太郎

「67歳の新人 ハン角齊短編集」ハン角齊

- 雑誌デビュー時は「65歳驚異の新人」という売り込みだったと記憶している。しかし65歳がいきなり新人マンガ家になって出現するわけではない。それまでの作者の人生が奥行きとしてあるという厚みをこの本から感じられるはずだ。作者自身が刊行に寄せた言葉がとても美しいので少しでも興味を持たれた方はぜひ探してみてください。

往来堂書店 / 往来堂書店・三木雄太

- 「山で暮らす男」を読んだ時はヤベエ漫画家出てきたと思いましたが、以降の作品を読むとその発想の幅広さに感服しました。どの話もエネルギーが迸っているようで何か噴き出しそうなモノを感じます。67歳でこのパワー・勢いは凄いです。絵柄に好みがかかるかと思いますが、絵で判断するには勿体無い作品です。単行本タイトルが凄くシンプルで分かりやすいですね。

会社員/ターシ

「WILDERNESS (ワイルダネス)」伊藤明弘

■ 13年ぶりの新刊だ。『ABLE』や『ディオサの首』を経て還ってきてくれた伊藤明弘が、前を変わらぬハイテンションのガンアクションを繰り出してきた作品だ。いや、前にも増して銃器の伶俐さが増し硝煙の香りすら漂ってきそうな絵となった作品を、ここで挙げずして伊藤明弘ファンと言えるだろうか。メキシコからアリゾナへと迫っていた前巻に続く『ワイルダネス8』(小学館)で堀田俊生と芹間喬と玉挑恵那3人が、軽々とはなく銃撃と暴走の果てに国境のフェンスを越えて一安心かと思いきや、襲撃は続いて3人に未だ安寧は訪れない。もはや殺すか殺されるかといった窮地に陥った恵那は果たして銃の引き金を引くのか。守ってくれていた形の堀田に訪れたある運命。そして共に逃亡してきた芹間が陥ったある状況。ひとりとなった恵那に選択の余地はなさそうだが、卒業旅行に來ただけだった少女にはあまりに驚天動地の展開で、すぐにすんなりとは溶け込めないし、溶け込んで良い世界ではない。何の躊躇いもなく銃を撃って額をぶちぬき車で跳ねて吹き飛ばすような男が未だ最前線に立ちづけている上に、それまで下着姿のメイドだった女性が屋敷の外に出て来たこともこれから先に起こる展開の凄絶さを想像させる。ガンアクションとカーチェイスと肉弾戦と情報戦の隙間に落ち込んだ少女のこの先を知るためにも、伊藤明弘には描き続けて欲しいのだ。本当に回復したかは分からないけれど、少なくとも描く絵には一切のブランクは感じられない。物語自体も13年をまるで感じさせないで続いている。ならばノミネートするしかない。ノミネートによって読者がいることを伝えなくてはならない。そして完結へと導かなくてはならない。その後待つ『ジオブリーダズ』の完結を期待して。いつになっても構わない。ずっとずっと待っている。

書評家/ライター/タニグチリウイチ

「ワイン知らず、マンガ知らず」エティエンヌ・ダヴォドー、京藤好男、大西愛子

■ ワイン醸造家はマンガを教わり、マンガ家はワイン作りを教わるという交わりのドキュメンタリー。それぞれの道を突き詰めた人間同士の飾らない言葉に生のまま触れることができる感動があります。

往来堂書店 / 往来堂書店・三木雄太

「わたしたちは無痛恋愛がしたい ～鍵垢女子と星屑男子とフェミおじさん～」瀧波ユカリ

■ 一巻を読み、動悸がしてきます。二巻を読み、心臓が痛くなります。女性あるあるなこの話、響かない女はいるのでしょうか？読み終わった後、好きな男のタイプに基本的に機嫌がいい男。を加えました。

ヘアメイク / 北原由梨

「私の息子が異世界転生したっぽいフル ver.」かねもと、シバタヒカリ

■ はじめは、「異世界ものか～」と手にとらずにいた自分を叱りたい。最後まで読破することをお勧めします！

うすいまりこ鍼灸院 / 碓氷麻里子

■ タイトルだけ聞くと最近よくある「なろう系」かなと思って読み始めたら全然違う流れでびっくりしました。読み始めの方は「いつか転生が成功して息子と会うんだろうな」などとSFな展開かと思っていましたが、次第に息子さん本当に亡くなってしまったんだと言うことに読んでいる側も少しずつ納得していく感覚になりました。今までとは違う漫画体験でした。

フリーランス / 玉澤綾子

■ 息子が事故死したことを受け入れることができず、異世界に転生したに違いない！と考えた元ギャルが、再び子に会う方法を教えてもらいに陰キャ同級生を訪ね、2人で試行錯誤していく。タイトルから想像していた内容と全然違う！とんでもない考えに寄り添い付き合う事が正解なのか、迷いながらも支えていく主人公と、ただひたすらに子に思いを寄せる母親の姿に心打たれました。

主婦 / 赤坂真実

「ワンナイト・モーニング」奥山ケニチ

■ 思い出に残るごはんと、それにまつわるカップル達のエピソードが毎回楽しみ！少しづつ関係が変化していくカップルを見守りつつ、飯テロにあう作品です。

うすいまりこ鍼灸院 / 碓氷麻里子